
ACE COMBAT 04 - Lost Victory -

Ghost SAF

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A C E C O M B A T 0 4 L o s t V i c t o r y

【Nコード】

N 4 3 5 2 M

【作者名】

G h o s t S A F

【あらすじ】

2003年夏、エルジア大戦勃発。

タイトル通り、エースコンバット04をベースにしたファンフィクションです。ストーリーとしては、小惑星『ユリシイズ』の落下後からゲームのミッション1が始まるまでに起きたと思われる出来事が描かれています。その中でもエルジア軍によるサンサルバシオン侵攻から始まり、ユージア大陸を東へ東へと勢力を広げていく期間、つまりはエルジア大戦初期の物語が中心です。

大陸にある国家や勢力が繰り広げる駆け引きと共に、この大戦に参

加する事となつた各国の兵士達の壮絶な戦いを、様々な人物の視点から追体験する事で見えてきた真実とは？ 陸海空の最新兵器から超兵器までもが投入された総力戦は、ここから始まった……。

P r o l o g u e (前書き)

一応、公式設定に出来る限り沿った形のストーリーにしたつもりですが、あくまでも作者の個人的な価値観と解釈に基づいた内容です。なので、その辺りの事情をふまえた上で読んでいただけると幸いです。

Prologue

『その日、世界は崩壊した』

こんな風に言つと、ありきたりな映画か小説に出てくる決まり文句みたいに聞こえるが、これは紛れもない事実だ。なぜなら、その日、まさに世界は崩壊したのだ。

—1994XF04—

後に『ユリシーズ』と名付けられる小惑星がシールズブリッジ大学の観測班によって発見されたのは、1994年10月のことだった。『ユリシーズ』は、直径が約1 mileにも達する巨大な小惑星で、地球に衝突した場合の被害は計り知れないものだった。

その為、より詳細なデータの収集と、国家の枠組みを超えた国際的な協力体制の構築や対策が施されたのだが、結果はあまりにも残酷で無慈悲なものだった。そして、発見から5年後の1999年7月3日、ついに『ユリシーズ』はロシュ限界点を突破し、地球との衝突コースへと入る。

「皆さん！ 私はいま、とても信じられない光景を目にしています。あゝ、なんと表現すれば良いのか……。とにかく、空が、空が墜ちています！」

今でも、こうして目を閉じれば、あの時の光景が脳裏に鮮明に甦る。

「ご覧下さい！ ここはかつて、この国でも1、2を争う観光都市だったのですが、今は完全に廃墟と化しています！ まるで大規模な爆撃を受けたかのような惨状で、至る所から火の手が上がり、人々の悲鳴や叫び声に混じり爆発音も聞こえてきています！」

私の視線の先にあるテレビ画面では、レポーターが目の前に広がる光景を伝えようとして悪戦苦闘している姿が映し出されていた。

その映像や音声は激しく乱れていたが、混乱の度合いは充分すぎる程に伝わってきていた。

その直後、何の前触れも無く突然、映像と音声が途切れて画面にはノイズしか映らなくなった。これは後で知った事だが、中継を行っているテレビ局のあった都市が隕石の直撃を受け、跡形も無く地上から消え去ったからだ。そして程なく、今度は電力供給システムに何らかの被害が出たらしく、街全体が停電で暗闇に包まれた。その時、窓から見える空が不気味に赤く輝き、遠雷のような響きが絶え間なく聞こえていたのを憶えている。

私は決して信心深い人間では無かったのだが、流石に、あの時ばかりは<世界の終焉>というものを意識せざるを得なかった。今に思えば、それ程までに『ユリシーズ』落下の衝撃は私の記憶と心に強烈な印象を残した、という訳だ。

「しかし、それだけで終わらなかつたんだよね……」

過去への回想から現実へと戻ってきた私は、グラスにまだ1/3ほど残っていたウイスキーを一気に飲み干すと、どこか焦点の定まらない目で中空を見つめながら呟いた。そして、アルコールの助けを借りて再び過去の記憶を巡る旅へと出発する。

あの日、1999年7月8日、碎けて1000以上の核と無数の塵へと化した『ユリシーズ』の破片は大地に降り注いだ。この時、『ユリシーズ』のもたらした被害は想像を絶するもので、落下から最初の2週間でユーシア大陸50万人の命を奪い、大陸全体のGDPに換算して18か月分に及ぶ経済的損失をもたらした。さらに、その後も軌道上には『ユリシーズ』の破片が無数に残り、それが時折、思い出したように落下してきては人々に恐怖を与えた。

この為、復興作業は一向に捗らず、難民問題と経済恐慌が長く人々を苦しめる結果となったのだ。最終的には、この難民問題と経済恐慌が新たな騒乱の火種となり、事態を更に悪化させる事となる。

P r o l o g u e (後書き)

感想・評価をお待ちしております。

Mission 1

広がる軌轢

'Opposition

2000年5月6日

ユーゴスラビア大陸の西に位置する軍事大国、エルジャ共和国と大陸各地に散らばる他の多くの小国は長年、『武装平和』と呼ばれる一触即発の均衡状態を保ちながらも辛うじて平和を維持してきた。それは、暗黙の了解の下、お互いに相手を仮想敵国として政治・経済・軍事など様々な分野で非難の応酬と対立を繰り返り広げる冷戦構造とも言い換えられる平和であった。そんな危うい状況の中、各国は小惑星『ユリシーズ』の落下という惨劇に直面した。そして、その事が引き金となり、世界は更なる混乱の時代へと突入する。

「今回の事態につきましては、エルジャ共和国の非協力的な対応にこそ全ての原因があるのです。故に、我々FCUとしましては、遺憾の意を表明すると共にエルジャ共和国には事態解決に向けた迅速な対応を実行に移すよう、関係各国とも緊密に連携し合って求めていく所存です。また、我々は国連からの要請に従い、事態解決に向けた特別法案の制定を検討する為の委員会も設置いたしました」

FCU（ユーゴスラビア自由貿易連合）評議会議長ロバート・シンクレア氏による演説は尚も続いており、会見場に集まった多くの報道陣の前で、全世界に向けてFCUの主張を身振りも交えて熱く語っている。だが、今回の会見にはエルジャ共和国のマスコミは誰一人として招待されていない。早い話が、エルジャ共和国と対立関係にあるFCUの非難声明を全世界に発信すると同時に、自らの正当性を主張する為に設けられた場、という訳だ。

『まったく……。自分達の事は棚に上げておいて、よくまあ、あれだけ好き勝手な事を言えたものだな』

幸運にも、と言うべきか、今回の会見に参加する事の出来た私は、そつと心の中で感想を呟いていた。そして、声を出さずに呆れ半分で苦笑する。

『まあ、長年、エルジアと対立関係にあれば、あんな風に言うのも当然か』

しかし、直ぐに結論に達した私は軽く溜息をつくと、再び評議会長の発言に意識を集中させた。なにせ、公式の場でも堂々と非難を浴びせる程に双方の関係は冷え込んでおり、こうなる事は半ば予想していたからだ。それに、私も仕事で来ている以上、個人的な感情は抜きにして今回の会見の内容を正確に記録しなければならない。故に、どんなに予想通りでありきたりな内容であっても、適当に聞き流す訳にはいかなかったのだ。

『どうか皆さんには、その事を理解していただきたい。会見は以上で終了です。なお、質問は一切、受け付けません』

言いたい事を言い終えると評議会議長は締め括りの言葉を述べ、一方的に会見の終了を宣言して立ち去ろうとした。

「シンクレア議長。今回の会見は、エルジアに対する非難声明と受け取っても宜しいのでしょうか？」

「エルジアが今後、どのような対応を取ると思われますか？」

質問には答えないと宣言していたにも関わらず、会見場に集まった記者達からは次々と質問が投げ掛けられる。もともと、私も彼らに混じって質問を投げ掛けた訳だから、これについては職業病だとは認めるしかない。しかし、結局、評議会議長は一言も発するどころか私達には眼もくれず、雨のように浴びせられる質問を無視するようにして会見場から足早に姿を消した。

「お集まりの皆さん。本日の会見は以上で終了です。最初に申し上げた通り、質問には一切、応じられません」

早々に退席した評議会議長に代わり、今度はFCU評議会の報道

官が会見の終了を改めて告げている。その上、この会見に列席していたFCU評議会の多くの高官達も既に退室しており、ここにも何も情報が得られないのは明白だった。しかし、往生際の悪い数名の記者達は、何か一言でもいいからコメントを得ようと食い下がっていた。

『これだと大した記事にはならないが、このまま留まっただけでもな……』

結局、これ以上粘っただけでも大した情報は得られないと判断した私は、他の記者達に混じるような形で会見場を後にし、一応は先程の記者会見の模様を頭の中で再生する。しかし、その回想は直ぐに終了してしまった。なにせ、会見では熱く語っていたものの、話している内容そのものは十分に予想できたものだった。

『さてと、どうしたものか……』

ありきたりな会見内容から原稿を書かなければいけないかと思うと、ほとんど条件反射のように盛大に溜息が零れた。もともと、そう感じているのは私一人では無いらしく、他の記者達からも似たような雰囲気漂っているのが、こうして歩いているだけでも伝わってくる。私の最初の予定では、知り合いの記者の誰かを捕まえて探りの1つでも入れてみるつもりだったのだが、この様子では時間の無駄にしかならないだろう。なので、こちらから誰かに話し掛ける事はせずに自宅へと帰る事にした。

『こいつは、また徹夜かな』

駐車場に停めていた自分の車へと乗り込んだ私は、大きく溜息をつく。そんな事を呟きながら煙草に火を点けた。そして、肺の奥深くにまで煙を吸い込み、ゆっくりと吐き出すと、フロントウインドウ越しに低く雲の垂れ込めた空を眺める。しかし、そんな事をしても良い考えは何一つ浮かんでこない。

『ま、ありきたりな記事でも無いよりはマシか……』

煙草1本を吸い終わるまで考えていたが、出てきた結論は結局、その程度の代物だった。とりあえず、結論が出た以上は、こんな所

に長居していても意味は無いので、さつさと家に帰って原稿を書く事にした。そこで私は、既に吸殻で溢れ返っている灰皿に吸い終わったばかりの煙草をねじ込むとキーを回して車のエンジンを掛け、ハイウェイのインターを目指して車を発進させた。そして、車を飛ばして自宅へ辿り着くとシャワーを浴びてから服を着替え、コーヒ―片手に原稿の執筆に取り掛かる。

「あの時の記事は確か、この辺に置いたと思ったんだが……。違ったか……？」

そうやって散らかった資料の山と格闘する事を何度も繰り返しながら、かれこれ２時間以上も机に向かっているのだが、肝心の原稿は一向に進む気配が無かった。どう頑張ってみても、やはり、ありきたりで平凡な記事にしかならなかったからだ。

「ああ、これだ、これだ。まったく、毎度の事ながら、この効率の悪さは問題だな。無駄が多過ぎる。とは言え、ここまで酷くなると、整理する気も起きんが……」

私は、散らかり放題で効率が悪くなった原因が自分にある事を棚に上げてブツブツ文句を言いながらも、ようやく探していた資料を見つけ出した。そして、目的の箇所を手早く探り当てると、そこに書いてある記事を目で追い、必要なキーワードを手元のメモ用紙に書き出す。それが終わると、その資料を適当に机の一角に積み上げ、また別の資料を探し始めた。

「ま、大体、こんなもんだろう」

そう呟いて大きく背伸びをすると、筋肉が伸ばされる感覚と共に腰の骨が面白いようにポキポキと音を立てた。そして、半ば習慣と化している行動で、壁に掛かっている時計へと視線を向ける。

「おっと、もう、こんな時間なのか」

思わず、そんな驚きともとれる感想が漏れる。ちなみに、時間は午前７時を過ぎたところである。昨日、原稿の執筆に取り掛かったのが夜の１１時頃だった筈なので、かなりの時間が掛かった事になる。もっとも、資料を探していた時間も相当に長かったので、かな

り効率は悪かったと思う。

『とりあえず、仮眠を取る前にもう1度、読み返しておくか』

そう考えた私は、完成したばかりの原稿に、ざっと目を通すようにして読み返していく。ちなみに、そこには以下のような内容が記されている。

―FCU評議会議長ロバート・シンクレア氏、エルジア共和国に痛烈な批判―

2000年5月6日、FCU評議会は緊急の記者会見を開き、国連が指摘した難民キャンプでの問題について、FCUとしての公式声明を各国メディアを通じて伝えた。それによると、今回の事態が発生した経緯については、全てにおいてエルジア共和国側に責任があり、FCUとしては遺憾の意を表明するとの事である。それと同時に、エルジア共和国に対しては事態解決に向けた迅速な対応を要求するものであり、その為にFCUは、あらゆる手段を使って圧力を掛ける事も検討している、と述べた。そもその始まりは……。

(中略)

なお、国連から要請のあった“エルジア共和国以外の国々への追加の難民受け入れ”については、加盟各国において独自に検討中であり、FCUとしても可能な限り速やかに何らかの対策を採る、との意見に留められた。

キーワード：事実上の国境封鎖と難民キャンプ問題

先の小惑星『ユリシーズ』落下に伴い、ユージア大陸全土で100万人以上の難民が発生し、その受け入れ先が大陸全土を巻き込んだ新たな国際問題の火種となっている。2000年3月現在、最大の難民受け入れ国はエルジア共和国で、その数は20万人にも達している。今回、問題となっているのは、2000年4月にエルジアが発表した渡航ビザの発給基準の大幅な引き締めである。これにより、エルジアへの入国は一部の人間を除いて極めて困難な状況となり、事実上の国境封鎖に等しい状態となった。この新たな政策発表を受け、エルジア国内では陸海空の全ての輸送手段を利用して既に

国内にいる難民の移送と、新規の難民の受け入れ制限に乗り出したにも関わらず、エルジアとの国境沿いにある難民キャンプへは続々と人々が集められ続けた。その結果、極端な過密状態による治安・衛生面の悪化が極めて深刻な状態にまで進行する事態となる。この状況を重く見た国連による調査報告によると、難民キャンプでは最早、人間が生活できる最低のラインにまで環境が悪化している、との事である。ただし、事態がここまで悪化した要因の1つには、一部のNGOによる無計画な難民輸送がある、との意見も囁かれている。

―リーヴェン：CUN通信―

「ふう……。特に問題は無さそうだな」

最後まで読み終えた私は軽く溜息をつく、また大きく背伸びをし、そのまま椅子の背もたれに全体重を預ける。そして、その姿勢のままで一息入れた後、完成した原稿を保存してからパソコンの電源を落とすと仮眠を取る為にベッドへと向かった。後は、締め切りまでに送信すれば良いだけなので、今は少しでも長く休んでおきたかったのだ。なお、余談ではあるが、私の書いた記事の評判は、良くもなければ悪くもなかった。

2000年5月9日

この日、先に行われたFCUのロバート・シンクレア議長による記者会見で非難の的にされたエルジア共和国が会見を開いた。そして、会見が始まるまで優に30分以上はあるにも関わらず、首都フアーバンティにある国会議事堂の記者会見場には多数のマスコミが詰め掛けていた。

「なあ、今回の会見は、あの声明に対する痛烈な批判になるのかな？」

「そりゃ、そうだろう。あそこまで言われて黙ってられるかよ」

「もう、完全に冷戦だな」

議事堂周辺ではマスコミや一般市民を問わず、そのような会話が挨拶代わりに交わされる程、両陣営の関係は冷え切っていた。さらに、お互いに批判と非難を公然と繰り返してきた歴史もあり、今回の会見が火に油を注ぐ結果になるのは子供でも理解できた。

「では、これより記者会見を始めたいと思います。なお、今回の会見では質問は一切受け付けませんので、何卒、ご了承ください」

予定通りの時間にエルジア議会の報道官が壇上に上ると、軽く会見場全体を見回し、彼は淡々とした口調で会見の開始を宣言した。

「それでは、ルシコフ副首相。よろしく、お願いします」

そう言うつと報道官は横を向いて副首相に合図を送ると、彼と入れ替わる形で壇上から立ち去り、他の政府関係者達の列に加わった。そして、壇上に並べられた無数のマイクの前へと進み出たルシコフ副首相は、ゆつくりと会見場の全体を見渡してから正面を見据えて話し始めた。

「FCU評議会による声明は、彼らの自分勝手で一方的な都合と責任転嫁以外のなにものでもありません。彼らは我々の行為を“人道に対する罪”であるかのように主張していますが、我が国の取った対応は主権国家として認められた権利を行使したに過ぎず、それを拡大解釈して非難する事こそ非難されるべき行為です」

大方の予想通り、この会見はFCUに対する非難で幕を開けた。

「我が国は既に20万人を超える難民を国内に受け入れており、国外にいる難民への救援活動にも国を挙げて全力で取り組んでいます。それに引き換え、彼らFCUは、目に見える具体的な行動を何一つ起こしていません。そんな彼らに、我が国を非難する権利があるのでしょうか？ いいえ、ありません。この矛盾点については国連からも指摘されており、早急に対策を実行に移すよう要請があった事は世界中の誰もが知っています。もし、彼らが本当に対策を実行に移す気があるのであれば、我が国は喜んで彼らにも協力する事を約束します」

このように、公式の場で堂々と皮肉を込めるあたりに、両陣営が抱える問題の根深さが窺える。そして、記者会見という名を借りた非難は続く。

「……と、彼らはまるで自分達だけが被害者であるかのように振舞っていますが、現実には我が国も被害者なのです。あの未曾有の大災害によって最も多くの犠牲を出したのは、他ならぬ我が国なのです。ですが、それでも私達は窮状に苦しむ人々に救いの手を差し伸べる事を諦めませんでした。それは我が国と、そこで暮らす国民達が『少しでも多くの人々を救いたい』という強い使命感を持って行動したからに他なりません。そこには、ただ純粹に『助けたい』という想いがあっただけなのです。そして、そういった事情を無視するかのようなFCUの発言は断じて許されるものでは無く、その事に対して我々は……」

こうして、20分以上も休む事なく延々と自分達の行動の正当性とFCUの不遜な態度に対する批判を話し続け、ようやく会見は終了を迎えようとしていた。

「……という事を、この会見を聞いた良識ある方々に理解していただきたい。我々の願いは、それだけです」

そう言っ言葉を切り、僅かな時間、会見場に集まった人達の反応を窺う。

「本日の会見は以上です」

自分達の主張を示せたからなのか、そう締め括るとルシコフ副首相は体の向きを90度変え、壇上から立ち去ろうとする。その瞬間、会見場に集まった記者達の間から一斉に質問が発せられる。

「では、今回の事態について、エルジアには一切の責任が無いと？」

「具体的な解決策についての話が出てきませんでした。その辺りの事情は、どうなっているんですか？」

「これでは、何の解決にもならないのでは？」

ここでも同様に、記者達から次々と発せられる数多の質問を完全に無視した副首相は、他の政府関係者を引き連れ、警護の人間

に囲まれるような形で会見場から早々に姿を消した。そして、後の事はエルジア議会の報道官が引き継ぎ、集まった記者達に会見終了を告げていた。

「最初に申し上げた通り、質問には一切答えられません。なお、お帰りの際は、あちらの扉からお願ひします」

報道官は、そう大声で話しながら会見場後方の扉を指し示し、一刻も早い退室を促そうとしている。しかし、多くの記者達は少しでも多くの情報を聞き出そうと必死で食い下がり、なかなか立ち去るうとはしなかった。

「ぜひ、一言だけでもコメントを」

「この件について、FCUから何らかの回答があると思われますか？」

既に会見の終了が宣言されているにも関わらず、記者達は次々に質問を投げ掛け、どんな些細な事でも構わないので、今度は報道官からコメントを引き出そうとしている。

「本日の会見は終了です。どうか、お引取りを」

だが報道官の方も、一步も引き下がらずにノーコメントの姿勢を貫いている。そして、お互いに平行線を保ったまま数分が経過した頃、これ以上、この場所に留まっても時間の無駄だと判断した報道官が警護の人間と共に会見場を後にする。

「結局、何の収穫も無しか」

「くそつ。こんなんじゃ、まともな記事なんて書けないぞ」

話を聞けそうな政府関係者が誰もいなくなった事で、記者達も口々に文句を呟きながら立ち去り始めた。こうなると早いもので、僅か数分後には会見場に1人もいなくなり、先程までの騒々しさが嘘のように静まり返っていた。

2000年5月10日

ユージア大陸中央部から東に約450km離れた場所に位置する内陸の都市ルーヴェンには、様々な国際機関の本部が集まっている。そして、その中には勿論、FCU本部も含まれていた。この日、FCU本部ビルの上層階にある会議室ではFCU評議会を構成する幹部クラスのメンバーが集結し、昨日おこなわれたエルジアの会見についての話し合いが長時間に及んで続いていた。

「やはり、我々へ挑戦状を叩きつけてきましたな」

「好きに言わせておけば良いさ。今更、その程度の事でどうにかなるものもあるまい」

「まあ、そうだな」

元々、反エルジアを公言してはばからないFCUだけに、今日の会議でもエルジアに対する敵対的な発言が大多数を占めていた。

「とは言え、ここら辺りで何か行動を起こした方が無難かもしれない。なにせ、ここ最近の世論を見ると、我々の立場も決して安泰だとは思えなくなった気がするのだ。それほど多くは無いが、我々に対する批判が増加傾向にあるのは事実だからな」

「ええ、それについては私も前々から気にはなっていました」

そういつた意見が出たところで、急に場の雰囲気重たく沈んだようなものになる。どうやら、そう感じているのは、この二人だけでは無かったようだ。

「それで、何か良い案はあるのか？」

「今のところは経済制裁が妥当かと思いますが、他に何か意見はありますか？」

シンクレア議長からの問い掛けに、メンバーの1人が即答する。

「私は賛成です」

「確かに、それが妥当でしょう」

なお、制裁を課す場合の最も典型的な手段とも言えるのが経済制裁である。それ故、すぐに数人が賛成の意を表明する。しかし、反エルジアを大々的に掲げていても、FCU内で意見が完全に統一されている訳ではない。FCUに参加している国家間でも対立は少な

からず存在している。その為、数人のメンバーから早くも反対意見が出された。

「私は経済制裁には反対です。ここは1つ、我々が国連の提案を受け入れ、世論に対して誠意を見せる方が得策かと」

「国連の提案を受け入れるかどうかはともかく、私も制裁には反対ですね。そんな事をすれば、我が国の経済活動にまで被害が拡大するのは必至ですから」

すると、今度は制裁賛成派のメンバーが反対意見に対して反論を述べる。

「それは、あなた方の国がエルジアからのエネルギー供給に大きく依存しているからでしょう？ なにせ、国内で消費されるエネルギーの60%以上をエルジアに頼っている身としては、報復の供給量削減や値上げが怖いのでリスクは避けたい、と」

この意見は、まさに凶星である。下手に圧力を掛ければ、間違いなくエルジアは報復処置としてエネルギー問題を切り札に使ってくる。そうなれば、自国でエネルギーを賄えない国は深刻なエネルギー危機に陥り、国内経済が崩壊するのは明らかである。他にも、工業原料をエルジアから輸入している国もあれば、金融資産の多くをエルジア国内に保有している国もある。その依存度に大小はあるものの、実際に経済制裁を実行に移せば、最終的には自分達の経済も打撃を受けるのが現状である。

「ですが、このまま何もしなければ、我々の影響力は弱まる一方でしょうね。そんな事態に陥れば、苦勞の末に手に入れた利権も地位も名誉も全て失うのは確実。もっとも、それを甘んじて受け入れると言つのであれば、止めるつもりはありませんが……」

FCU内でも反エルジアの急先鋒で知られる人物が痛烈な一言を浴びせる。しかし、そんな事は言われるまでもなく全員が百も承知だった。誰しも、手にした利権や権力は手放したくないのが本音である。

「だが、経済力を失った国では大した儲けは期待できんぞ。国家基

盤そのものが傾いた国で権力を握って何の得になる？」

「確かに、あなたの仰る事は正論ですが、自分自身が何の権力も手にしていない国家が繁栄したところで、何一つ利益が得られないのも事実です」

ここに至り、双方の意見は完全に平行線となっていた。今でこそ、外交面や軍事面においてもエルジア共和国と対立する連合として知られているが、本来のFCUは、その名が示す通りの経済同盟である。しかも、反エルジア体制を採る事で急速に拡大したが故に、加盟国間での民族・宗教・資源利権・領土といった問題を未解決のまま放置していたのだ。その為、加盟国間での意見統一がままならず、それによる対応の遅れや政治的な軋轢が組織にとって大きな足枷となっていた。

「とにかく、ここら辺りで何らかの具体策を打ち出さなければ、我々の立場も危うくなるのは明らかだ。各自、その事を念頭に置いた上で我々が今後、如何なる行動を取るのが最善かを慎重に考えていただきたい。それで良いかな？」

これ以上は、いくら議論を続けても各代表が自身の利益確保を優先する意見を主張するばかりで進展は無いと判断し、シンクレア議長が話を纏めようとする。

「長い時間、ご苦労だった。この続きは、また明後日に」

言い終わると同時に議長は席から立ち上がり、そのまま会議室から出て行った。そして、既に日付が変わろうとしているような時間となった事もあり、他のメンバー達も議長の提案を暗黙の形で了承して会議室を後にし、この日の会議は終了となった。

2000年5月13日

正午を過ぎた頃、エルジア共和国首都にある首相官邸では、昨日の午後に発表されたFCUからの通告に対する緊急閣議が開かれて

いた。

「ついに、実力行使に出てきたか」

「まったく。なんて、厚かましい連中なんだ。毎回毎回、金の掛かる物事は全部、こちらに押し付けておきながら、自分達は利権を貪る事にしか興味が無いときている。ならば彼らには、それ相応の代償を支払って貰うしかないな」

ちなみに、こちらの会議も似たようなもので、始まる前からFCUに対する敵意が参加者の間に満ちていた。

「諸君、静粛に。これより、緊急の会議を始める」

リーベルマン首相の開始宣言に、それまでの空気が一変し、急に室内が静かになる。

「宜しい。さて、本日の議題だが、昨日のFCUの発表は諸君も耳にしたと思うので、今回は早速、本題に入らせてもらおう」

そう言うつと首相は傍らに座っていた首席補佐官に目配せをし、今回の緊急閣議の議題について説明をするよう求める。

「本日の議題は、昨日の午後15時にFCUが発表した我が国に対する経済制裁の真意と、それへの対策についてです」

首席補佐官の言葉に会議の参加者からは一様に溜息が漏れる。今までは対立関係にあったとは言っても、せいぜい非難声明の応酬程度で済んでいたのだが、ついに現実的な行動となって表れたのである。つまり、これからは今まで以上に慎重な対応が求められる事を意味しており、それを考えると気が滅入ってくるのも道理だった。

「まずは、お手元の資料をご覧ください。それが、今回の経済制裁による影響を予測したものになっています」

首席補佐官が促すと、会議室にいる全員が一斉に手元の資料を読み始め、暫くはページを捲る音だけになった。

「この数字を見る限りでは、意外と我が国の経済に与える影響は小さいように感じるが、過小評価して都合の良い数字を並べた訳ではあるまいな？」

「その点については問題ありません。これを作成したチームの報告

では、これでも最悪の事態を想定したそうです。念の為、得られたデータを今日の会議で使用する事は伏せておきましたので、信用して大丈夫です」

閣僚の一人が疑問を口にする、首席補佐官は直ぐに答える。

「だとすると、この制裁の目的は……」

「反エルジアを標榜するFCUとしての体裁を取り繕うのが最大の目的。違うかね？」

結論を言おうとした閣僚の言葉を遮り、リーベルマン首相が結論を述べた。そして、その結論に誰もが同意の表情を示す。

「ですが、彼らの真意がどうであれ、我々に対して制裁の実施という形で抵抗の意思を示してきたのは紛れもない事実です。こちらとしても、それ相応の経済制裁を加え、我々の意思を伝えるのが正しい選択でしょう」

すると、対外強硬派でタカ派の急先鋒としても知られるルシコフ副首相が早くも報復の経済制裁実施を提案した。そして、この副首相の提案に6割がたの閣僚は同意する態度を見せたものの、最終的な決定権を持つ首相は難しい表情をしたまま黙っていた。

「リーベルマン首相。先に仕掛けてきたのは彼らの方です。このまま我々が何もしなければ、彼らを増長させるだけです。そして、我が国は“弱腰で行動力の無い国”というレッテルを貼られてしまうのです。だからこそ、我々も『一步も引く気はない』という事をFCUと、国際社会に向けて明確な態度で示さなければいけないのです」

ルシコフ副首相は語気を強めると一気にまくし立て、首相に強気の姿勢で臨むよう圧力を掛ける。しかし、首相の表情は相変わらず険しいままで、未だに判断を決めかねているようだった。

「首相。ご決断を」

重苦しい沈黙が暫く続いた後、首相の態度に業を煮やしたのか、ルシコフ副首相が僅かに身を乗り出しながら決断を迫る。

「たとえ弱腰だと言われても、我が国は経済制裁を行わない」

それから更に数分間の沈黙が続き、ようやくリーベルマン首相が決断を下す。だが、それで納得するようなルシコフ副首相では無かった。

「もう1度、よく考えて下さい。そんな事をすれば、ますます奴らの思う壺です。あいつらは、こちらが下手に出ているのを良い事に、今までも好き勝手に振舞ってきたんですよ。その上、ここまでされて何もしなければ、それこそ……」

「そんな事を君に説明されなくても分かっている！　だが、決断を下すのは私だ！」

リーベルマン首相は珍しく語気を荒げると、ルシコフ副首相の言葉を強引に遮った。そして首相は、そういう決断をした理由を皆に伝える。

「確かに、FCUのやり方には目に余るものがある。しかし、このまま報復合戦を続けていても何の意味もない。お互いに疲弊し、共倒れになるだけだと私は考えている。今は苦しくても、誰かが止めなければならぬのだ」

半ば諭すように自身の考えを述べると、リーベルマン首相は全員の顔を見回して反応を窺った。まだ何か言いたそうな顔をしている者も多数いたが、反対意見を述べたところで首相の考えが変わらない事も理解していたので、この場では誰も何も言わなかった。そして、一応の結論が出た事で、今回の議題に関する緊急の閣議は終了を迎えた。

2000年5月14日

「こうなった以上、例の計画を前倒ししても強引に実行に移すしかないな。最早、それしか現状を打破する方法は無い」

この計画に深く関わっている者だけが知っている連絡方法で指定された時間と場所に全員が揃った途端、リーダー格と思われる人物

が苛立ちを滲ませた口調で話し始める。この日は、FCUがエルジアに対して実施すると表明した経済制裁に対する緊急閣議が開かれた翌日である。

ちなみに、彼らがいるのはエルジア共和国の首都、ファーンテイ郊外にある廃墟となった建物の地下である。そして、彼ら全員が目立たない格好をしているものの、本来であれば、この場に居るとは到底おもえない立場の人間ばかりだった。

「ですが、まだ各方面への根回しが充分とは言いません。このまま実行した場合、我々の関与が明るみになる危険性があります」メンバーの1人がリーダー格の男の顔を窺いながら慎重に言葉を選び、現在の状況について説明を行う。

「その点については、私の方でなんとかするから心配するな。それよりも、君達は1日でも早く計画を実行に移せるよう、必要な手続きを終わらせる事に集中するんだ」

「分かりました。ただ、他にも経費や人員の問題が……」

「ああ、それらについても問題は無い。既に手は打ってある」

どうやら、そういった発言が出る事も想定済みだったらしい。最後まで言わず、リーダー格の男が途中で話を遮る。

「素早い対応に感謝します」

問題点に関する報告を行っていた男が軽く頭を下げ、決まりきった礼を述べた。それを受け、リーダー格の男は次の議題へと話を移した。

「それはそうと、この前の情報漏れに関する対応は見事だった」

「いえ、私は自分に与えられた役目を果たしたに過ぎません。むしろ、情報漏れを未然に防げなかった事を、心より詫び致します」

先程とは違う男の方へ顔を向け、今度は賞賛の言葉から話を始める。しかし、相手の方は深く頭を下げて自身の失態について詫びた。「相変わらず、君は自分を謙遜するのが得意だな。あれは偶然が重なって起きた事で、誰も君を責めてなどいないさ」

そう言ってリーダー格の男は彼の肩を軽く叩き、顔を上げるよう

合図した。そして、その情報漏れが起きた時の状況を思い返す。

『そういえば、あの時も今日のような集まりを盗撮されたのが始まりだったな』

そう心の中で囁いた彼の脳裏には、その“事件”に関する出来事が鮮明に浮かんでいた。幾度目かの集まりを偶然にもカメラに収め、その光景を密会か政治的な裏工作の現場だと勘違いした男がいたのだ。彼は、それをネタに現金を脅し取ろうと脅迫電話を掛けたのだが、そこに映っていた面々が持つ組織力と情報収集能力を甘くみていた事が運の尽きだった。

すぐさま、ありとあらゆる方法で個人情報調べ上げられ、脅迫電話を掛けてから24時間後には全ての個人情報把握されていた。こうなると簡単なもので、個人情報把握された数時間後には殺され、彼が持っていた写真やデータの類も全て処分された。

「なにより、情報が外部に漏れるのを防いだ事は紛れもない事実だ。私は、その事を高く評価しているんだ」

「自分を評価してくれた事には感謝しています。ですが、それは結果論であって、計画を危険に晒したのも事実ですから」

そう言って彼は、あくまでも自分に責任がある事を強調する。すると、その様子にリーダー格の男は微かに満足気な表情を浮かべ、彼に処理を任せて正解だったと確信するのだった。そして、リーダー格の男は再び過去の出来事を思い返す。

『確かに、彼の言う通り、我々を脅迫しようとした奴が嫌われ者で交友関係が乏しかったのには助けられたな。おかげで、あいつ1人を殺すだけで済んだんだから。おまけに、奴は情報の管理も甘かつたらしく、死体ごと証拠品を“失火による事故”として処理できたのも幸運だったと言えるだろう』

リーダー格の男は最後に、誰にも気付かれないぐらいの大きさだったけど、小さく鼻で笑うと過去の回想を締め括った。そして、目の前に立つ人物に声を掛ける。

「なら、2度と同じミスはしない事だ。この意味が分かるな？」

「はっ。肝に銘じておきます」

リーダー格の男は敢えて含みを持たせた言い方をした。なぜなら、目の前にいる人物はケジメをつける事を望んでおり、リーダー格の男も話が丸く収まるのなら、それで良いと判断したからだった。

「さてと、次は……」

そう言いながらリーダー格の男は集まっている者達の顔を順繰りに見ていくと、報告を受けては対応策を指示する、といった事を繰り返していった。そして、必要な案件を一通り確認し終わると、改めて全員の顔を見渡して尋ねる。

「他に何か報告すべき事柄はあるか？」

「いえ、ありません」

「こちらも、今のところはありません」

だが、集まった者達は口々に報告する事柄は無いと言い、今回の集まりは30分足らずで終了した。そして、リーダー格の男が終了を宣言する。

「では、本日の報告会は解散とする。各自、周囲には十分に注意を払って立ち去るように。最近は、どこから監視されているか分からないから」

どこか皮肉を込めたような最後の一言に、数人が乾いた笑いを浮かべる。そして、それぞれに少し離れた場所に停めてあった車へと歩いて行き、何人かはスモークウィンドウになっている車の後部シートへ滑り込んだ。その後は、ここに集まっていた事を隠すように出発する時間と方向を微妙にずらし、なるべく目立たないよう注意を払いながらも素早く立ち去った。

Mission 1 (後書き)

書いた本人が言うのもなんですが、長い上に読みにくいですね。どうやら、その辺が今後の課題、といったところでしょうか……。こんな感じですが、末永く見守っていただけると幸いです。

Mission 2A

鍵を握る者たち

Keymen

2000年7月8日

今日は、あの『ユリシーズ』落下の惨劇から丁度、1年が経過した日である。そして、あの未曾有の悲劇を忘れない為に、ユージア大陸各地で様々な追悼行事が行われていた。もっとも、国も人も災厄の痛手から完全に回復していない事もあり、感傷に浸ってばかりもいられないのが現実だった。

「よお、ジャック。ジャック・トラヴィスじゃないか」

いきなり自分の名前を呼ばれ、私は声のした方へと反射的に振り向く。すると、そこには私が空軍に入ったばかりの頃に知り合った同期の親友の顔があった。彼とは空軍に入隊したばかりの時に宿舎で同室になり、すっかり意気投合したのだが、私は戦闘機パイロット、彼はヘリパイロットの訓練過程へと進んだ上に配属された基地も別々だったので、最後に顔を合わせてから約5年が経過していた。「それにしても、随分と久し振りだな。元気にやってたか？」

「まあ、それなりに、な」

私が気の無い返事をした為に、彼は怪訝な顔をする。

「暫く見ない間に雰囲気が変わったみたいだが、何かあったのか？」
その為、彼は心配そうな表情を浮かべて聞いてきたのだが、私は直ぐには彼の問い掛けに答える事ができなかった。そして、そんな態度が余計に彼を心配にさせたらしい。

「なあ、本当に大丈夫か？俺で良ければ、いつでも相談にのるが……」

「ちょっと疲れてるだけだから。でも、心配してくれてありがたいな。やっぱ、お前は良い奴だよ」

私は、そんな小細工が通用しない事を百も承知で大丈夫な素振りを装って返事をする。

「まあ、お前さんがそう言うんなら、これ以上は聞かないさ」

そう言っただけで彼は詮索を止める。こういった事情を察してくれるところも、私と彼が親友になれた理由の1つだった。

「だったら、これから飲みに行かないか？　ちようど、この近くに良い店を知ってるんだ。こうして久し振りに会えたんだし、たまには男2人で盛大に飲み明かすのも悪くないだろう？」

彼は、さっきまでの真面目な表情とは打って変わって人懐っこい笑顔になると、一緒に酒でも飲もうと誘ってきた。だが、この誘いさえも今の私には即答できなかった。

「それとも、家で愛する家族がパパの帰りを待ってるんなら、俺の事は気にしなくてもいいぜ。また今度、大丈夫な時に誘うからさ」

私が返事に迷っているのを、家族が待っているからだと勘違いした彼は、気を利かせてフォローしてくれる。

「実は、家族はもう居ないんだ」

少しだけ逡巡した後、私は彼に真実を告げる事を決め、そう短く答えた。もっとも、その声は自分でも驚くぐらい暗く沈んだもので自分が話している感覚さえしなかった。

「え、それって、どういう事だ？」

「1年前の『ユリシーズ』だよ。あれの落下のゴタゴタに巻き込まれて、妻も子供達も全員、私の前からいなくなったんだ」

1年前に家族が死んだ事を告げると、当然のように、2人の間には気まずく重苦しい空気が立ち込めた。

「そいつは、嫌な事を思い出させちゃったな。知らなかったとはいえ、悪い……」

こんな状況でも先に沈黙を破ったのは彼の方だった。そして、その表情には、『本当に悪い事をした』という気持ちが簡単に読み取

れる程、はつきりと表れていた。

「別に、お前は悪くないさ。だから気にするなよ。そもそも、そんな事になつてゐるなんて、お前は知らなかったんだろ？」

「ああ、でも……」

私は出来るだけ穏やかな表情を取り繕うと、そう言つて彼を慰める。しかし、彼の表情は暗いままで、やや俯き加減で小さく呟いただけだった。そして、そんな親友の姿を見てみると、何故だか自分の方が罪悪感で押し潰されそうになる。だから私は、不自然なのは承知で明るく振舞う事にした。

「そういう訳だから、今日は遠慮するよ。また今度、誘つてくれよな。その時は、俺が奢るからさ」

「ああ、また今度な。それから、今日は本当に悪かった」

そう言つて再度謝る彼の肩を軽くポンポンと叩くと、私は1人で夜の街を当ても無く歩き出した。その際、まだ彼は何か言いたい事があつたらしく、慌てて口を開こうとしたが、結局、それ以上は声を掛けてくる事も追いかけてくる事もしなかった。しかし、今の私には、そんな彼の行動が逆にありがたかった。なぜなら、どうしても今晚だけは1人で過ごしたかったからだ。

『ここに、こんな店があつたのか……』

彼と別れてから20分ほど夜の街を彷徨つた先で、私は一件の目立たないバーを見付けた。この辺りは帰る方向と逆になるので、普段は滅多に足を運ぶ事は無い。その所為か、こうやって訪れるまでここに店がある事さえ知らなかった程だ。しかし今は、普段あまり出入りしない店の方が良かった。そういった店の方が知り合いに会う可能性も低く、また誰かに気を使う事も無ければ、使われる事も無いと思つたからだ。

「いらつしやいませ」

重たい扉を押し開けると、カウンターに立つてグラスを磨いていたバーテンダーが声を掛けてくる。ざっと店内を見回してみたが、私以外に客は3人しかおらず、店員もカウンターに立っているバー

テンドーだけだった。それに、店自体も10人程で満席になりそうな広さしかなく、薄暗い照明や哀愁の漂うBGMの影響もあってか、落ち着いた雰囲気というよりも物悲しい感じのする店だった。

「ウイスキーをロックで。なるべく、きついのを」

私は店の奥にある壁際のカウンター席へ腰を下すと、カウンターを挟んだ反対側の棚に素早く視線を走らせて酒の種類を大まかに確認し、その中から適当なやつを注文する。

「かしこまりました」

そう言うところテンドーは棚にあった数種類のウイスキーのボトルから1本を選び出し、氷を入れたグラスに静かに注ぐと、私の前へと置く。

「どうぞ」

私は差し出されたグラスを手にとると、一気に中身の3分の2近くを飲み干した。すると、まるでやかな口どけとは裏腹に焼けるような刺激が乾いた喉を流れ、瞬間的に体温が上昇するような錯覚に陥る。だが、それは決して不快なものでは無く、軽く息を吐いてから残りも一気に飲み干した。

「もう1杯、注いでくれ」

空になったグラスをカウンターの台へ置くと同時に中の氷がカランと澄んだ音を立て、半ば条件反射のように私は追加を注文していた。すると、先程と同じようにテンドーがグラスにウイスキーを静かに注ぎ、瞬く間にグラスは琥珀色の液体で満たされる。そして、私もまた、先程と同じように一気に飲み干してグラスを空にする。

「もう1杯」

また追加を注文し、それに合わせて空になったグラスの中にウイスキーが注がれる。しかし今度は、それに口を付ける事はせず、薄暗い照明の下で揺れながら鈍い光を放つ液体をじっと眺めていた。すると、家族5人で暮らしていた頃の楽しかった思い出が次々に脳裏に浮かんできた。だが、その光景は簡単に崩れ去り、“愛しい

家族と過ごした日々は二度と返ってこない”という現実を再認識させられ、絶望に打ちひしがれる。

「くそっ！　なんで……、なんで、俺だけが生き残っちまったんだ。あの時、あんな事を言わなければ、今でも家族全員で暮らせたかもしれないのに……」

急激にアルコールを体内に取り込んだからなのか、今の感情が声になって零れ、それを流し込むかのように3杯目のウィスキーも一気に飲み干してグラスを空にする。そして、特に意味も無く、空になったグラスの中の氷を見つめた。すると、愛する家族と最後に言葉を交わした時の記憶が鮮明に甦る。

『俺の事は心配しなくていいから、お前達は安全な所へ避難してくれ。任務が終われば、必ず休暇を取って迎えに行くから、それまでの辛抱だ。大丈夫、約束は守るよ』

そう言っただけで私は妻と3人の子供達を送り出した。本当は家族全員で避難できれば良かったのだが、軍人である私は任務を優先しなければならぬ以上、一緒に行く事は出来なかった。そこで、妻と子供達だけでも避難させようとしたのだ。しかし、離れ離れになる事に不安を覚えた妻は、なかなか納得してくれなかった。それでも私は根気よく彼女の説得を続け、ついには納得させる事に成功した。

『それなのに、あんな事になるなんて……』

あの時ばかりは、私も神を本気で呪った。なぜなら、避難している最中に交通事故に巻き込まれ、妻と子供達が命を落としたからだ。しかも、私達の住んでいた街には『ユリシーズ』の欠片は落下してこず、結果的には避難する必要すら無かった。それなのに、私が無理を言っただけで家族を死なせてしまった。はつきり言って、私が殺したも同然だ。

『いったい俺は、どこで間違っただろうな……？』

家族が死んでからは、ほぼ習慣となりつつある言葉を心の中で繰り返し呟き、答えの出ない問題に頭を抱える。周りからは、『家族を失った悲しみと、自分自身への怒りの感情が整理できていない』

と言われた事もあった。実際、自分自身を恨んだ事もあったのだから、そういった面もあるのだろう。

『だが、やっぱり俺は……』

そう言いかけたところで、いつものように答えの出ない迷宮に迷い込んだ事に気付いて言葉を途中で止めた。それは、この1年を後悔と自責の念と共に過ごしてきた私の日々を象徴するものでもあった。そして、このままでは何も解決せず、先に進む事もできないのを頭では理解していても、未だに心が納得していないのも事実だ。なにせ、こうやって命日に1人で酒を飲んでいると、それを痛いほど実感させられたのだから。

「帰ろう」

この一言が結論だった。結局、ここにも居場所が無い事を思い知らされた私は、カウンターに勘定を置いて重たい足取りで店を後にした。そして、店の外に出たところで腕時計に目をやると、既に日付が変わっている事に気付く。

『さて、うまくタクシーが捕まるかな』

そんな事を考えながら私は幹線道路の方へ向かい、タクシーを探しながら歩き出した。本音を言えば、今日ぐらいは家族との思い出が強く残る自宅に帰りたくなかったのだが、この近くに安く泊まれるホテルが無い事は知っていたし、こんな時間ではチェックインも難しいだろう。

なにより、日が昇って朝になれば基地へと行き、本日の飛行任務をこなさなければならないので、ある程度は体を休めておく必要がある。その為、時間が来るまで街をさ迷い歩く訳にもいかず、私には家へ帰る以外に選択肢は無かった。

「気のせいかな、今日は酔いが回るのが早いな」

視界に入る光景がいつもより大きく揺れるのを感じ、そんな感想を漏らす。そして、ふと深夜の街の空を見上げると、そこに浮かぶ星たちも何故か滲んで見えた。

2000年9月3日

まだまだ暑い日が続く9月上旬、私は上官から急に言い渡された2週間の派遣任務で自身が所属する飛行隊のホームベースとなっている空軍基地を離れ、乗機のSu-37と共にユーゴスラビア大陸西方のベリノ空軍基地を訪れていた。この基地では実験機や試作機の飛行テストが連日のように行われており、私に与えられた任務は、模擬空戦における最新鋭機の対戦相手兼分析官としての役割だった。

『今日は、これで終わりだな』

夕焼けが基地全体を覆う中、フライトを終えた私は乗機をエプロン地区までタキシングさせると、整備員の誘導に従って機体を所定の位置まで移動させると停止させた。そして、キャノピーを開けると各種システムの電源を落としてからエンジンを切り、今日1日の飛行任務が終わった事を実感しながらハーネスを外しに掛かる。

「大尉。お疲れ様です」

「ありがとう」

ラッタルを掛けた整備員の1人がコクピットの高さまで上り、劳いの言葉を掛けてきた。そこで私はヘルメットを脱ぎながら彼の方を向き、氣遣ってくれた事への礼を言ってからヘルメットを手渡した。そして、コクピットから抜け出すとラッタルを降りていき、数時間ぶりに自分の足で大地に立つ。すると、機体の周囲では整備員達が忙しそうに動き回り、早くも機体の整備に取り掛かっているのが見えた。

『さてと、私も自分の仕事をしないとな』

そう心の中で呟いた私は、彼らの邪魔をしないように注意しながら機体の周囲を歩き、自分の目と手で機体各部をチェックしていく。そして、一通りチェックした後、機体の状態や飛行中に感じた事を専用の記録用紙に記し、それをクルーチーフに渡した。

「クリンスマン大尉。あの新型戦闘機と模擬空戦を行った感想は？」

まるで、そうやってフライト後の機体チェックを終えるのを見計らったかのように1人の技術者が私に駆け寄り、少し離れた所に駐機している機体を親指で指差しながら尋ねてきた。

「悪くない。それどころか、むしろ、想像以上の素晴らしい動きの連続で驚かされたよ。ただ、若干、その動きに切れが無いようにには感じたが……」

私は実際に模擬空戦で新型機と戦った際に感じた事を素直に述べる。すると、目の前にいた技術者は盛大に溜息をつく、私の感じた疑問に答えてくれた。

「それは、あなたの操縦テクニックやセンスが常人を遥かに超えている証拠ですよ。確かに、実験的要素の多い機体なので色々問題は抱えています、それでも既存の機体相手には引けを取らない能力を秘めているんです。それに、今までにも何回か模擬空戦は行ってきましたが、撃墜判定を受けた事は一度も無いんですから」

「そうなのか？」

私が聞き返すと、その技術者は半ば呆れたような表情で頷いた。

しかし、直ぐに真面目な表情に戻ると、再び新型機について熱く語り始めた。

「まあ、パイロット個人の能力云々については私の専門外ですが、それを差し引いても凄い機体なのは分かりましたよね？」

今度は私が静かに頷く番だった。あの新型機については噂で多少は聞いていたのだが、私は噂を信じない性質だったので、今までは軽く聞き流していた。だが、こうして実際に戦ってみた結果、私は自分の考えを改めざるを得なかった。なぜなら、あの新型機は次世代の超高性能機に相応しい機体性能を間違いなく有していると感じたからだ。すると、技術者は気を良くしたのか、得意げな表情で解説を続ける。

「あらゆる速度域で最高の機動性を発揮できるようにした独自の可変翼機構と三次元推力偏向ノズルの搭載。ドライ状態でも大推力を発揮可能なエンジンがもたらしたスーパークルーズ能力と、どんな

戦闘機をも上回る最高速度性能。さらに、豊富な兵装搭載量と長距離進攻能力に加え、非常に高いステルス性も有しています。勿論、フライ・バイ・ライトを始めとした優秀な機体制御システムと、現在運用中の新鋭機の数倍の処理能力を持つ火器管制システムも搭載しました。そして、レーダーには新開発のAESA（アクティブ電子走査アレイ）とIRST（赤外線搜索追跡装置）を組み合わせた物を採用し、極めて高い探知能力と多目標同時捕捉能力を……」

「ああ、すまないが機体解説は、その辺にしてもらえるかな。この後、デブリーフィングを行わないといけないのでね」

このままでは複雑な航空技術の講義を延々と聞かされそうだったので、私は強引に彼の話を遮った。なにより、私は戦闘機パイロットであって技術者ではない。本音を言えば、彼が語る技術的な解説には全く興味が無かったのだ。もっとも、デブリーフィングを行わないといけないのは事実なので、ここから逃げ出す口実に使っても怪しまれる事は無い。

「あつ、これは失礼しました。つい、夢中になってしまい……」

そう言っただけで技術者は軽く頭を下げて謝ると、今度は彼が心酔している新型機の方へ嬉しそうに駆けて行った。

『まったく……。随分と忙しい奴だな。ま、それだけ新型機の開発に情熱を注いでいる、という事か』

私は彼の後ろ姿を目で追いかけると、そんな感想を抱きつつ苦笑し、今度は視線を新型機の方に移して呟く。

「それにしても、今までの機体とは異なる奇妙な外見とは裏腹に、機体性能に関しては彼の言う通り別格だな。あの、X-02は……」

これは、先程までの模擬空戦を通じて私が新型機に対して抱いた正直な感想だった。そして、暫くの間、新型機の姿を眺めてからデブリーフィングを行う為に基地施設の方へと歩き出した。

「これが今回のフライトに関する報告書です」

乗機を降りて約2時間後、デブリーフィングを終えた私は報告書を持ち、この基地に所属するテスト飛行隊隊長のオフィスへと来て

いた。そして、先程の模擬空戦に関する報告書を提出した。

「そうか」

そう言っただけで彼は私から差し出された報告書を受け取ると、直ぐに内容を一通り確認していく。そして、そうやって最後まで報告書に目を通し終わると、それを机の上に静かに置いて私の方へと視線を向けてきた。

「これから話す事は記録に残さんし、単なる私個人の興味から聞く事だと思って遠慮せず正直に答えて欲しい。あの新型機、X-02について君はどう思う？」

どういう訳か、飛行隊長も例の技術者と同じように私に感想を求めてきた。

「そうですね……。機体性能だけなら間違い無く、これまでで最高の戦闘機と言っただけで良いでしょう。ただ、その性能が実戦でも有効なのかは判断しかねます。やはり、実戦では不確定要素が多いですから。それと、はつきりとした根拠は無いんですが、どこか動きに違和感があるような気がしました」

言われた通り、私は模擬空戦を行った上で自分が感じた事を包み隠さず正直に話した。すると飛行隊長は、『君には敵わんな』とでも言いたげな表情で首を左右に振って苦笑いを浮かべた。

「実は、専用兵装の開発が大幅に遅れてるんだ。それに付随する火器管制システムも含めてな。まるで言い訳のように聞こえるかもしれないが、今はまだ、あの戦闘機本来の性能を完全には発揮しきれていない。一応、計画では長距離AAMと高機動の短射程AAMが対空戦闘のメインウェポンになるんだが、両方とも開発中で今回は未搭載だった。もっとも、逆に考えれば、純粋に機体性能のみを評価できる絶好の機会でもある、と言いたいところだったんだが……」

そこまでを一気に話し終わると、飛行隊長は軽く溜息をついた。

「その様子では、まだ何か問題があるようですね」

私が問い掛けるように言葉を挟むと、彼は半ば呆れたような表情で新型機が抱える他の問題についての話を始めた。

「これは技術屋連中から聞かされた話なんだが、いま言った問題以外にも飛行制御システムのソフトウェアに何らかの問題があるそう
だ」

「その話、ちょっと変じゃないですか？ 普通、そんなレベルの問題があるのなら、飛行テストそのものが中止されるでしょう」

生粋の戦闘機パイロットである私には、それほど詳しい航空技術の知識がある訳では無いが、それでも重大な問題を抱えている事は理解できた。ただ、本来なら、そういった問題が解決されるまでは飛行中止になるのが普通なので、今回のような模擬空戦を含むテスト飛行が実施された理由が分からなかった。しかし、私の感じた矛盾点に気付いた飛行隊長が直ぐに話の補足をしてくれた。

「なにも、今すぐにでもエンジンストールや操縦不能で墜落するような問題じゃないんだ。私も専門家では無いから全てを理解している訳でもないんだが、なんでも三次元推力偏向ノズルの制御に関わるシステムのソフトウェアに問題があるそうだ」

「それで、具体的には、どのような影響が飛行に出ているんですか？」

補足説明を受けても、いまいち状態を理解できなかった私が更に尋ねる。

「そうだな……。具体的には、三次元推力偏向ノズルをフルに使った際の高機動飛行時にソフトウェアの不具合から一時的に操縦不能に陥る、という症例が報告されている。幸い、この時は高高度飛行時における各種テストも兼ねていたおかげで、操縦不能時に高度に十分な余裕があったので墜落は免れている。もっとも、それ以来、三次元推力偏向ノズルをフルに使った高機動飛行は1度も行っていない。勿論、それは今日の模擬空戦でも同じだ」

「そうだったんですか」

ここまでの説明を聞き、ようやく私は納得がいった。つまり、最新鋭機X-02は最初から本来の性能で飛行する事が出来なかったのだ。それなら、私の感じた微妙な違和感も説明できる。このよう

に様々な制約を受けてしまうと、パイロットも無意識の内に機体性能を十分に引き出そうとはせずに抑えてしまう。その結果、僅かではあるが、極限状態での動きが鈍くなり、それが空戦の行方すら左右してしまったのだ。

「しかし、これも君のおかげだな。恥ずかしい話だが、ここには君のように、あの機体を限界まで追い込んでくれる優秀なパイロットがいないからな。こうして制約を受けているにも関わらず機体性能は驚異的で、今までは勝負にすらならなかったよ」

言葉とは裏腹に、そう言った飛行隊長の顔は何故か少し嬉しそうに見えた。もしかすると、“有益なデータが得られた”という意味の表情だったのかもしれないが、そこまでの事は私には分からない。それよりも、私には任務を果たして期待通りの結果を残せた事にこそ意味があり、それだけで充分だった。

「長い時間、引き止めてすまなかったな。下がっていいぞ」

満足のいく答えが得られたからなのか、そう言って飛行隊長は退室の許可を出した。

「はっ。では、失礼いたします」

許可が下りたので私は姿勢を正すと敬礼し、回れ右をして体の向きを180度変えると、そのまま静かに飛行隊長のオフィスを後にした。そして、この基地に滞在している期間限定で寝室となっている部屋へと向かって歩いていくのだった。

Mission2A(後書き)

やっぱり、ゴチャゴチャしてて読みにくいですね……。

まあ、こんな感じで実力不足を露呈していますが、見捨てないで付き合っていただけると助かります。

Mission 2B

2000年9月28日

ここ最近、エルジア共和国内の情勢は妙に落ち着いていた。確かに、長引く経済不況や難民問題、治安の悪化といった諸問題など根本的な解決には程遠いものも多かったが、表面上、市民生活に限れば平穏を取り戻しつつあるように見えた。

そして、そういう風に見える理由としては、未だに国内には『ユリシイズ』による災害の爪痕は色濃く残ってはいるものの、“そんな状況にも人々が慣れてきたから”というのが妥当な意見だろう。だが、そうした穏やかな日々の裏側では、法治国家としての存在意義を根底から覆す恐るべき謀略が着実に進行していたのも事実である。

「どうやら、全員が揃ったようだな」

そう呟くと、最後まで車内で待機していた男が車から降りる。そして、彼が姿を現すのを大人しく待っていた者達を見据えると、まるで値踏みでもするように1人1人の顔を見ながら近付いていく。

ちなみに、ここは首都ファーンバンティへと電力を供給する火力発電所の敷地の一角で、彼らは一見すると、視察に訪れた親会社の重役らしき雰囲気醸し出していた。もともと、これは当然の事だが、彼らは発電所に用があるのでは無い。ここが首都から大きく離れておらず、しかも、目立たずに集まれて盗聴や盗撮も難しい場所だったからだ。

「それで、どこまで計画は進行しているんだ？」

最後に姿を現した人物、どこかリーダー格らしき雰囲気すら漂わせている中年の男は開口一番、明らかに不満げな口調で全員の顔を見回しながら尋ねた。すると、皆一様に目を逸らしたり伏せたりして可能な限り視線を合わせないようにし、その男の顔を見ようとさ

えしなかった。そして、そんな状況が優に1分以上は続き、気まずい沈黙が辺りを支配する。

「えっと、そうですね……。確か、『おそらく、今年中には実行に移せるだろう』という話を前に聞いた事があります。自分も詳細を聞かされてはいないんですが、その話をした人物が言うには……」

沈黙というプレッシャーに耐えられなくなったのか、ようやく一人の男が質問に答える。しかし、彼は額に冷や汗を浮かべながら歯切れの悪い言い方をするばかりで、はっきりと断言できた事柄は無いも同然だった。本人としては、責任の所在が自分自身に及ぶのを避けたつもりだろうが、それは完全に逆効果となった。なにせ、そんな言い方をすれば、まとめ役の男の怒りを買うのは明白だったからだ。

「寝言を言うのも大概にしろ！」

それはまるで、周囲一帯が振動したかのような錯覚さえ覚える程の大声だった。その鬼気迫る迫力に、怯えて体を小刻みに震わせながら俯いている者の姿さえ見受けられた。

「いいか？ もう、あれから4ヶ月以上も経っているんだぞ。それなのに、『おそらく、今年中には……』だと？ 貴様らは一体、今まで何をしていたんだ！ 大体、今回の計画は最終目標を達成する為の通過点にすぎず、下準備みたいなものだと最初に教えた筈だ。にも関わらず、未だに具体的な進展が見られないばかりか、誰も計画の進捗状況すら知らないときている。だとすれば、貴様らは、この程度の計画すら満足に進められない無能なのか？ そもそも、本来であれば……」

まとめ役の男は、まるで赤鬼のような形相で叱責を続けている。この様子では、暫くの間は何を言っても火に油を注ぐ結果になるだけだろう。そして、その事を察しているからなのか、ここに集まっている者達の誰一人として余計な口を挟もうとはしないし、言い訳や弁明のようなものも一切しない。例えるなら、嵐が過ぎ去るのを必死に耐えているようだった。

「とにかく、1ヶ月以内にカタをつける。それが許容し得る限界だ」
散々、言いたい事を言って気が済んだのか、少し落ち着きを取り戻した男は話の最後で計画完了のタイムリミットを独断で定めた。

「この際、少々、強引な手を使っても構わん。最悪、事が露見したとしても、それが公に追求される前にカタを付けられれば我々の勝ちだ。なにがなんでも、1ヶ月以内に完了させるんだ。もし、それが出来ないようなら、私自らの手で貴様らを全員、死刑台に送ってやるから覚悟しておけ」

そう言うつと鋭い眼差しで全員の顔を睨みつけ、自分が口にした言葉の内容をより効果的に演出する為に間を取る。そして、充分にプレッシャーを与えたと判断したところで、重たく押し掛かるような口調で話を続ける。

「いいか、これは最後通牒だ。死にたくないなら全力を尽くせ。分かったな？」

最後に脅し文句まで付け加えると、まとめ役の男は腹の底から湧き上がる怒りを隠そうともせず、そのまま体の向きを180度変えた。どうやら、他の者達の返事も待たずに立ち去るつもりらしい。それを示すように、無言で先程まで居た車の後部座席へ乗り込むと、運転手に直ぐに出發するよう告げる。

「出せ」

こうして怒りに満ちた人物が彼らの前から姿を消したのを受け、ようやく辺りに張り詰めていた気まずい空気が薄れ、この地獄のような時間が終わった事を残された全員が実感する。そして、後に残された者達は、まるで厳しい尋問から解放された囚人のような表情を浮かべつつ、この場所から次々に立ち去っていった。だが、彼らの足取りは最後まで重たいままで、お互いに視線は合わすものの、誰も口を開こうとはしなかった。

2000年10月31日

ユージア大陸中央にある小国、サンサルバシオン王国は古の時代より交通の要衝にあるという地理的要因から、今までに幾度となく戦火に曝されてきた歴史がある。その影響もあつてか、この国は現在、永世中立国を宣言して周辺諸国との争いを避けていた。しかし、小惑星『ユリシース』の接近が多くの犠牲の果てに獲得した束の間の平穏を一変させた。

「しかし、いつまで続くんだろうな？　こんな状態」

「そんな事、俺が知るかよ」

見渡す限り荒涼とした景色が続く中、作業服を着た2人の男が目の前にそびえ立つ巨大な構造物を見上げながら話していた。彼らが見上げている巨大な構造物こそ、この国に大きな変化をもたらした元凶であり、頭痛の種でもある『ストーンヘンジ』だった。ちなみに、『ストーンヘンジ』とは巨大な8基のレールガンの中核とした施設の総称で、燃え尽きずに大気圏を突破してきた『ユリシース』の破片を砕く目的で建造された。

「とにかく、俺達は言われた通りに、こいつの面倒を見てればいいんだよ。どっか間違つてるとこ、あるか？」

そう言うとは彼は点検用パネルを開き、日常業務となっている各種システムのチェックに取り掛かる。そして、すっかり体が覚えてしまった一連の作業を機械的にこなし、何も異常が無い事を確認すると、その旨を同僚の男に伝えた。

「本日も異常なし。いつも通り、こいつは健康そのものだ」

「いい加減、こっちは単調な作業の繰り返しで頭がどうかなりそうなのに、随分と気楽なもんだな」

報告を受けた方の男は、手にしたクリップボードのチェックリストに異常が無い事を示す印を書き込みながらぼやく。そして、次の点検箇所へ移動しようとした時、自分達の方へと近づいて来る足音に気付き、2人は反射的に足跡のする方へと顔を向けた。

「よっ、ご苦労さん」

近づいてきた人物は軽く右手を上げると2人に声を掛けた。

「主任、また抜け出して来たんですか？」

クリップボードを持った方の男が苦笑しながら尋ねると、主任と呼ばれた人物は大して悪びれる様子もなく頷いた。そして、ポケットから煙草を取り出すと火を付け、ゆっくりと味わうようにして一服し始める。彼は第2区画の維持管理を統括する部署の責任者で、点検作業を行っていた2人の作業員とも顔馴染みだった。

「でも、いいんですか？ こんな所でサボってて。一応、規則では、“勤務時間の間は常に各部署の責任者は自分の持ち場で待機すること”が明記されてますが？ ついでに言うと、この施設は基本、どこも禁煙ですよ」

「バレないようにやるから、多分、大丈夫だよ。それにホラ、最近はずかになんてきて、あんまり五月蠅く言われなくなっただんだ」

主任は勝手な言い分を述べると、煙草をふかしながら、ぼんやりと所々に雲の浮かぶ空を眺めている。実際、彼は自分の職務はきちんとこなしており、こういった行動も多少は大目に見てもらっているようだ。もつとも、今までに何度も素行に関する注意は受けているので、最終的な評価にだけは響かないよう要領よく立ち回る術を心得ているからこそ出来る芸当でもあった。

「それにしても、いい御身分ですね。主任は」

「これは、俺の特権みたいなもんだからな。ま、頑張って今のまま続けてれば、お前達も10年後には同じ事ができるようになるぞ」

もう一人の作業員が皮肉を込めて嫌味を言うが、主任の方は全く意に介せず、さらりと言い返した。だが、その作業員の方も軽くあしらわれる事は重々承知していたので、肩をすくめる程度の反応しかしなかった上に、逆に言い返す有様である。

「なら、俺達には一生、縁の無い話ですね。なにせ、こんな僻地に10年もいませんから。俺達の人生設計では数年後に、もつと快適で給料も良い所に移る予定なんですよ。ここに永久就職を決めた主任には悪いですが」

「そうか、そうか……。ま、お前らみたいな連中を雇ってくれる物好きがいれば、その計画とやらも成功するだろうよ」

ちようど煙草を吸い終わった事もあり、そう言い残してから主任は持ち場へと戻っていった。そして、その後姿を見ていた2人の作業員も主任が視界から消えたところで次の点検箇所へ向けて歩き出す。すると、その時、遠くの空から地鳴りのような轟音が響いてきた。ここに慣れていない人間であれば、その耳慣れない音の正体を思わず確かめようとしただろうが、彼らは全く気にする様子など無い。

「おやおや。あちらさんも、相変わらず元気だねえ」

「ああ、まったくだ」

むしろ彼らは、この状況が当たり前であるかのような言葉すら交わして歩いている。そして、そんな彼らの頭上を4機のF-16Cが見事な編隊を維持したまま、周囲に轟音を響かせて通過していった。ちなみに、この4機編隊は『ストーンヘンジ』に隣接するようにして建設された航空基地に配備されている飛行隊の所属機で、こうして展開するのには理由があった。

その理由とは、隕石迎撃用レールガンの建造にあたっては、計画当初より様々な反対意見があり、その中には多数の死傷者を出すテロ攻撃をも辞さない過激なものも含まれていた。そこで、安全保障上の理由から施設周辺へのUTO（中央ユーゴスラビア条約機構）指揮下の多国籍軍の展開が決定した、というのが大まかな経緯となっている。

だが、永世中立を掲げるサンサルバシオン王国内への外国軍の駐留については紆余曲折があり、いろいろと裏工作や裏取引が交わされたとの噂が未だに絶えないのも事実である。そして、最終的にはサンサルバシオン軍とUTO軍による基地の共同使用という形で辛うじて体裁を取り繕っている。

「それにしても、最盛期に比べると、随分と数が減ったよなあ」

作業員の一人が、自分達の頭上を高速で通り過ぎて基地への着陸

コースへと向かう戦闘機のシルエットを見つめ、そんな感想を口にする。

「そりゃ、そうだろう。いまさら、ここにテロ攻撃を仕掛けても意味なんて無いんだから。しかも、建築資材の搬入や建設作業員の出入りも無いから、そういつた中に不審物や不審者が紛れ込む事を警戒する必要も無い。それに、聞いた話によると、防衛部隊を駐留させとく予算も年々、削られてるんだとさ」

「なる程。だから、あの壊れた1基も放置されてるのか」

そう言っただけは、その壊れたレールガンがある方角を指し示した。そこにあるレールガンは、外見上は何の損傷も受けていないように見えるが、実際は至近距離に落下した『ユリシイズ』の破片による衝撃で砲身の向きや角度を変える動力系に深刻なダメージを負っていた。さらに、砲弾を加速させるのに必要となる膨大な電力を流す送電システムにも損傷を受けていた。

一応、表向きには“残り7基のレールガンでも充分に隕石迎撃砲としての役割は果たせるので、修理は不要”となっているが、本当のところは修理に掛かる莫大な費用を捻出する余裕が無いので放置されているのだ。

「なら、もう直ぐ俺達も用済みになるのか？」

「さあな。とりあえず、ここが動いてる間は大丈夫だろ。まあ、人件費の削減という名目で真っ先にクビになるとしたら、確実に俺達のような人間だろうな」

「やっぱ、そうか」

当たり前の話だが、彼らにとっては施設の置かれている状況や警備体制よりも、自分達が安定した生活を送れるかどうかの方に大きな関心があった。

2000年11月5日

この時、世界が新たな局面を迎えるまで残り24時間を切っていた。

「多少、期限は過ぎたが、計画は順調に進んでいるようだな」

エルジア政府庁舎内に設けられた高官専用の執務室にある窓から夕日を眺めながら、その男は誰に聞かせるでもなく、静かに呟いた。なにせ、この部屋には彼しかいないし、盗聴対策も万全であるから、例え危険な謀略に関する事を呟いても何も問題は無かった。

「もうすぐだ。もうすぐ、この私が全てを支配するのだ」

ゆっくりと目を閉じ、まるで呪文でも唱えるかのように言葉を囁いた時、背後にある執務机の上にある電話のコール音が鳴った。

トウルルル――

「私に何か用か？」

彼は受話器を取るなり、低く落ち着いた声で尋ねる。ここにある電話には、政府が雇った交換手を介してしか繋がらないようになっている。つまり、電話の向こうには、ここに電話を掛ける事を許可された人物しかいない、という訳だ。

「会議の開始が予定より30分ほど遅れるそうです」

受話器から聞こえてきたのは、酷く事務的だが、透き通るような女性の声だった。ちなみに、彼女は彼の秘書である。

「そうか。報せてくれて、ありがとう」

「いえ、お気になさらず」

お互いに短く事務的な挨拶を交わすと、彼は直ぐに受話器を置いて通話を終えた。そして、壁に掛かっている時計に目をやり、変更された会議の開始時間を確認する。

「ちょうど良い。この間に明後日以降の準備でもしておくか」

どこか自分に言い聞かせるようにして会議が始まるまでの時間の潰し方を口にする、彼は革張りの豪華な椅子に浅く腰を下ろした。そして、執務机の脇にある金庫へと手を伸ばしてダイヤルを左右に回し、番号を合わせてから最後にレバーを回して金庫を開ける。

金庫内には様々な重要書類や機密文書が収められていたが、それ

らの中から迷う事なく表紙に“国内の経済問題に関する報告”と書かれた書類の束を取り出した。さらに、そうやって取り出した多数の書類の中から必要な物だけを手早く選び取り、残りは金庫の中へと戻す。

「ふむ。思ったより多いな」

選び抜いた書類の束を見ながら独り言を呟くと、それらを机の上に置き、今度は金庫とは反対側の脇に置いてある鞆から数冊のファイルを取り出した。そして、机の上に置いた書類を項目や種類別に分けていくと、それぞれに対応したファイルへと収納し、今すぐに使う予定の無いファイルは鞆に戻した。

「後は、これだな」

そう言つて彼は、まだ机の上に残っていた書類の束に視線を落す。そして、それらの書類を作業がし易いように机の上に並べると、書かれている内容を1つ1つ丁寧に確認しながら読み進め、必要に応じてサインを記入したり、修正箇所や補足説明を書き記した付箋を貼り付けたりしていった。

「もう、こんな時間か」

書類内容を確認する作業に没頭していた彼は、なんとなく視線を壁の時計に向けた際、思った以上に時間が経過しており、彼にしては珍しく声に出して驚いた。おそらく、こうして偶然にも時計を見ていなければ、この後の大事な会議に遅れていた可能性もあっただろう。

そこで彼は、広げていた書類を手早く纏めると再び金庫を開け、直ぐに取り出せる場所に投げ込むようにして置いてから扉を閉め、しっかりと金庫の扉がロックされている事を確認する。そして、足元の鞆を手にとると椅子から立ち上がり、大きく伸びをして体の凝りを少しでも解してから部屋の出入り口に向かって足早に歩き出した。

「何か新しい報告は有るか？」

執務室の扉を開けた彼は、応接室を兼ねた部屋で事務仕事をこな

していた秘書に向かつて尋ねる。

「いえ、何もありません」

秘書は一瞬だけ手元のメモを確認すると、扉を開けて出てきた彼に向かつて事務的な口調で伝えるべき用件が無い事を手早く答える。「そうか。ああ、それと、今日の会議は長くなるから、もう帰ってもいいぞ」

「分かりました。では私は、お先に失礼させていただきます」

帰宅を許可された途端、秘書は机の上を片付け始める。そして、その様子を確認した彼は後ろを振り返って自分の執務室へと通じる扉の鍵を掛け、きちんと鍵が掛かっている事を自分の目で確かめた。「後は頼む」

最後に彼は、廊下へと通じる扉の戸締りや消灯などの雑務を片付けておくように秘書に告げてから会議室へと向かった。ちなみに、彼の執務室から指定された会議室までは早足で歩けば5分程で到着するので、移動に大した時間は掛からずに済む。

『どうやら、この分だと私が最後かな』

会議の開始時刻が迫っていたからなのかもしれないが、会議室の扉を開ける直前に習慣のように腕時計を見ると、そんな考えが彼の脳裏を掠めた。そして、自分に向けられる視線を想像しながら彼が腕に力を込めて扉を押し開けると、既に彼を除いた会議の参加者は全員が揃って着席しており、彼が到着するのを待っている状態だった。

「失礼。どうやら、少し遅れてしまったようだな」

会議室内を素早く見回して自分が最後ののを改めて認識した彼は、いかにも形式的な謝罪の言葉を口にする。しかし、大半の者は彼が会議室内に入ってから来たのを一瞥しただけで、特に何かを言うてくるような事も無かった。

「ルシコフ副首相。君も早く席に着きたまえ。早速、会議を始めたいんでね」

その様子を見たりーベルマン首相がルシコフ副首相に席へ着くよ

う促すが、彼は特に急ぐような素振りは見せずに自分の席へと歩いていく。そして、ゆつくりと椅子に腰を下すと軽く深呼吸をし、さり気無く周囲の様子を窺いつつ、いつもと変わらない仕草で会議の準備を始めた。

「全員が揃いましたので、これより定例の復興政策会議を始めたいと思います」

ルシコフ副首相の準備が出来た頃合を見計らい、本日の会議の進行役を務めるユリシース被災復興委員会委員長が開始を宣言する。

この委員会は、先の小惑星『ユリシース』の落下に伴う被害からの復興事業を総括する政府直属の機関として存在している。

なお、委員会の設置についてはリーベルマン首相が強く推進し、外部の専門家も含めて議論を重ねた結果、最終的には全会一致で委員会の設置が承認されている。ただし、この委員会にも一枚岩とは言い切れない部分があった。

それは、被害を受けたユージア大陸全体の復興と市民の生活水準回復を主眼に置くリーベルマン首相派と、エルジア共和国のみの経済復興を最優先と考えるルシコフ副首相派の対立である。

「まず始めに、これが現在の復興状況の概要です」

委員長が話し始めると、会議室の奥の壁に据え付けられている大型スクリーンに様々なデータや文章が映し出される。それと同時に、参加者の何人かは手元の資料にも時折は視線を移し、より詳細に報告内容を確認している。

「ここに示されているように、現在までの目標達成率は68%程度に止まっており、これは当初の予測よりも大幅に遅れています。その原因におきましては、次のような報告が各方面より上がっており、さらに、その幾つかについては国連の理事会からも疑問視する声が……」

だが実際は、こうして委員長が説明を続けている間に別の事を考えている者も多数いた。それは、この時間を最大限有効に利用し、それぞれに何らかの思惑や策謀を巡らせていたのだ。彼らは、表面

上は普段と同じ様子を装っているが、水面下では互いの隙を窺い、この後続く議論の主導権を握ろうと静かな戦いを繰り広げていた。そして、そういった駆け引きが繰り返された結果、肝心の復興計画そのものが暗礁に乗り上げた事も1度や2度では無い。

「報告は以上です。ここまでで何か質問は？」

一通り説明し終えた委員長がメンバー全員の顔を端から順に見回し、ここまでの報告についての質問の有無を尋ねる。すると、直ぐに数人が手を上げ、それぞれに2、3個ずつの質問を投げ掛ける。だが、委員長の方も予め質問の内容を予測していたらしく、手元のメモを見ながらではあったが、ほぼ全ての質問に淀みなく答えていった。

「……と、なっています。説明は以上で終わりですが、他に質問はありませんか？」

最後に委員長は各々の表情を窺いながら再確認も兼ねて全員に尋ねるが、誰からも質問が寄せられないので、この一連の報告については全て終了したと判断して次へと移った。

「それでは、今日の議題ですが、最初は失業対策についてです。この件に関して、何か意見のある方は？」

そう言って委員長は最初の議題を提出し、それぞれのメンバーに意見を求める。すると、直ぐに数人が手を上げ、その内の1人を委員長が指名した。そして、指名を受けた人物は、話し始める前に全員の意識が自分に向いている事を確かめてから意見を述べる。

「私は今の失業対策について再検討し、より現在の状況に適したものに変更する事を提案します。これは前回の会議でも提案しましたが、ここに示されたデータを見る限り、今の対策では十分な効果が得られていません」

最初に発言を許可された人物は手元の資料から1枚を抜き出して手に持つと、それを掲げて皆に見えるようにして注目を集めた。そして、その資料こそが自分の意見の正当性を示す証拠であるかのようない口調で続ける。

「ここには1ヶ月ごとの失業率が示されていますが、ここ数ヶ月の間、その数値に大きな変化は見られません。ある一定の段階まで減少した後は、ほぼ横ばいとなっており、今の対策に効果が無くなっている事は誰の目にも明らかです。しかも、依然として我が国の失業率は高く、先の『ユリシーズ』落下による被害と相まって財政を悪化させている大きな要因となっています」

うまく話し方に緩急をつけて場の雰囲気を作りつつ彼が自分の意見を言い切ると、早くも賛同するかのように数名が小さく頷く。さらに付け加えるならば、ルシコフ副首相も態度にこそ出していないが、この意見に賛成する者の1人だった。ただし、正確には、この意見を冒頭で述べるよう仕向けたのはルシコフ副首相本人で、会議が始まる前から各方面に対して様々な裏工作をしていたのだ。もつとも、それは他の者達も同じで、こういった世界における重要な決定は“裏”で行われるのが常識だった。

「それでは、他に意見のある方は？」

この後に出てくるのは、先程の意見に対する反対意見だと誰もが分かっていたが、一応は形式に従って委員長が尋ねる。すると、案の定、反副首相派として知られている1人が手を上げ、それを見た委員長が発言を許可する。

「どうぞ」

「私は現状維持に努めるべきだと思います。確かに、数字だけを見れば効果が上がっていないように感じられるかもしれませんが、それでも失業率は確実に減少しています。なにより、この短期間で、ここまで復興させた事自体が対策の正しさを証明しています。それに、今は国民の生活も安定してきており、それに比例するかのよう

に経済も回復傾向にあります。なので、今は性急な変化を追い求めるよりも、緩やかではあっても確実に前進する事の方が重要です」
彼の発言は、まるで自分が全てを見通しているかのような口振りだった。もつとも、それが単なる演出にすぎない事は全員が承知していたが、その事を誰も口や表情に出す事はしなかった。

「では、他に意見はありませんか？　なければ、このまま議題を進めます」

異なる2つの意見が揃ったところで委員長は改めて全員に尋ねた。だが、これ以上は新たな意見が出される事も無く、この2つの意見について双方の支持者同士が激しく議論を交わす段階へと移行する。「私も失業対策の再検討に賛成です」

議論の主導権を握るつもりなのか、真っ先にルシコフ副首相が再検討賛成派である事を宣言する。すると、直ぐに別の人物が現状維持を支持する構えを見せる。

「私としては、現状維持を支持します。なにより、ここでの路線変更は無用の混乱を生むだけだと判断したからです。そう考えれば、もう暫くは様子を見てから検討する方が無難でしょう。なにせ、一朝一夕で結果の出るものではありませんから」

この2人の発言が火種となり、周囲を巻き込んで議論は一気に白熱する。

「そんな悠長な事を言っている暇が何処にある！？　こうしている瞬間にも国民は貧困に喘ぎ、犯罪者に怯えているのだぞ。それに、失業率と自殺者の数が比例している事も忘れてもらっては困る」

「それは、関係ないでしょう。今は失業対策を見直すかどうかを話し合っているものであって、犯罪や自殺について意見があるなら、改めて議題を提出してもらいたい」

以上のように参加メンバーの意見は激しくぶつかり合い、その結果、会議は遅々として進まなかった。さらに、こんな風にして会議の進行が止まるのも今では日常茶飯事となっており、肝心な結論が出る頃には当初の想定よりも事態が進行していて後手に回る事も多かった。

その為、復興委員会の存在そのものに疑問を投げ掛ける声すらあった。だが、こうして時間ばかりが過ぎていく中、人々の目に映らない所では恐るべき陰謀が着々と進行しており、それは既に誰にも止められないところまで進んでいたのだった。

Mission 2B（後書き）

またしても、やたらと長いです。おまけに、戦闘シーンは一切なし……。

エルジア大戦の激戦をテーマに掲げておきながら、こんな有様ですが、大戦勃発まで待つていただければ戦闘シーンの連続になりますので、もう少しお付き合いください。

なお、これまでに投稿した部分に“編集”の表示が出ていると思いますが、レイアウトをほんの少し変えただけで、内容は全く変わっていません。

一応、大きく内容が変わった時には報告しますので、普段は読み返さなくても大丈夫ですよ。

Mission 3A

陰謀の果てに

' Intrigue

2000年11月6日

この日、世界は運命の日の朝を迎えた。ここ、ユージア大陸でも少し肌寒さを感じられる季節となった11月上旬の早朝、エルジア共和国を率いるリーベルマン首相と彼の側近、そして数名の護衛官からなる選抜メンバーは首相官邸の前庭に設置してあるヘリポートへと向かっているところだった。

「首相。これが、本日の主な御予定です」

そう言って彼の秘書を務める男が背広の内ポケットから少し分厚い手帳を取り出し、歩きながら今日一日の予定を形式的な口調で順繰りに述べ始める。

「まず、午前中は復興計画の最大の柱である公共事業が行われている現場3箇所の視察になります。また、3箇所全ての視察が終わった後には記者会見も行います。午後は首相官邸へと戻り、今後の外交方針と重点的に予算を投入する必要があるインフラ整備を決定する為の会議への出席。それから、夜には資金集めのパーティーが控えています。それと、今日中に目を通していただかなければならない書類も多数あります」

状況が状況なだけに、この日も首相の予定は国内各地への移動と様々な会議への出席が分刻みで組まれており、しかも、その合間に幾つもの書類に目を通す過酷なものだった。そして、そのどれもが頭の痛くなるような難題ばかりである。

「そうか。どうやら、今日も忙しくなりそうだな」

その所為か首相は僅かに表情を硬くすると、軽く溜息をつきながら呟く。

「では、お休みを取れるよう、今後の予定を変更なさいますか？」

そんな首相の些細な呟きすらも聞き漏らす事のない優秀な秘書が再び手帳を開き、翌日以降のスケジュールを素早く確認しながら尋ねた。

「いや、今は誰もが厳しい状況にある。流石に、私の個人的な都合で予定を変える訳にはいかんよ」

そう言っ​​て首相は秘書の言葉に首を横に振り、微かに苦笑しながら当初の予定通りに行動する事を即断する。だが、そう言っ​​た首相の顔に疲れが見えたのも事実である。

「分かりました。ですが、必要がある時には遠慮せず仰っ​​て下さい。早めに仰っ​​て下されば、こちらとしても対応し易いですから」

「そうか、それは心強いな。なら、その時が来たら遠慮せずに言うよ」

秘書からの提案に首相は軽い微笑と共に返事を返した。そして、そんなやり取りをしている間にヘリポートへと到着した彼らは、慣れた動作で既に待機して離陸準備を整えているヘリのキャビンに乗り込む。なお、本日の行動予定では、ここからヘリで郊外の空軍基地へと向かい、そこで政府専用機に乗り換えて視察に訪れる目的地の近くの空港へと向かう事になっていた。ちなみに、首相官邸から郊外の空軍基地まではヘリで15分程の距離であり、この日も普段と変わらないフライトになる筈だった。

「ようこそ、リーベルマン首相。当機は、もう間もなく離陸いたします」

機内に全員が乗り込んでキャビンのドアが閉じられると、機長である空軍所属のパイロットがキャビンの方を振り向き、現在の状況を簡潔に伝える。なお、エルジア共和国では、このヘリも含めた政府専用機は全て空軍が一括して管理下に置いており、これから搭乗する政府専用機の乗員や整備士も空軍所属の兵士となっている。そ

して、先程の機長の言葉通り、全員が座席に座ってシートベルトを締めてから1分と掛からない内にエンジンの始動する音が機内にも響き、それに合わせて機体も微かに振動し始めた。

「こちら、エルジア空軍所属機、コールサイン・ヴィクター・チャリー・10986。キャピタル・コントロールにコールサインの変更を求める」

「キャピタル・コントロールよりヴィクター・チャリー・10986。コールサインの変更を許可する」

機長が首相官邸のある空域の航空交通管制を担当する軍の管制センターへコールサインを変更する許可を求めると、直ぐに許可が下りた。なお、首相官邸周辺には他の政府機関の建物も多く、安全保障上の観点からも例外的に航空交通管制は空軍が行っていた。

「了解、キャピタル・コントロール。これより、当機のコールサインはエルジア・ウイング1となる」

「キャピタル・コントロールよりエルジア・ウイング1。コールサインの変更を確認した」

勿論、このように離陸前にコールサインが変更されるのには理由がある。それは、この国の憲法に当たるエルジア憲章において『軍の最高指揮官は首相である』と明記されているからで、その“指揮官”である首相が搭乗する機体には専用のコールサインが設定されていた。

そして、この専用のコールサインを使えるのは、“首相が実際に搭乗している機体”に限られていた。つまり、今はVC10986のコールサインを使っていた機体がエルジア・ウイング1を名乗っているが、空軍基地に着陸して首相が機体から降りれば、その瞬間からエルジア・ウイング1のコールサインは名乗れなくなるのだ。

「エルジア・ウイング1よりキャピタル・コントロール。引き続き、離陸の許可を求める」

「こちら、キャピタル・コントロール。エルジア・ウイング1の離陸を許可する。離陸後は所定の高度で方位290へ向かって下さい。

現在、周辺空域の同高度に他の航空機は存在せず、視界も良好です」
「エルジア・ウイング1、了解」

全ての準備が整い、機長が管制センターに離陸の許可を求めると、それは直ぐに受理される。もつとも、それはコールサインと事前のフライト・プランで首相の搭乗する政府ヘリだと分かっているからでもあった。

「エルジア・ウイング1、テイク・オフ」

機長がヘルメットに据え付けられているマイクロフォンに向かって離陸を告げると同時に、コレクティブ・レバーを引いてエンジン出力を増加させる。すると、大音量と共にメインローターの回転数も増加していく。そして、メインローターの回転数が一定値を超えた途端に微かにGが掛かり、それと共に機体の振動も小さくなってランディング・ギアが地面から離れた事を体感する。

その後、機長は機体を高度45mまで穏やかに上昇させてホバリングすると、フットペダルを踏み込んで政府専用機が待機している空軍基地の方角でもある方位290へ機首を向ける。それから今度はサイクリック・スティックを静かに奥へと傾け、コレクティブ・レバーの操作と合わせて機体を上昇させつつ前進させてヘリポートを後にした。

この日の早朝、私はジョンソン記念橋をほぼ正面に臨む事のできる建物の中の1つ、その屋上に立って橋の方を眺めていた。そして、およそ5分おきぐらいの間隔で腕時計へと目をやっては今の時刻を確認し、また橋の方に視線を戻した。しかも、ここへ到着した時、即ち、1時間近くも前から頻繁に現在の時刻を確認する行為を繰り返しており、今では何回確認したかも分からなくなる程だった。しかし、それでも気持ちを完全に落ち着かせるまでには至らず、また同じ事を繰り返してしまう。

「おい、お前達。直ぐに行動に移せるよう、万全の体勢を整えておけよ」

幾度目かの時刻の確認を終えた私は、目の前でしゃがみ込んで“最も重要な役割を果たす物”の傍らで待機している2人の男達に声を掛けた。

「そう何度も言わなくても、ちゃんとやりますよ」

すると、短髪にしている男の方が私の顔を見ようとせず、うんざりしたような口調で返事をする。確かに私は彼の言う通り、何度も同じ事を繰り返してきたので、いい加減に鬱陶しくなるのは当然の反応だろう。しかし、今回の行動は絶対に失敗の許されない重要なものであるから、どれだけ慎重になっても問題は無いし、むしろ、慎重すぎるぐらいで丁度いいとさえ思っていた。

「貴様、『いい加減な態度は慎め』と、前から言ってるだろうが。」

そういった態度はミスの基だぞ。なにせ、我々の成否に計画の全てが懸かっているんだからな。もし、貴様の不注意の所為で失敗したら、その時は生きてるのを後悔させてやるから覚悟しておけ」

そう言って釘を刺してやると、彼は肩をすくめるような仕草をし、とりあえずは私の命令に従って作業を始める。そうして暫くは彼らが作業を続ける音と、朝の街の喧騒だけが周囲を支配した。

「準備、完了しました」

それから数分後、短髪にしている方の男が立ち上がってこちらを振り返り、準備が完了した事を報せてきた。その声と表情には明らかに不満の色があったが、そんな事には一切構わず、私は彼らの方へと近寄って準備させていた物の状態を自分の目で確かめる。そして、充分に時間を費やして一通りの確認作業を終えると、どこにも問題は無く、完璧に準備が整っている事が判明した。

「よし、上出来だ。お前達は私が合図するまで、このまま待機している。ただし、待機中でも絶対に気は抜くなよ」

「はいはい。そう何度も言わなくなつて、その時が来たら、ちゃんとやりますよ」

「貴様！　そういう気の抜けた態度が致命的なミスを招くと、なんで理解できないんだ。え？　大体、普段できない事が本番になって

突然できるとでも思っているのか？」

別に彼の態度や口調が癪に障った訳では無いが、こういった慢心は大抵の場合、良くない結果を招く事を経験から嫌というほど知っていた私は思わず詰め寄り、声のトーンを1オクターブほど落して冷たく言い放った。すると、その迫力に気圧されたのか、彼は急に目を伏せて黙り込む。

「いいか？ 頭の悪いお前でも分かるように何度でも言ってやる。ここで失敗すれば、全てが水泡に帰すんだ。それに、成功させなければ俺達の人生も今日で終わり、残りの一生を厳重警備の刑務所で過ごす事になるぞ。そんな人生を送りたいか？ ええ？」

まくしたてるようにして最初から答えの分かりきっている質問を投げ掛けると、彼は微かに首を左右に振って否定の意思を示した。そして、それを見た私は、彼が2度と下らない考えを起こさないよう更に追い討ちを掛ける事にした。

「だったら、その事だけは何があっても忘れるな。例え、貴様が死んでもだ。いいか、これは命令だ。よく憶えとけ」

この機会を利用し、いま目の前にいる男の緊張感の全く感じられない態度を改めさせる為にも私は、半ば脅しとも取れる表現を使って圧力を掛け続ける。そうやって圧力を掛けつつ、この脅しめいた表現が充分に効果を上げたところまで半歩だけ後ろへと下がって距離を取る。そして、これだけ脅しておけば彼の態度も多少はマシになるだろうと思い、いつもの落ち着いた口調に戻して命令する。

「なら、さっさと言われた通りに行動しろ」

すると、流石に今度は素直に私の命令に従った。

ピピッピピッー

そうして暫くの間、お互いに一言も発する事なく静かに待機していると突然、私の携帯電話が振動と共にコール音を鳴らし始めた。その音を聞いた私は直ぐにポケットから携帯電話を取り出すと、液晶画面に表示された発信者の名前を確認し、連絡を超越す事になっ

ていた人物であることを確かめてから通話ボタンを押す。

「もしもし？」

「ああ、俺だ。ブレントだよ。憶えてるか？」

相手の男は、いかにも古くからの知り合いのような口調でありふれた挨拶をしてくるが、この短い会話の中に暗号となるキーワードが隠されているのだ。それを知っていた私は頭の中で素早く暗号を正しい言葉に変換し、この挨拶に対する返事を同じように日常会話に偽装した暗号で返す。

「忘れる訳ないだろ。お前みたいな野郎なら特に、な」

「そうかよ。それはそうと、こんな朝っぱらから電話したのは、お前さんが泣いて喜ぶような耳よりな情報を入手したからなんだが、聞きたいか？」

「ほう。それは、ぜひとも聞かせてもらいたいな」

「そうくると思ったよ。だが、タダじゃダメだね。ま、美味しい酒の1杯でも奢ってくれるって言うんなら、考えてやっても良いんだが……」

「分かったよ。ただし、下らない情報だったらナシだ。いいな？」

ここまでのやり取りは、はっきり言って、お互いが目的の人物であるかどうかを確かめる為のものに過ぎない。もし、何者かが成りすまして騙そうとしていても、この方法であれば見破る事ができるし、脅して偽情報を教えるよう強要された時の対策も施せる。

また、盗聴されていた場合でも本当の意味までは直ぐに理解できない筈だ。それに、いま話している彼だけが協力者という訳でもなく、万が一の事態に備えて他に数名が待機している。そして、こうやって回りくどい確認方法を経て私は、この電話の相手が目的の人物だと初めて確信する。

「その情報つてのは、お前さんが探してた例の車の件だよ。しかも、年式からボディカラーに至るまで全て希望通りの代物。ようやく、そいつを売っても良いって奴を見付けたんだ。で、これから持ち主と値段の交渉に入る、って訳だ。それで、後10分程したら向こう

から連絡してくる手筈になってるんだが、その前に見付かった事だけでも教えようと思ってるね」

「そうか。恩に着る」

「な、言った通り、耳よりな情報だったろ？ だから今度、美味しい酒を頼むぜ」

「オーケイ。約束通り、とびきり美味しい酒を奢ってやるよ」

「そういう訳だから、また何か進展があつたら連絡するよ。じゃあな」

そう言つて相手の男は、こちらの返事を待たずに電話を切つて通話を終えるが、それで充分だった。なにせ、これに必要な情報は全て手に入り、タイムテーブルに沿った行動予定も立てられるようになったのだから。

「よし、お前達。いよいよ出番だぞ」

私は携帯電話をポケットへ入れると、おとなしく待機するよう命じておいた2人に声を掛けた。

「ターゲットの通過は約15分後、移動ルートはAだ。ちなみに、チャンスは1度きりだからな。絶対に気を抜くなよ」

「はい」

やはり、先程の脅しめいた方法が効いているようで、目の前にいる2人の男は素直に私の言う事を聞いている。そして、その様子に満足した私はターゲットが飛来する方向に体ごと顔を向け、腰のポーチから取り出した双眼鏡を構えると、じつと目を凝らし、どんな些細な変化も見逃さないよう細心の注意を払いながら今は何も無い空間を見つめた。

「お前達、ターゲットの通過予定時刻まで残り5分を切ったぞ。ミサイルの発射手順は完璧に覚えてるんだろうな？」

協力者からの電話を受けてから10分程の時間が経過した頃、私はターゲットが飛来する方向から視線を外さずに2人の男に改めて確認を取る。

「ええ、そりゃあもう、完璧ですよ。毎日毎日、朝から晩まで繰り返す」

返し同じ事をやらされたんだから」

「おい、余計な事まで言わなくていい。いいか？ これからの5分に、お前達の残りの人生の全てが懸かっていると思って行動するんだ。分かったな？」

「そんな事は分かってますよ」

微かだが、彼の返答した声には苛立ちが混じっていた。なので、気を引き締めてやる為にも何か言ってやろうかと思つた矢先、ついにターゲットが私の視界に飛び込んできた。私は直ぐにターゲットを細部まで観察し、幾度となく写真を見て脳裏に焼き付いている攻撃目標に間違いのない事を確信する。

さらに、ターゲットの動きや周囲の状況にも注意を払い、こちらを警戒している様子が無い事も確かめた。すると、ありがたい事にターゲットだけが無警戒で接近しており、こちらにとって極めて理想的な状況が整っていた。そこで私は予定通りに計画を実行に移す決断を下し、待機させていた2人の男に行動を開始するよう命令する。

「11時の方角にターゲットを確認した。直ちにミサイルの発射体勢に入れ」

そうやって命令を下している間も私は双眼鏡から決して目を離さず、こちらへと接近してくるヘリの機影を追い続けていた。そんな私の傍らでは、ミサイル発射に向けた準備が行われている筈であるが、双眼鏡越しに視線をヘリに固定して動きを追い掛けているので、逆に彼らの詳しい状況は分からない。

「おい、ちゃんと教えた通りに準備は進んでるんだろうな？」

そこで私は双眼鏡に目押し付けたまま、彼らに作業の進捗状況を尋ねる。しかし、一向に返事は返ってこない。その所為で一瞬、不安に駆られる。

「どうした？ 状況を報告しろ」

一応、金属やABS樹脂などが擦れるような音はしているので、準備をしているのは間違い無いのだろうが、それだけでは正確な状況

までは分からない。そして、私が募る苛立ちを隠そうともせず大声で問い掛けようとした矢先、今までの沈黙を破るようにして彼らの内の1人が答える。

「発射準備、完了です」

その声に反応して私が双眼鏡から目を離して彼らの方を振り向くと、そこにはFIM-92Cを目標に向けて構える2人の男の姿があった。それを見た私はホッと胸を撫で下ろし、再び攻撃目標であるヘリの方へ急いで視線を戻すと、ヘリが携帯SAMの射程に入るまでの僅かな時間を緊張しながらも静かに待った。

流石に、この時ばかりは、ほんの数秒が何時間にも感じられる程だった。そして、双眼鏡に内蔵されたスケールでターゲットまでの大まかな距離を割り出し、確実に目標が射程内に進入したと判断した瞬間にミサイル発射の手順を開始するよう指示を出す。

「よし。IFFを作動させてミサイルに目標を認識させ、セーフティを解除しろ。そして、目標を捉えたら速やかに発射体勢へと移行するんだ。それから、目標の針路と速度を計算に入れて修正を加えるのも忘れるな」

「はいはい。分かってますよ」

またしても軽い苛立ちの感情を含んだ返事が返ってくるが、今回は無視する。なによりも今は、確実に目標を撃墜する事の方が重要なのだ。そして、私が目標のヘリとFIM-92Cを構える彼らを交互に見つめる中、彼らは教えられた通りに行動し、ミサイル発射へ向けた手順を滞りなく行っていく。

その辺りの動きは、『今日まで繰り返し訓練を重ねさせてきた賜物である』と断言しても良い見事な手際であった。そして、彼らの手順が正しかった事を証明するかのように、程なく、ミサイルが発射可能な状態になったのを報せる特徴的な電子音が聞こえてきた。

「今だ、発射しろ！」

その電子音を聞いた私は素早く彼らと目標との位置関係を再確認し、ミサイルを発射するのに理想的な態勢になっている事を把握す

る。それと同時に、私自身がミサイル発射の際に生じるバックブラストの範囲内に入っていない事も確かめ、はっきりとした声でミサイルの発射を命じた。

すると、次の瞬間、特徴的な発射音と共に周囲に発射煙が立ち込め、ロケットモーターが燃焼する時の独特な臭いが私の鼻や喉を刺激する。だが、そうやって撃ち出された2発のステインガー・ミサイル本体は綺麗に並ぶようにして白い煙の尾を引きながら飛翔し、まるで目標へ吸い寄せられるようにして空中を突き進んでいった。もちろん私は、その様子から片時も目を離す事は無かった。

同時刻、ミサイルの標的にされたヘリの機内では、その事実を知る由も無い面々が今日の予定についての細かい打ち合わせを行っていた。ちなみに、キャビンにはリーベルマン首相と秘書、それに首席補佐官と二人の護衛官の計5名が搭乗している。

「現地での視察は、およそ20分を予定しています。なお、視察する場所は実際に工事が行われている現場が中心となります」

「そうか、なる程な……。視察場所については問題ないが、時間の方は少し長くないか？　むしろ、その後の記者会見に多くの時間を割くべきだろう」

「分かりました。では、そのようにスケジュールを調整いたします」
「ああ、そうしてくれ」

このような首相の発言の裏には、国民や支援団体からの評価を上げる為に、限られた時間を少しでも有効活用しようという姿勢が明確に表れていた。しかし、そんな彼の想いとは裏腹に、ついに運命の瞬間が訪れる。それは、首相一行を乗せたヘリがジョンソン記念橋に接近した時の事だった。その場所では、彼らの内の誰一人として微塵も予想していなかった事態が待ち受けていたのである。

「あれは、何だ……？」

そんな中、最初に異変に気付いた機長が思わず呟く。実は、彼から見て2時の方角にある建物の屋上に、なにやら不規則に揺れ動く

小さな影らしき物を見付けたのだ。ただし、今のヘリの高度からでは詳しい事は何一つ分からず、“辛うじて何かがある”といった程度の認識である。そもそも、彼が不審な影の存在に気付けたのは、そこで何かが朝日を反射して光ったような気がしたからで、それが無ければ全く気付く事なく今の針路と高度を維持したまま上空を通過させていただろう。

「なあ、2時方向のビルの屋上。お前は、あれが何だか分かるか？」
そう言つて機長は不審な影を見付けた付近を左手で指差し、左隣に座る副操縦士に尋ねる。すると、副操縦士は僅かに前屈みになつて機長が指差す方向に顔を向け、指し示された付近に目を凝らす。
「すいません。私には何も無いように見えますが……？」

しかし、彼には機長が見付けた不審な影を見付ける事さえ出来なかつたらしい。その為、機長は最初、不審な影のように見えた物は単なる自分の思い過ごしではないかと考えた。しかし、それでも何か頭に引つ掛かるものを感じた彼は、改めて影のような物を見た付近を注視する。

次の瞬間、事態は予想もしない方向へと急展開をみせた。最初に不審な影らしき物を目撃した付近、それも隣り合うように並んだ2箇所で小さな爆発のようなものが起こり、白い煙が盛大に立ち上つたのだ。そして、爆発で生じた大きな煙の塊の中から一筋の煙が新たに立ち上り、あたかも意志を持った2匹の生物のように高速でヘリに向かって伸びてきた。

「花火……？ 違う！ ロケット……、いや、ミサイルだ！」

この時になつて、ようやく事態の深刻さに気付いた機長が叫ぶ。しかし、この事態を認識できた頃には全てが遅すぎたのだ。そして、この僅かな認識と判断の遅れが最悪の結末を招く事となる。

「機長！ 直ちに回避機動を！」

自分達の方へ吸い寄せられるように迫ってくるミサイルから片時も目を逸らさず、副操縦士が声を張り上げて叫ぶ。

「そんな事は分かつてる！」

焦った機長は咄嗟にそう叫んだものの、今の状況が極めて絶望的なのも否定し難い事実だった。しかし、それでも必死に機体を操り、ほんの僅かでも構わないからミサイルの命中率を下げられないものかと足掻く。その為、今日はキャビンに首相が搭乗しているにも関わらず、深い角度で一気に機体を急降下させた。しかし、そんな彼の必死の努力を嘲笑うかのようにミサイルは接近を続ける。

「畜生め！ これなら、どうだっ！」

すると機長は、今度は逆に急上昇を仕掛けた。さらに、上昇しながらフレアを連続で射出してミサイルのシーカーを誤魔化そうとする。しかし今回は、ミサイルが正面から飛来した為に射出したフレアとミサイルの間に機体が入ってしまい、あまり欺瞞効果は得られなかった。それも手伝ってか、ミサイルは激しい機動やフレアに惑わされる事なく接近を続け、あらゆる回避手段が役に立たなかった事を証明する結果となった。

「くそっ！ ダメだ、命中する……」

「おお、神よ……」

結局、それが2人の最期の言葉となる。発射された2発のステイナガー・ミサイルは、ほとんど同時に機体上部のエンジン部分へ吸い込まれるようにして命中した。いくら小型の携帯式SAMだったとは言え、その破壊力は機体の外板を貫いてエンジン本体を破壊するのには充分である。

しかも、その内の1発はエンジンに燃料を供給するパイプが設置してある付近に突入した状態で弾頭が炸裂した為、燃料パイプ内の気化したジェット燃料へと引火し、その炎は瞬時に燃料タンクまで駆け抜け、最後は燃料タンク自体が大爆発を起こした。その光景は、まるで機体そのものが爆弾になったような凄まじさだった。

当然、それ程の威力を持って押し寄せてきた破壊力に機体が耐えられる筈はない。最終的に機体は、轟音と共に内側から膨れ上がった炎と衝撃波によって原型を留めない程に破壊されたあげくに火達磨となり、辺りに火のついた破片を撒き散らしながら地面へと急降

下していく。そして、落下中にも機体は小爆発を何回か繰り返した後、硬いアスファルトで舗装された地面へと激しく叩きつけられ、完全に破壊し尽くされた。

「危ない！ 逃げろ！」

「きやあああつ！」

同時に、ヘリの残骸が落下してきた地上では、突然の爆発音と共に上空から降ってきた無数の燃え盛る破片に驚いた人々が逃げ惑い、悲鳴を上げている。それ以外にも、上空から落ちてきた残骸に気を取られて運転操作を誤ったのか、交通事故まで起きていた。

そして、この一連の衝撃的な光景に呆然と立ち尽くしている者もいれば、怪我をした人を介抱する者や携帯電話で誰かに連絡を取っている者もいる。もしかすると、彼らの中には小惑星『ユリシーズ』の破片が落下してきた時の恐怖を思い出した者もいたかもしれない。

「おい、誰か救急車を呼んだのか！」

「消防もだ！ このままだと近付けねえ！」

ヘリの残骸が地上に激突してから1分以上が経過すると、徐々に混乱から立ち直りつつある人々が口々に叫び、自分達に出来る範囲で目の前の衝撃的な出来事に対処しようと動き始めている。

「そこ！ 無闇に近付くな！ 爆発に巻き込まれるぞ！」

「生きてる奴がいるかもしれねえだろ！？」

「よく見ろ！ この炎じゃ即死だ！」

そうやって人々が燃え続けるヘリの残骸を遠巻きに見守る中、どこか遠くの方で微かにサイレンの音が鳴り響いていた。そして、それが目の前で起きている惨事と何か関係があるのかどうかなど、彼らに知る術は無かったが、唯一、はっきりと断言できる事柄があった。それは、ヘリに搭乗していた全員が痛みや苦しみを感じる暇など一切なく、機体が大爆発を起こした直後に絶命し、ほとんど即死状態だった事である。ただし、その事実、どれ程の意味があるのかは誰にも分からなかった。

Mission 3A (後書き)

随分と遅くなつてしまいましたが、ようやく最新話の投稿です。
今回も、なんだか“戦争モノ”らしくない内容で長いですが、よろしく願ひいたします。

追伸：P V 1 2 0 0 ・ユニーク600突破

見捨てないで応援してくださった全ての方に感謝を。

Mission 3B

高速で一気に空へと駆け上がった2発のミサイルは、フレアまで放出して必死に回避機動を行うエルジア政府専用ヘリに立て続けに命中した。そして、ミサイルの発射から着弾までの一部始終を私の目は、しっかりと捉えていた。

ドドンー

次の瞬間、平穏な朝の街には不釣り合いな程の轟音が響き渡り、巨大な火の玉と化したヘリが更なる小爆発を繰り返しながら地面へと急降下していく。まるで、その光景は良く出来た映画の1シーンのようにも見え、どこか現実感を欠いたものだった。

それなのに何故か私は一連の出来事に完全に魅せられ、目に映る全てを脳裏に刻み付けようとしてもするかのように凝視し、その場で微動だにせず立ち尽くしていた。しかし、直ぐに意識を現実へと強引に引き戻して現状を正しく把握すると、いま採るべき最善の行動を躊躇わずに実行に移す。

「お前達。さつさと、ここから逃げるぞ！」

私はFIM-92Cを発射した2人にも逃げるよう命令すると共に、私自身も大急ぎで建物外壁に取り付けられた非常階段の方へ向かって駆け出す。すると、背後から何か硬い物をコンクリートの地面に落としたような鈍く乾いた音が聞こえ、その直後に同じように非常階段に向かって走る2組分の足音が加わった。

おそらくは事前の打ち合わせ通り、不要になったミサイルの発射機を捨てて彼らも逃走に移ったのだろうが、わざわざ後ろを振り返ってまで付いてきているかどうかを確認する事はせず、ただ全力で走り続けた。そうしたのは、この場所から1秒でも早く逃走する事が重要だと分かっていたからだ。

「おい、急げ！ 時間が無いんだ！」

屋上から地上まで非常階段を一気に駆け下りた私は、下りて来た

ばかりの階段の方を向き、未だに階段を下りている途中の2人を急かした。そして、数m先に停めてある車まで全力で走ると運転席に滑り込み、直ちにエンジンを掛けてブレーキを右足で踏んでギアをドライブに入れ、続けてパーキング・ブレーキも解除し、いつでも発車できるようにする。

ちなみに、この車は今回の計画に合わせて事前に用意しておいた盗難車で、ここへ来るのと逃走に使うのが目的だった。勿論、盗難車だと気付かれるまでの時間稼ぎの為、別の車のナンバープレートを付けてある。

「早くしろ！ 置いていかれたいのか？」

後はブレーキから足を離してアクセルさえ踏み込めば、いつでも逃走を開始できるようになったのと同じタイミングで、ようやく車まで辿り着いた2人がドアを開けて乗り込もうとする。だが、そんな彼らに向かつて私は、またしても急かすように声を掛ける。もしかすると、『こんな場所からは一刻も早く離れたい』という心理が私をイライラさせていたのかもしれない。

「あんたが早すぎるんだよ！」

その所為か、彼らの内の1人もイライラした口調で文句を言うてくるが、それを無視して前だけを見続けていた。そして、彼らが車に乗り込んでドアの閉まる音が聞こえた瞬間、ブレーキから足を離してアクセルを思い切り踏み込んで車を発進させる。すると、瞬間的に体がシートに押し付けられるような感覚と共に車は急加速し、狭い路地裏の道を猛スピードで疾走していく。

「折角、ここまで巧くいつてるんだから、こんな所で事故らないでくれよ」

先程とは違う男の方が弾む車内でシートベルトを締めるのに悪戦苦闘しながら、私の荒っぽい運転に文句を付ける。だが、私は今回も無視を決め込むと、惨劇の現場となった場所から一刻も早く離れようとアクセルを限界まで踏み込み、必死に逃走を続けるのだった。

『さて、そろそろか……』

頭に入っている逃走路と周辺の景色を照合しながら運転を続ける私は、広い通りとの合流ポイントが近付いてきた事を受け、それに備えて身構える。そして、今までのような荒っぽい運転を止め、目立たないように注意しながら裏通りから本線へと合流する。

『とりあえず、尾行はされていないな』

本線に合流して少し走ったところで道に迷った振りをしながら何度か車線を変更したり、交差点の信号を強引に突破したりして様子を窺ったが、特に怪しい動きをする車両は無かった。その為、私は尾行されていないと判断し、次の目的地に向かう事にした。

「なあ、こんなんで本当に大丈夫なんだろうな？」

すると、尾行の有無を確認する為の行動を不審に思ったのか、唐突に助手席に座る男が不安げな表情で聞いてきた。

「何も問題は無い。前に話した通り、この後の逃走手段も既に確保してある。それとも、お前は残りの報酬が欲しくないのか？」

尋ねられた事で反射的に彼の方へと向けていた視線を改めて進行方向へと戻した私が淡々とした口調で言い放つと、不安を口にした男は直ぐに黙り込んでしまった。なので、彼の真意がどうであれ、その沈黙を了承の証と受け取った私は、それきり何も喋らずに運転に集中する事にした。

そうやって首相の乗ったヘリを撃墜した現場から25分ほど郊外へ向けて車を走らせ続けると、古びた倉庫や放棄された工場が立ち並び寂れた雰囲気の漂う地区へと辿り着いた。そして、そんな無数の建物の中から迷う事なく目的の場所を探し当てると、そこにある半ば朽ちたように見える倉庫の中へと隠すようにして車を入れる。

「さあ、着いたぞ。さっさと車から降りるんだ。こいつは、ここで処分するんだからな」

車を停めてエンジンを切るのと同時に、ここで証拠隠滅の為に現場からの逃走に使った車を処分する事を告げ、半ば急かすような言い方で車から降りるよう彼らに命じる。しかも、電気工事会社の口ゴが入ったヴァンの傍にわざと停車したのを“新しい逃走用の車両

に乗り換える為”と勝手に解釈したらしく、彼らは何の疑いも抱かず素直に私の命令に従って車を降りてくれた。そして、そんな彼の行動を見ていた私は思わず頬が緩むのを感じた。

『間抜けな奴らだ……』

そう心の中で呟くと、トランクのロックを外してからエンジンを切り、私も同じように車から降りる。そして、車の後ろへと回り込んでトランクの中から大きな黒いボストンバッグを取り出して地面に置き、それと同時に胸元のホルスターから静かにサレンサー付きのハンドガンも取り出し、銃を持つ手を彼らから見えないように体の後ろへ隠した。

「お前ら。こっちへ来て手伝え」

そうやって全ての準備が整ったところで彼らに声を掛け、私に与えられた“本当の仕事”を片付けるべく行動を開始する。

「で、一体、何を手伝えばいいんだ？」

全く警戒している様子のない声と共に1人が姿を現す。さらに、もう1人がヴァンの方を指差しながら質問を寄越し、先に現れた男の後ろから歩いて来た。

「今すぐ、こいつで逃げるんじゃないのか？」

「その前に片付けておく事がある」

そう言いながらも私は彼らの動きをさり気無く観察し、行動を起こすチャンス静かに窺う。すると、程なく、それは訪れた。1人が自分の足元の近くにボストンバッグが置いてあるのに気付き、それを持ち上げようと屈んだ。そして、その時、もう1人の男は私に背を向けて立っていたのだ。

『今だ！』

そう直感した私は屈んでいる方の男の頭に素早く銃口を向けると、ダブルタップによる短い2連射を浴びせる。その途端、乾いた小さな音と共に銃口から放たれた2発の弾丸は至近距離だった事も手伝って的確に男の頭部を捉え、それを見事に貫通して彼を絶命させた。その結果、男は重く鈍い音を立てて背中から地面へと力なく崩れ落

ちる。

「なあ、いま何か変な音が……」

そう言いながら、もう1人の男が私の方へ振り向こうとする。だが、彼が最後まで言葉を発する事は無かった。なぜなら、こちらに完全に向き直ると同時に私が銃を撃ったからだ。

「ど、どうい……」

先程と同じようにダブルタップで放たれた弾丸は2発とも男の胸に命中して致命傷を与えたが、直ぐに死ぬような事はなかった。そして、銃撃を受けた彼は撃たれた箇所を反射的に手で押さえて膝をつき、低く呻くような声で私に問い掛けてくる。だが、私は彼の疑問には答えず、再び銃を構えると彼の眉間に照準を合わせた。しかし、今度はトリガーを引くような事はせず、そのまま彼が出血多量で死ぬのを黙って見つめていた。

『死んだか』

うつ伏せで地面に倒れた男の体から大量の血が流れ出し、血の海が出来るのを見届けた私は、脈拍を調べる為に首筋に指先を当てて死んだかどうかを確かめる。そして、死亡を確信すると周囲を素早く見回し、他に処分しておくべきものが無いかも確認する。幸い、周囲に変わった様子は無かったので、このまま計画を続行する事にした。そこで、手始めとしてポケットから携帯電話を取り出し、発信履歴から相手の番号を呼び出して電話を掛ける。

「後始末を頼む」

相手が電話に出た瞬間、極めて簡潔に用件だけを伝えたと直ぐに電話を切った。すると、殺した2人が勝手に新しい逃走用車両だと勘違いしたヴァンの後部ドアが開き、車内から2人の男が姿を現す。そして、彼らは無言で周囲を一瞥してからヴァンの中へ戻ると、予め気絶させて拘束しておいた別の男を抱えて出てきた。

「急げよ」

それだけ彼らに言うと、私は手袋をしてから地面に置いてあるボストンバッグを開け、中から別の鞆を取り出した。そして、新たに

取り出した鞆から殺した2人が使う予定だった偽造パスポートと航空券を取り出し、今では死体となった彼らの服に忍ばせた。勿論、これらは最初から“死体に添える為”に用意しておいたものだ。

「こちらは終わりました」

その時、ヴァンから出てきた男達の中の1人が私の傍へと近付いて来て、それだけを告げる。その声を聞いた私は、彼に持っていた鞆と2人の男を殺すのに使った銃を手渡してから新たな指示を出した。

「なら、この2つにも気を失ってる奴が使った痕跡を残してから助手席にでも投げ込んでおけ。その後は、ヴァンを綺麗にして我々が関与した事を示すものは全て消すんだ。ただし、残すべき証拠までは消すなよ」

「はっ」

そう言つて短く答えた男が遠ざかる足音を聞きながら、私も偽装工作を続ける。まだ中身の残っているボストンバッグを抱え上げ、それを再び車のトランクへと戻し、ボストンバッグの中に入っている装置が正常に機能するかどうかを確認した。そして、何も異常が無い事が分かると、装置を起動させてからボストンバッグとトランクを閉める。すると、背後に人の立つ気配を感じ、そちらを振り向くと私の指示で動いていた2人の男が待機していた。

「終わったのか？」

そう尋ねると、2人は軽く頷いて全ての細工が完了した事を認めた。

「では、我々も脱出する」

そう告げると、1人が現場からの逃走に使った車の運転席側へと素早く駆け寄り、エンジンを始動させる。さらに、もう1人の男が傍らにある縦穴を塞いでいた金属製の蓋を持ち上げ、地下水路へと続く脱出ルートを確認する。すると、激しくタイヤの空転する音が倉庫内に響き渡り、気絶した男を乗せたまま車が急発進した。

「先に行け」

車のエンジンを始動させて急発進させた男が私の横を全力で走り抜ける際、その声を掛けた。そして、それと同時にポケットから別の携帯電話を取り出すと、暗記している番号を手早く押していく。そうやって番号を入力して最後にコールボタンを押した瞬間、急発進して倉庫の出口に向かって走り出していた車が大音響と共に派手な爆発を起こして火達磨になった。

しかも、その爆発の規模は私が想像していたものよりも大きく、爆発で生じた熱気や衝撃波が容赦なく肌に突き刺さり、咄嗟に左腕で顔を庇うのと同時に僅かに表情を歪めた。もっとも、この派手な爆破も当初からの計画には入っており、私が関与した証拠を消すのと併せて『自爆テロを実行して死ぬのを恐れた男が2人を射殺して逃走を図ったが、結局は逃げる際に爆殺された』という筋書きを演出する役目を担っている。

その為、ヴァンの方には、わざと新たなテロ計画に関する断片的な情報や予備の武器・爆薬といった物を残しておき、この筋書きに信憑性を持たせてあった。

『後は、こいつを残していけば完了だ』

風で運ばれてくる煙や熱を避けるように姿勢を低くすると、死体となって倒れている男達の傍へ近寄り、意図的に即死させなかった方の男の指紋と血を起爆に使った携帯電話に付着させ、それを彼の手の脇へ置いてから立ち上がった。そして、足早に地下へと続く縦穴に向かうと後ろ向きになって側面に設置してある小さな梯子に足を掛け、下りるのに併せて金属製の蓋も閉めると、一気に1番下まで向かった。

「さあ、さっさと立ち去るぞ。もうじき、ここは騒々しくなるからな」

「はっ」

先に下りて待機していた2人に声を掛けて移動を促すと、私は迷う事なく地下水路の奥に向かって歩き出した。なお、今の爆破を実行した時点で私に与えられた任務は全て完了した事になり、後は人

目に付かないように脱出すれば良いだけとなっていた。その所為か、暗くて湿気の多い地下水路を歩いている割には足取りは軽かった。

ちなみに、今回の件で捏造した証拠について入念な調査を行えば幾つかの手掛りや矛盾点は発見できるだろうが、それを見越して捜査当局や司法省には別ルートを通じて入念な根回しがなされている。さらに、この一連の行動は“ブラック・オペレーション”存在自体が否定される極秘作戦”として扱われるので、全ての公式記録からも完全に抹消されていた。なので、私は余計な心配をせず、直ぐに次の任務に取り掛かる事ができた。

その衝撃的なニュースは、あっという間にユージア大陸全土へと広がり、多くの人々が深い悲しみに包まれ、犠牲となったリーベルマン首相の死を悼んだ。そして、それと同時に様々な噂も流れていた。その噂の中には陰謀説や暗殺説といったものも含まれていたが、この時点ではエルジア政府は言及を避け、ただヘリが墜落してリーベルマン首相を始めとした7名が犠牲になった事だけを認めていた。「繰り返しお伝えしていますように、本日早朝、エルジア共和国首都ファーンティにおきまして、リーベルマン首相を乗せた政府専用ヘリが墜落するという事故が発生いたしました。事故当時、ヘリには首相を始め計7名が搭乗しており、その全員の死亡が確認されています。なお、墜落の直前にヘリが空中で爆発したという目撃情報や、墜落現場から走り去る不審な車両を目撃したという情報もあり、捜査当局は事件と事故の両面から捜査を始めた模様です。それでは、ここで改めて事故の経緯を……」

この日、首相を乗せたヘリが墜落して全員が死亡したという情報が入って以来、どのマスコミも通常の放送を全て中止し、墜落事故についての緊急速報で一杯だった。そして、このように各放送局が流し続けるニュース映像は、政府庁舎内で待機していたルシコフ副首相も彼自身の執務室に設置してあるテレビで見ていた。

「どうやら、うまくいったようだな」

副首相がテレビのニュース番組から視線を逸らし、傍らに立っている男の方へ顔を向け、妙に落ち着いた口調で語りかける。

「はい。全て計画通りに進んでおります。後は現場にいる捜査官連中が用意された証拠を見付け、“テロ攻撃”という答えに達するのを待つだけです。そうなれば、こちらで計画を次の段階に移し、より本格的に活動を始める事ができますから」

男の言葉に副首相は僅かに口元を緩めて含み笑いをするが、直ぐに真剣な表情に戻って話を続ける。

「そうか。では、私は早々に記者会見の準備をしなければならんな。この不幸な出来事によって急遽就任し、怒りと悲しみに支配された国民を“正しい方向”へ導く国家指導者として表舞台に立つ為に」

「ええ、それが宜しいでしょう。既に必要な手は打っておりますので、この件に関する諸々の処理はお任せ下さい。ルシコフ首相」

「まだ首相ではないよ。まだ、な」

「おっと、これは失礼しました。どうも、私のような情報部の人間は形式に囚われず、事実を述べてしまう傾向があるようですね」

その男、N I S B（国家情報保安局）長官は無表情で冗談と言うには程遠いような冗談を口にする、軍高官のような仕草で姿勢を正して一礼し、そのまま踵を返して執務室を後にした。そして、彼が退室したのを確認した副首相は執務机の上に置いてある電話の受話器を取ると、副首相主席補佐官にここへ来るよう伝えた。

コンコンー

「失礼します」

ルシコフ副首相が電話を掛けてから5分程たった頃、執務室の扉をノックする音がして補佐官が顔を出す。すると副首相は、彼が入室して自分の方へと近付き、執務机の前へ辿り着くまで微動だにせず待つてから彼を呼んだ理由について話し始めた。

「早速だが、君に頼みたい仕事がある。リーベルマン首相が亡くなったのは非常に悲しい出来事だが、いつまでも悲しみに暮れている訳にはいかない。彼の意志を継ぎ、この国を正しい方向へ導く人物

が必要だ。それも、早急に。そこで、司法長官と最高裁判事に話したい事があるんだが……」

そこまでルシコフ副首相が話したところで補佐官は片手を挙げて彼の言葉を途中で遮ると、ここへ来た時から持っていたバインダーを開いて書類の束を取り出し、それに視線を落して内容を素早く確認していく。そして、一通り確認が終わると、再び顔を上げて静かに話し始めた。

「そう仰られると思い、今後の手続きに関わる閣僚の方々には既に話を通しておきました。後は、憲法に定められた通りの方法で貴方が宣誓を行えば、就任についての手続きは全て完了です。他に何か用件はありますか？」

「いや、それで充分だ。おかげで、手間が省けたよ」

この補佐官の先を見越した対応に満足そうに頷いた副首相は軽く礼を言い、それから手早く身支度を整えると、補佐官を従えて執務室を後にした。そして、10分ほど掛けて政府庁舎から隣接する国会議事堂の中にある部屋へと移動すると、そこには補佐官の言葉通り、政権の中枢を担う閣僚達がルシコフ副首相の到着を待っていた。

「どうぞ、こちらです」

副首相は補佐官に促されるまま、部屋の最奥で待つ人物の前へと近付いていく。ちなみに、この人物は最高裁判事で、エルジア共和国の首相に就任する際には判事（最高裁判事で無くても良い）の立会いの下、就任するにあたっての宣誓を行う事がエルジア憲章で定められていた。

「それで、ここに手を添えれば良いのか？」

「はい、そうです」

副首相は最高裁判事に小声で確認を取ると、演壇の上に置いてあるエルジア憲章を記した分厚い革表紙の本に左手を添えた。そして、肘の角度が直角になるように右手を掲げ、手の平が正面を向くようにすると宣誓の言葉を述べ始める。

「私はここに、第59代エルジア共和国首相に就任する事を宣言し

ます。この瞬間より、私はエルジア憲章を遵守し、いつ如何なる時でも国民と国益の為に全力を尽くす事を誓います。また私は、法の下で平等かつ誠実な指導者であり続ける事を誓います」

「その言葉に、嘘・偽りはありませんね？」

「はい、ありません」

「その誓いを、お忘れなきよう」

ここで最高裁判事は一呼吸おき、それから残りの言葉を続ける。

「ここに私はエルジア憲章の定める法を代弁する者として、彼をエルジア共和国首相と認めます」

最高裁判事が最後の言葉を口にし、これで宣誓の儀式は全て終了した。そして、この宣誓が終わった瞬間からルシコフ副首相は第59代エルジア共和国首相への就任が正式に認められ、この部屋にいた全員から首相への就任を祝う拍手が送られた。もともと、前首相の突然の死に伴う形での就任だった為、手放しでは喜べない者がいたのも確かだ。

「就任、おめでとうございます。ルシコフ首相」

「ありがとうございます」

それでも、ルシコフ新首相の一番近くにいた最高裁判事が最初に祝福の言葉を述べ、こうして首相へと就任した彼に握手を求めてきた。すると、就任したばかりの彼も笑顔で握手に応じる。しかし、それと同時にルシコフ首相には早急に片付けなければならない案件が数多く控えていた。そして当然のごとく、それらの中で最も重要な案件は、リーベルマン前首相を乗せたヘリの墜落事件に関するものであった。

先の首相就任に伴う宣誓の儀式から約1時間後、ルシコフ首相就任の事実を国民も含めた全世界へと伝える為の記者会見がエルジア共和国の国会議事堂にある会見場で開かれていた。

「まず最初に、亡くなられたリーベルマン前首相の冥福を祈って1分間の黙祷を行いたいと思います。全員、ご起立ねがいます」

会見の開始予定時刻を少し過ぎた頃、上院議会の報道官を務める人物が記者会見に先立って故人の冥福を祈る為の黙祷を行う事を伝え、ガタガタという物音と共に会見場にいた全員が立ち上がって目を瞑り、それまでの喧騒が嘘のように静まり返った。そして、黙祷をする間、空調システムの稼動する音だけが会見場に響いていた。

「ありがとうございます。着席して結構です」

報道官が黙祷の終了を告げると、再びガタガタという物音がして会見場に集まってきたいた報道陣が一斉に着席する。そして、報道官と入れ替わるようにしてルシコフ首相が静かに演壇へと歩み寄り、会見場全体を左から右へゆつくりと見渡してから正面へと視線を戻し、いつもの彼と同じような口調で記者会見を始める。

「エルジア国民、ならびに全世界の皆さん。私は第59代エルジア共和国首相に就任したヴァレンチン・ルシコフです。この度は不幸な出来事によって急遽、首相に就任する事となりました。ですが、国民と国家の為に全力を尽くす事を、この場で改めて宣言したいと思います。そして、今まで以上に政権運営に尽力していく所存です。なお、国民の皆さんにとっては今後の政府方針が大いに気になるところでしょうが、当面の間は『経済復興と市民生活の安定を優先する』という前政権の政策から大きな変更は行わないつもりです。ただし、外交面では多少の方針の変更はありますが、全てはエルジア共和国の復興と発展の為である事を約束します。なので、どうか国民の皆さんの力を私に貸して下さい。そして、共に明るい未来を目指しましょう」

ルシコフ首相の就任演説を受けた会見場内が僅かにざわつき、記者達が慌てて手元のメモにペンを走らせる。なぜなら、色々と回りでい表現を使ったものの、事実上の外交方針の変更を政府として認めたからだ。そして、ルシコフ首相は対外強硬派の1人として国の内外に広く知れ渡っており、彼の発言は今後の外交政策を判断する上で大きな意味を持つてくるだろう。それと同時に、この発言は

反エルジアを掲げる国々を刺激し、今まで以上に関係が悪化する可能性も十分に秘めていた。

「就任についての挨拶は以上で終わりますが、ここで皆さんに衝撃的な事実を伝えなければいけません」

そう言うところシコフ首相は急に声のトーンを落とし、会見場が集まった者達の注意を再び自分に向けさせた。しかも、彼の表情からは、それが決して“良い報せ”で無い事が窺える。そして、全員が自分の次の言葉を待っている状態になったのを確かめ、それから“衝撃的な事実”を伝える。

「これは、つい先程、新たに判明した事実ですが、リーベルマン前首相の死は単なる事故死ではありません。彼は殺されたのです」

この最後の『殺された』という表現が決定打となり、会見場内は一瞬にして騒然とした雰囲気包まれた。そして、この事実を知らなかった誰もが驚愕の表情を浮かべ、口々に何かを呟いてはルシコフ首相に次々と質問を投げ掛けていく。

「ちょっと待って下さい。『殺された』とは一体、どういう事なんですか？」

「暗殺説は否定されたのでは？」

「静かに、静かに。どうか私の話を最後まで聞き、冷静な対応をお願いします」

しかし彼は、手振りも交えて記者達からの質問の嵐を何とか制すると、会見場内が落ち着きを取り戻すまで暫く待ってから発言を再開する。

「詳しい事実関係は今なお調査中ですが、墜落現場の近くからは殺害を裏付ける証拠も回収されています。それ以外にも幾つかの証拠が発見されたとの報告が入っており、現在、捜査機関が中心となつて全力で事実確認に当たっています。よって、この件につきましては後程、きちんと情報を整理した上で改めて発表します。ですから、ここに集まっている皆さんには、くれぐれも勝手な憶測や報道などで無用の混乱を生み出すような行為は控えて戴きたい。また、国民

の皆さんにおきましては、我々を信じて冷静に判断してくれる事を期待します」

ここで首相は言葉を切ってから会見場内を一通り見回し、自分の発言が与えた影響を確かめるような素振りを見せた。

「これで就任演説、ならびに前首相の死亡事件に関する発表は終了します」

最後に締め括りの言葉を述べた首相は後ろへ下がって演壇の前から離れ、そのまま体の向きを変えると、早足で出口に向かって会見場から立ち去ろうとする。当然、ここに集まっている記者達からは先程以上の勢いで一斉に質問の嵐が浴びせられるが、それらを彼は完全に無視する事を決め込んだらしく、記者達の方を全く見ようとせず姿を消した。

「今日の記者会見は以上で終了です。なお、質問は受け付けません」
「本当は犯人について何か情報を掴んでいるんでしょう？」

「政権内部にいる一部反対派による暗殺、という噂も聞こえてきますが、それについて何か反論は？」

首相が退室したのを見計らって報道官が会見の終了を宣言するが、あんな発言の後では集まった記者達は簡単には引き下がらない。むしろ彼らは、どんな些細な事でも構わないので、何らかの情報が得られるのではないかと必死に食い下がった。

しかし、報道官を含めた他の政府関係者も余計な事は言わずに次々と会見場から立ち去り、結局、この日の会見は“政府から最初の公式発表が行われただけ”という形で幕を閉じた。そして、残された報道陣も新首相の就任と前首相の暗殺という2つのスクープを大急ぎで全世界へと伝える為、足早に会見場を後にしていった。

Mission3B (後書き)

いつも以上に遅くなってしまうましたが、なんとか更新する事ができました。せめて今後は、月一のペースぐらいで更新したいものですね……。

相変わらず今回もストーリーの進行速度は遅いですが、楽しんでいただければ幸いです。

Mission 3C

2000年11月7日

あと数分で午前4時になるうとしている時、暗闇に包まれた2階建ての建物、かつては数ある町工場の1つとして使われていた建物で“ある作戦”が実行されようとしていた。その為、私の周囲では多くの人間が緊張した面持ちで忙しく動き回っている。

そして、それだけでも充分に異様な光景なのだが、建物に最も近い場所で待機している者達の姿は特に異様だった。なぜなら彼らは皆、一様に黒いヘルメットと防弾ベストで身を固めた上に顔も同じような黒いフードで覆って表情を隠し、その状態でナイトビジョン・ゴーグルを付けていたからだ。さらに、それぞれが銃を構え、いつでも射撃できる態勢を整えている。

なお、彼らはN I S B対テロ作戦課に所属する特殊部隊員で、今回は私が現場指揮官として作戦を指揮する事になっていた。

「おい、封鎖はまだか？」

私は少しイライラした様子で傍らにいた男に尋ねる。すると、彼は無線機を手にして何処かと連絡を取り始めた。

「いま、確認します。もう少し待って下さい」

「時間が無いんだ。早くしろ」

そんな事を言っても何の意味も無いと頭では分かっていたが、それでも私は彼を急かすような言葉を口にする。そして、90秒程が経過した頃、ようやく待ち望んでいた報告が耳に届く。

「周辺地域一帯の封鎖、全て完了しました。それと、戦術チーム各班も全員、所定の位置に就いています」

「よし。踏み込むぞ！」

そう命じた瞬間、事態は一気に動き出す。

「作戦開始！ 繰り返し。作戦開始だ。突入しろ！」

傍らにいる男が無線機に向かって叫び、私の命令を今回の作戦に
関わる全ての人間に伝える。それと同時に別の男が目の前にある扉
へ素早く近付き、慣れた手つきで爆薬を仕掛ける。そして、私に向
かってハンドシグナルを送り、そのまま起爆への手順を開始した。
『ここからは時間との戦いだな』

そう心の中で呟いた私は、手にしたハンドガンのグリップを強く
握り締める。直後、扉に仕掛けた爆薬が爆発し、派手な音と共に扉
は大きく変形して建物内部に向かって吹き飛んだ。

「一気に制圧しろ！」

私は叫ぶのと同時に扉が吹き飛ばされた箇所から建物内へと真っ
先に突入する。その直後、正面に銃を手にした男が立っているのに
気付き、咄嗟に男の胸の辺りに狙いを定めて連続でトリガーを引き、
相手が倒れるまで連射を浴びせた。そして、素早く手近にあった遮
蔽物の陰に身を隠し、周囲の様子を窺う。

すると、私を通ったのと同じ箇所から5人の隊員が次々に突入し、
敵に正確無比な銃撃を浴びせながら建物の奥へと移動していった。

さらに、建物の上の方からも爆発音がして何かが吹き飛び、別働隊
が突入して敵に容赦のない銃撃を浴びせていくのが一瞬だけ見えた。
『次は、あそこか！』

多方向から同時に攻撃を受けた敵が混乱し、こちらに対して無防
備な状態になっている奴がいる事に気付いた私は、その敵に向かっ
て容赦なく銃弾を叩き込んだ。そして、敵が地面に崩れ落ちるのを
目撃すると、直ぐに遮蔽物の陰に身を隠して空になったマガジンを
抜いて新しいマガジンと交換する。その直後、身を隠している遮蔽
物に銃弾の当たる音が響き、反射的に体を縮こまらせて銃撃が止む
のを待つ。

「くそっ！ 釘付けかよ！」

一向に止む気配の無い銃撃に苛立って悪態をついた時、また新た
な爆発音が建物内に響いた。そして、その爆発に続いて銃撃音が一
斉に鳴り響き、私に対する銃撃が止んだ。どうやら、もう1つの別

働隊が突入したらしい。

『今なら……』

当然、このチャンスを私が逃す筈はなく、遮蔽物の陰から半身を晒すと反撃に転じた。まずは牽制射撃で敵を怯ませ、その隙に射線を確保するべく別の遮蔽物の陰へと移動する。そして、こちらからの銃撃が止んだのを見計らって反撃の為に身を乗り出した敵に銃弾を連続で浴びせ、逆に返り討ちにした。その後、再び遮蔽物の陰に隠れると、素早くマガジンを交換してから移動する。

「3時方向に敵、2名！」

頭の上から誰かの叫ぶ声が聞こえ、私は反射的に右を向こうとしたが、それよりも早く一斉射撃の音が響いた。そして、直後に悲鳴のような声も聞こえたが、直ぐに静かになる。

「クリア！」

再び声が聞こえ、敵を制圧した事を報せてきた。それを聞いた私は注意を前方のエリアへと戻し、新たな敵の出現に備えようとした。すると、その時、何かが視界の隅で小さく動いたような気がした。

『いま、何かが……』

そこで私は一瞬、動きを止めて違和感を憶えたものの正体を探ろうとする。

「死ね！ 政府の犬がっ！」

ところが、そこには敵が潜んでいたのだ。その男は突然、大声で叫ぶと物陰から飛び出し、最も近くにいた私にサブマシンガンの銃口を向けてきた。私は突然の出来事に思考が停止しそうになったが、咄嗟に手にしたハンドガンの銃口を男の方へ向け、そのまま全弾を叩き込む覚悟でトリガーを立て続けに引いた。

「ぐあっ！」

「くっ……」

結局、この銃撃戦を制したのは私だった。私の方が僅かに早く銃撃を開始したらしく、敵はくぐもった声を発して倒れる。しかし、撃たれた衝撃でトリガーを引いてしまったようで、倒れながらサブ

マシンガンを乱射して周囲に弾をばら撒き、派手に火花を飛び散らせた。そして、その内の1発が跳弾となって私の頬を掠めたのだ。

『死んだか……？』

倒れた男に銃口を向けたまま近付き、男の右手の傍に落ちていたサブマシンガンを蹴り飛ばしてから死んでいる事を確認する。そして、念の為に周囲を一瞥して他に敵が潜んでいないかを確認してから移動を再開した。

「クリア！」

「敵影、なし。クリア！」

私が遭遇戦で1人を始末してから数分と経たない内に各所で制圧完了を意味する声上がり、建物を完全に制圧した事を知る。

「制圧を完了しました。敵は全員射殺、こちらに被害はありません」
「そうか。直ちに、証拠を押収しろ」

突入前に私の傍で指示を出していた男が代表して報告してきた。それを聞いた私は、手にしたハンドガンのセーフティを掛けてからホルスターへと戻し、新たな命令を下すと同時に私自身も証拠の押収を始めた。

『まずは、こいつから始めるか』

そう心の中で呟きながら傍らに置いてある電源が入ったままのラップトップに視線を向け、ディスプレイに表示されているものに素早く目を通していく。だが、そこには特に有益な情報は表示されておらず、より詳しく調べる為にハードディスク内のファイルを開こうと考え、ラップトップに手を伸ばした際に腕をぶつけて近くの小さな木箱を地面に落としてしまった。その途端、乾いた甲高い音が建物内に大きく響き、皆の視線が一斉に私に注がれる。

「何でもない。気にせず、作業を続けてくれ」

ほんの少し気恥ずかしい思いをしながら手振りも含めて言うと、私は落とした木箱を拾おうと屈みこむ。ちなみに、落ちた時の音から軽い事も分かっていたので、木箱を片手で掴んだまま勢いよく立ち上がる事で持ち上げようとしたのだ。

「ん、あれは何だ……？」

その時、作業台の奥の方で赤い光が一定のリズムで点滅している事に気付く、木箱を持ち上げる動作を中断して光の正体確かめようと覗き込んだ。その瞬間、私の思考は凍りつき、木箱が手から滑り落ちる。なぜなら、そこには爆弾が仕掛けてあり、しかも爆弾は既に起爆へのカウントダウンを刻んでいたからだ。

「くそっ！ 爆弾処理班を……！」

なんとか意識を現実へと引き戻した私は爆弾処理班を呼ぼうとしたが、そこに表示された残り時間が1分30秒になるうとしてるのを見て解除を諦める。どう考えても、今から爆弾処理班を呼んだところで間に合わない。そして、そんな私に追い討ちを掛けるような報告を建物内にいる隊員達が次々に叫んだ。

「1階、南側で爆弾を発見！」

「1階東側だ！ こっちにも2個ある！」

「2階にも爆弾が設置してあるぞ！」

どうやら敵は我々が突入してきた場合に備えて至る所に爆弾を仕掛け、証拠もろとも我々を吹き飛ばすつもりだったらしい。

「全員、退避！ 急いで建物から出る！ 吹き飛ばすぞ！」

もう迷っている暇は無かった。私は建物内にいる全員に脱出を命じると、咄嗟に証拠品の1つであるラップトップを掴み、そのまま力任せに引つ張りながらコード類を抜いて脇へと抱える。そして、最も近い位置にある出口へ向かって全力で走った。

「逃げ！ もう時間が無い！」

「こっちだ！ 早くしろ！」

口々に叫ぶ声が聞こえるが、それが誰の声で、何処から聞こえているのかを推測している余裕など無い。とにかく今は全力で走り続け、1秒でも早く、1mでも遠くへ逃げる事しか考えられなかった。「爆発するぞ！」

外へと繋がる出口まで後1m程に迫った頃、そんな叫び声を聞いた気がした。その瞬間、私は残った力を振り絞り、死に物狂いで出

口を目指して走った。そして、建物の外へ足を大きく踏み出すのと同時に背後から激しい衝撃に襲われる。

「かはっ！」

まるで、何か途方も無い大きな力で背中を殴られた時のような痛みが全身を貫き、肺の中の空気が一瞬にして空になって呼吸が止まる。さらに、そのまま勢いよく吹き飛ばされて地面に思い切り叩きつけられた。その直後、爆発によって生じた炎が建物の外にまで噴き出し、私の体の上を物凄い勢いで通過していった。

「ぐっ……！」

私は何とか起き上がろうとするものの、立て続けに受けた強烈な衝撃で感覚がおかしくなったのか、周りの動きが全てスローモーションのようにゆっくりとしたものになり、やたらと甲高い音ばかりが耳に響いて意識がはつきりしない。それどころか、自分の置かれている状況すら満足に把握する事ができないでいた。

『私は何故、こんな所にいるんだ？ しかも、やたらと体が重い…』

そんな風な事を考えていると、誰かが駆け寄って来るのに気付いた。

「しっかりして下さい！ もう直ぐ助けが来ますから、それまで動かないで！」

「それよりも、私は……」

駆け寄って来た人物に向かって手を伸ばし、何かを訴えかけるようにして声を絞り出したのだが、その行為はあっさりと制止される。「動かないで！ もう直ぐですから！」

私には彼が何故、そこまで必死になって私の行動を制止しようとするのかが分からなかったが、とりあえずは言われた通りにする事にした。

「こっちだ！ 早く、早く！」

そう叫んで彼が手招きする方向には3人の人間が居て、その内の1人は担架、もう1人はプラスチック製のケースを持っていた。そ

して彼らは私の傍へ駆け寄ると、手際よく作業を開始した。

「こつちを向いて下さい。私の言葉が分かりますか？」

ケースを持っていた人物が私の顔を覗き込むようにして尋ねてきたので、それに頷きながら答える。

「ああ、分かる」

「意識あり」

すると、彼が呟くように言った。だが、今の状況を把握しきれない私には、彼が何を知りたいのかが理解できなかった。

「では、どこか痛いところはあるか？」

そう言っただけで再び尋ねてきたので、私は自分の感覚を頼りに痛み箇所を探す。当然、思い切り吹き飛ばされて地面に叩きつけられたのだから体中が痛かった。なので、その中でも特に強い痛みを感じる部分だけを告げる。

「背中と右腕、それに脇腹もだ。それから頭痛が酷い」

「分かりました。それでは、応急処置をするのと同時に鎮痛剤も打っておきます」

簡単に説明した彼はケースから注射器を取り出し、それを打ってから応急処置を始めた。そして、手早く処置を終えると、一緒にやって来た2人に私の事を託して立ち去ってしまった。その後、私は残された2人の手で担架に載せられ、そのまま救急車へと運ばれたのだが、そこから先の記憶は曖昧で次に意識を取り戻した時には病院のベッドの上だった。

こうして意識を取り戻した私が聞かされた話によると、私自身のケガは金属の棒が脇腹に突き刺さった事による裂傷と腕や肋骨の数箇所骨折を負ったものの、命に別状は無かったそうだ。ただし、建物に突入した隊員の内の3名が死亡して5名が重軽傷。しかも、重傷の1名は今も昏睡状態が続いている、という決して手放しで喜べるような代物では無かった。

ちなみに、私が咄嗟の判断で持ち出したラップトップからはリールマン首相暗殺に関する情報が発見され、現在は総力を挙げて破

損したファイルの復元と調査が行われていた。

2000年11月9日

リーベルマン首相の暗殺と新政権の誕生という衝撃的なニュースが全世界へと流れた3日後、更なる衝撃が世界を包み込んだ。その衝撃とは勿論、リーベルマン首相暗殺に関する新情報に他ならなかった。

「……という事実が新たに判明しました。よって我が国としましては、より一層の規制強化や入国審査基準の更なる厳格化を検討中です。それと今後は、今回の事件についての謝罪と賠償の請求も求めるつもりであり、関係各国には真摯な対応を……」

「ああ、もういい。消してくれ」

シンクレアFCU評議会議長は、心底うんざりした表情でテレビを消すよう補佐官に命じた。ここはFCU本部ビル内にある議長執務室で、今はシンクレア議長を始めとする評議会の中核メンバー数人が集まっていた。ちなみに、先程のテレビ画面に映し出されていた映像は、エルジア議会の公式発表の模様を中継した際のニュース映像である。

「で、あの内容は事実なのか？」

評議会メンバーの1人が疲れきった表情で尋ねた。すると、シンクレア議長が大きな溜息をついた後、喉の奥から声を絞り出すようにして答える。

「残念ながら、あれは事実らしい。我々が持つ独自のルートを使い、こちらでも確認したのだから、まず間違い無いだろう」

その言葉に場の空気が更に重くなる。その件に関しては実際のところ、幾つかの不審な点もあったのだが、既に確認されている数々の物的証拠の前では、ほとんど無意味に等しかった。

「しかし、こうも事態が一気に加速するとは、どうも納得できんな

……」

「今更、そんな事を言っても始まらんだろう。ああやって証拠を出された以上は、それが事実だと認めるしかない。それどころか、下手に騒げば我々の方がいい笑いだ。むしろ今は、どうやって事態を収めるのかを考えた方が賢明じゃないのか？」

一応、FCUとしての方針は会議など開かなくても決まっているのだが、自分達への責任問題にまで発展するのを避ける具体的な対応策を何一つ持ち合わせていないのが現状で、まして全員の黙り込んでしまった。そんな中、シンクレア議長は机の上に置いてあった資料を手に取り、そこに書かれている懸案事項に改めて目を通す。

<リーベルマン首相暗殺に関連する重要事項>

実行犯はFCU加盟国の国籍を持つ3名の男達であり、テロ組織との繋がりがあるとしてブラックリストにも載っている。そのテロ組織とは反エルジアを唱える組織で、ユージア大陸各地に拠点があり、その中にはFCU加盟国も多数含まれている。

政府専用ヘリの撃墜に使用されたミサイルはFCU加盟国が製造・輸出し、加盟国内の国軍で広く使用されている。また、先月に発覚した正規軍兵士による“武器横流し事件”で無くなったミサイルのシリアル・ナンバーとも一致。

FCU加盟国内にある複数のペーパー・カンパニーを経由した不審な送金と、『偽造屋』と呼ばれる女の不審な事故死。

― 外交機関からの報告書より抜粋 ―

それは今回の会議に間に合わせる為に大急ぎで準備された資料らしく、明らかに手書きと分かる文字が並んでいた。そして、当然の事ながら、そこに書かれた文字を議長がどれほど見つめても消える事は無かった。

「こうなったら、“過激派による卑劣なテロ行為”という最もインパクトの強い主張を最後まで押し通すしかないな。幸い、エルジア政府による公式発表でも過激派の関与は認めている訳だし、民衆の

我々への批判の矛先を回避するには有効な手だろう。もつとも、それだけで向こうの連中が納得するとは到底、思えんのだが……」

眉間に皺を寄せて睨みつけるような表情で見ていた資料を机の上に置き、顔を上げたシンクレア議長が大きく溜息を吐いて静かに呟くと、明確な自分の意見を持つていなかった他の面々が急に賛同を示す言葉を口にし始める。

「そうですね。大体、こちら側の人間と武器が関与していたとしても、“その責任が我々にある”などという発想に行き着く方が異常だ」

「ああ、その通りだ。考えてみれば、そのようなテロリスト共の正体を見抜けず、易々と入国を許した奴らの方にこそ責任があるのだ。にも関わらず、その責任を我々に押し付けようとするなんて、図々しいにも程がある」

「この際、その責任転嫁を逆に利用してやる、というのはどうだ？ うまくやれば、奴らの国際社会における評価を下げさせるのも可能なんじゃないか？」

こうなると人間とは現金なもので、急に厚かましくなる。先程までの暗い雰囲気は完全に消え去り、それどころか、この状況を利用して事態を有利に運ぼうとさえ考え始めていた。しかし、この時は、そういった考えを抱く事の危険性を彼らは全く理解していなかった。その為、あらゆる出来事を反エルジア宣伝に利用しようとする企む性質を逆手に取られ、自分達の方が罠に嵌められている事に彼らは気付いていなかった。そして結果的には、そういった自分達の希望的観測から生じた判断の甘さと現実感の欠如が後に事態を引き返せない状態にまで悪化させてしまうのだが、彼らがエルジア側の“真の目的”に気付いた時には完全に後手に回ってしまっていた。

2000年11月11日

「ありがたい事にFCUの連中は、こちらの誘いにまんまと乗ってくれたようだな」

私は首相専用の執務室で現政権を構成する主要メンバーを前にして呟く。勿論、この場にいるのは、我々が政権を握る為に起こした一連の陰謀を計画したメンバーの中でも中核を担っていた者達ばかりだ。なので、このような会議の場であっても堂々と我々の本来の目的についての話をする事ができた。

「ええ、こつも簡単に乗ってくるとは思わなかったので、正直、拍子抜けといった感じですよ」

「おいおい。そんな風に油断してると、どこかで足元をすくわれるぞ？」

多少の遅れはあったものの、今のところは計画通りに進んでいる事もあり、どこか穏やかな雰囲気さえ漂っている。しかし、ここからが本当の始まりである。この日の会議は、それを再認識させて浮ついた気持ちを抑える意味合いもあり、私は普段よりも厳しい表情と口調を装って話し始める。

「彼の言う通りだ。計画は、まだ始まったばかりなんだぞ。むしろ、こつやって第1段階が成功したからこそ、今まで以上に慎重に行動すべきなのだ。そして、この会議を開いた目的の1つには、その事を諸君らに改めて認識してもらつという意味がある。私の言いたい事は分かつたかな？」

そこで私は一旦言葉を切ると、全員の顔を一通り見回し、私の言った事の意味を十分に理解しているかどうかを確かめる。そして、先程までの浮ついた雰囲気が消えた事を察すると、ようやく本題へと入った。

「さて、最初の議題は今後のFCUの動向についてだ。先に行った公式発表が我々の仕掛けた罠だとも知らずに、うまく思惑通りの行動を取ってきたのは承知しているな？」

私の言葉に残りのメンバーが一様に頷く。

「報告では一応、形だけの過激派摘発やテロ対策の強化を表明して

いるようだが、そんな事は既に織り込み済みだ。むしろ、成果が上がらなければ、逆にこちらが利用してやるだけだからな。とにかく、奴らが批判を強めて強硬な態度になればなる程、我々にとっては都合の良い状況になる。大方、そんなところだ」

「少し宜しいでしょうか？」

最初に断りをいれると、メンバーの1人が手を挙げた。そこで私は、声のした方に顔を向けてから軽く頷き、彼の発言を許可する。

「実は、ここに興味深い報告があります」

そう言っただけで、会議に参加している人数分だけコピーした資料をそれぞれに手渡してくる。そして、資料を渡された私達は直ぐに目を通し、そこに書かれている内容に驚きを隠せなかった。その事は、あからさまに表情を変える者が居た事からも分かる。

「ふむ。確かに君の言う通り、これは実に興味深い内容だな」

数分後、ここにいる者達が共通して抱いた感想を代表して述べるかのように、メンバーの1人が感慨深げに呟いた。勿論、私も彼と同意見である。なお、その資料に書かれていた内容を簡単に要約すると、FCU側も我々と同じように対立が深まる事を望んでいる節があり、その為の大義名分を必死に探している、というものだった。なんとも奇妙な話ではあるが、あらゆる分野で対立関係にある我々とFCUの目的が、ここに来て見事に一致したのだ。こうして改めて考えてみても、どこか悪い冗談としか思えないような話だが、この状況を見逃すのが惜しいのも事実だった。

「なら我々は、奴らが望む通りの道化を演じてやろうではないか」
そこで私が皮肉めいた口調で結論を述べると、他のメンバーも一斉に頷いて同意を示し、この案件については早々に結論に達した。ちなみに、具体的な行動指針の作成については外務省を始めとした関係機関に一任する事になっているので、ここでは政府としての方向性を決定するだけに留める。その後は、今から議論が行われて結論が出されるであろう他の多くの案件と共に、各省の担当部署へ指示がいく手筈となっていた。

「さてと、次は国内における経済対策だったな。それで、現状は？」
そう言って尋ねると、メンバーの1人がフォルダーに綴じられた書類の束を手渡してくる。そして、私が十分な時間を掛けて渡された書類の全てに目を通す間、室内は奇妙な静寂に包まれていた。

「この数字を見る限り、予想よりも成果があがっていないようだが、原因は分かっているのか？」

「やはり、首都近郊を襲った津波の被害は無視できません。特に金融市場が受けたダメージは大きく、当初の被害予測よりも遥かに深刻でした。それと、観光産業が受けた打撃も小さくはありませんし、こちらも復旧の目処は全くと言って良いほど立っていないのが現状です」

そこまで答えたところで彼は言葉を切り、机の上に置いてあった別の資料を手に取り、それに視線を落としながら説明を続ける。

「それと、これは前政権が掲げた方針による影響ですが、今まではインフラの復旧と国民の生活水準の回復に重点が置かれていた事も成果があがっていない原因の1つだと思われます。その為、一部の製造業や建築業を除いた産業界への支援は低く抑えられていましたから」

「なる程。いかにも、彼が好みそうな政策だ」

そう呟いて私は、不幸にもテロリストによって殺された事になっている前首相の顔を思い浮かべる。確かに彼の政策は多くの国民から支持を受けていたが、特定の産業界や富裕層からの支持は低かった。もともと、国民全体としては前首相を支持する人々の方が人数で勝っていたので、民主主義に則った選挙では勝利を収めている。そんな状況だったからこそ、正攻法による早期の政権奪取が困難だと判断し、我々はリスクを承知で賭けに出たとも言える。

「なら今後は、より国益と経済活動を重視した政策に移行すべきだな。違うか？」

私は方針を大きく転換する事を全員に向かって告げる。

「ええ、その通りです」

「この国の未来を真剣に考えるのであれば、それが最善の策でしょう」

すると、あちこちから賛成の意を示す声上がり、誰一人として反対する者はいなかった。もともと、反対意見が出ない事は最初から分かっていたので、私は特に気にする訳でも無く、淡々と話を続ける。

「今後は、航空産業とハイテク産業の振興に力を入れようと考えている。それと、軍事力を強化する為に軍事産業の再建と拡張にも出来るだけ早い時期に着手するつもりだ。で、これらの案件について何か意見のある者は？」

私が意見を求めると早速、メンバーの1人が手を挙げた。それを見た私は彼の方を向き、軽く頷いて発言を許可する。

「その為に必要な資金は、どこから捻出するのですか？」

それは、この話を聞けば誰もが直ぐに思い浮かぶ類の意見だった。未だに小惑星『ユリシース』落下の痛手から回復しきっていない現状では、そのような資金を調達する余裕が国家予算に無いのは明白である。しかし、それ故に、このような意見が出る事は想定済みで、この質問に対する回答を私は既に用意していた。より正確に言えば、政策決定に必要な判断材料を我々に提供しているシンクタンクの分析結果から導き出した結論である。

「今まで復興支援に回していた資金の一部を転用するつもりだ。勿論、削減の主な対象は他国への支援金だ。後は、原油や天然ガスといったエネルギー資源、それに鉄鉱石やボーキサイトといった鉱物資源を中心に、いくつかの輸出品目で価格の引き上げも検討している。ただし、レアメタルやレアアースについては輸出货量そのものを減らす。これは自国内での需要増加に対応する為だが、主要供給国である我が国が輸出を控えれば市場価格そのものが上昇し、結果的に我々に利益をもたらすだろう。それ以外にも関税を見直すよう他国に圧力を掛け、農作物や工業製品の輸出拡大を図る。さらに、既存の公共事業への追加として港湾施設と空港機能の拡張計画がある

が、こちらは新規の国債発行で賄う。今は大体、こんなところだ」

私は一気に話し終わるとメンバーの顔を順繰りに見ていき、他に意見や質問があるかどうかをただけで尋ねる。しかし、今度は誰も手を挙げなかった。その状況を見た私は軽く頷き、先程と同じように実際に実行する各省庁に現政権の方針を伝え、具体的な行動計画が完成次第、それを我々にも報告して許可を貰うよう指示を出しておいた。

「次は軍部の再編計画についてだが、それについては国防省から既に計画案が提出されている。まずは全員、それに軽く目を通してくれ」

そう言うとは私は補佐官の方へ顔を向け、予め人数分用意しておいた資料をメンバー全員に配るよう指示を出した。すると、指示を受けた補佐官は鞆からフォルダーに収められた資料の束を取り出し、それをテーブルの端の席に座っていたメンバーの1人に手渡す。彼らは1番上から自分の分を取ると、残りを次のメンバーへと回していく。そして、資料を手にした者から順に中身に目を通し始めた。その結果、暫くの間は資料を捲る音と微かに呟くような独り言だけが室内に満ちていた。

「さて、全員、概要は把握したな？」

大方、皆が資料に目を通し終えた頃合だと判断した私は、そう言うて全員の注目を自分に向けさせる。

「私は概ね、この方向で再編を進める事に依存は無いが、ぜひとも諸君の意見も聞かせて欲しい」

私が意見を求めると早速、2人のメンバーが手を挙げた。その仕草を見た私は一呼吸おいてから彼らの内の1人を指差し、発言を許可する。

「この計画案によれば、陸海空戦力の大幅な増強が目的なのは明らかです。ですが、今の我が国における工業生産力では、予定されている期間内で増強計画を完了させるには無理がありませんか？ なにより、必要な兵士の確保はどうします？ 流石に人員については、

そう簡単に揃えられるものでは無いでしょう？」

彼の指摘は、今の国内の状況を考えれば当然である。

「確かに、その点については君の言う通りだ。だから、多少の修正が必要な事も私は承知している。だが、早急に軍事大国エルジアに相応しい軍事力を整備しなければならぬのも事実だ。そして、このような事を想定して色々と策を講じてきた。停止していた軍需工場の製造ライン再開の準備をしたり、それによって需要が増加するエネルギーを確保したり、な……」

「もしかして、フェイスパーク地方にあるメガ・ソーラー発電システムを我が国が独占する目処がついたのですか？」

「ああ、その通りだ。本来は国際共同プロジェクトとして計画されたものだが、十分な時間を掛けて出資企業や株式に細工をし、生産された電力を新たに稼動を始める軍需工場に回せるようにしておいた。それについては幸い、前政権の政策を隠れ蓑に出来たおかげで思った以上に順調だったよ」

そう言うって私は微かに笑みを浮かべる。

「他にも、工業生産力に起因する問題については増強する分野に優先順位を付ける事で効率化が可能、との報告も受けている。そこでこの問題に関しては経済政策や生産システムとの兼ね合いも考慮した上で組織の再編を検討し、それに合わせた形で実施していこうと考えている」

ここで私は言葉を切ると、すっかり冷めてしまったコーヒーの入ったカップを手に取り、残っていた中身を一気に飲み干した。そして、喉の渴きを癒すと再び話を続ける。

「後、兵士の確保については前政権下の軍縮で削減された人員を呼び戻す事で対処する。そして、それでも不足する分は失業対策の一环という形で新たに募集する。この2つで、かなりの人員を確保できる筈だ」

「ですが、それでは頭数を揃える事は出来ても、質の低下は避けられないのでは？」

またしても、当然の疑問が囁かれる。

「まだ正式には決まっていらないんだが、他国から軍事顧問を招こうという計画がある。勿論、単なる教官としてでは無く、実戦部隊も兼ねる形で。つまり、一種の外人部隊を創設する訳だな」

私が発した予想外の言葉に、ここにいる誰もが驚いた表情をした。しかし、私は彼らの反応を無視するかのように淡々と話を続ける。

「どうやら、資金や戦略資源に困っている連中は意外と多いらしくあるルートを通じて接触を図ってきたんだ。そして、連中が言うには、『自分達が望む物を提供してくれるなら、充分な見返りを渡す用意がある』と。特に軍事関連であれば、決して期待を裏切るような事は無いそう。早い話が、こちらの提供する物次第では、兵器でも兵士でも軍事技術でも何でも入手できる訳だ。そして、幸いな事に、我が国には彼らの欲する物が充分にある」

「それで、彼らが欲する物とは？」

「大方、予想はついていると思うが、我が国が現在、大陸内の国家群に“復興支援”という形で供給しているような諸々の援助だよ。それと、軍事技術や兵器だ」

私が軽く自嘲気味に答えると、メンバーの何人かは妙に納得したような表情で頷いていた。なにせ、復興支援として各国に供給している物資の大半は国家経済の維持や発展にも転用可能な代物ばかりである。そして、ここユーリア大陸以外でも小惑星『ユリシーズ』による被害が出ている事を踏まえれば、それらの物資を欲しがる勢力は決して少なくない筈だ。

それに、周辺国との対立が原因で自由な経済活動や軍備拡張が出来ない国は世界中に幾つもあり、そういった連中にとっても喉から手が出るほど欲しい代物であった。

「もつとも、今の段階では『そういう計画もあり、現実には実行可能かどうかを検討中』という程度だがね」

私は最後に一言だけ付け加えると、この話題を終えた。そして先程、発言許可を求めてきたもう1人の方に視線を向け、意見を述べ

るよう促す。

「いま仰った計画通りに軍備増強や再編を進めた場合、各国の警戒心を必要以上に高める結果になるのでは？ 確かに、FCUとの対立を煽る意味では多少の緊張感も必要でしょうが、あまり相手を警戒させ過ぎると、かえって今後の活動に支障をきたす可能性も出てきます。なにより、今回の政権奪取も軍事大国エルジアの復活も全ては、最終目標を達成する為の通過点に過ぎないのでから。なので、場合によっては活動を控えた方が賢明だと思われます」

そう言うとは彼は、真っ直ぐに私の目を見つめてきた。確かに、彼の意見にも一理ある。最終目標を達成する為の手段が障害となっては本末転倒である。しかし、最終目標の達成には他国を圧倒する軍事力が必要不可欠なのも事実だった。

「君の懸念は私も充分に承知しているつもりだ。だが、軍事力の増強が必要不可欠である以上、ここはリスクを負ってでも計画を進めるべきだと考えている。違うかね？」

「ええ、確かにリスクを負う覚悟が必要なのは私も認めます。ですが、それでも出来る限りリスクは減らす方が……」

私は右手を上げると、彼の言葉を途中で遮る。その行動に数人のメンバーが怪訝そうな表情でこちらを見つめてくるが、それらの視線を無視するように傍らに積み上げたフォルダーの山へと手を伸ばし、その中から目的の資料が入っているフォルダーを手早く探り当て、その中身を全員に配った。そして、受け取った資料に目を通していく内に彼らの表情が驚愕に満ちたものになるのを見て、私は軽い優越感を感じながら短く言葉を発する。

「それが我々の切り札だ。現在のパワーバランスを崩すには、十分な代物だろう？」

この一連の計画を遂行する為に私が用意していた切り札が持つ途方も無い衝撃に皆が言葉を失う中、メンバーの1人が緊張に震える声で辛うじて質問を投げ掛けてきた。

「ええ、確かに。ですが、ここに書かれている事は本当に実行可能

なんですか？」

「研究開発チームの連中が言うには、既に理論は完成してるそうだが、幾つかの実験で予想通りの結果が得られれば、それで完了するらしい。どうやら、こんな突拍子も無い事を考えていた連中が他にも大勢いたらしく、思った以上に多くのデータが揃っていたそう。おかげで、この短期間で理論を完成させる事が出来たそうだから、ここは素直に感謝すべきなんだろうな」

それは私が研究開発チームと初めて会った時、彼らの口から直接聞かされた話と同じだったのだが、ここにいるメンバーを納得させる為に敢えて言う事にした。ただし、こういった報告では、マイナス要因となるような事は尋ねられない限りは明かさないので、最初の研究開発チームから聞かされた時に全てを鵜呑みにする訳にもいかなかった。

だが、それでも追加研究をする価値は充分にあると当時の私は判断し、定期的に報告を超越す事を条件に研究を進めるよう指示していた。そして、その時の判断が正しかった事が後に証明され、今では実用化の目処が立つところにまで漕ぎ着けられたのだ。

「ストーンヘンジの対空砲への転用、か……。確かに、これは切り札ですね」

「しかも、大陸全土をほぼ射程に収める事のできる代物だ。これがあれば、大陸の空を支配したも同然だな」

やはり、“実用化の目処がついている”という肩書きが持つ効果は大きいらしい。先程までは、どこか猜疑的だった皆の表情が明らかに期待に満ちたものへと変わっていた。

「ですが、どうやってストーンヘンジを我々の管理下に置くのですか？」

メンバーの1人が口にした疑問に、それまでの明るかった空気がたちまちにして重くなる。なぜなら、ストーンヘンジはエルジア国内に設置されていないからだ。しかも、開発当初から囁かれていた問題の1つである軍事利用を阻止する目的で、その運用と管理は中

立的な立場を取る国際機関に委ねられている。さらに付け加えるならば、ストーンヘンジが設置されているのは政治的・軍事的にも国際情勢からは完全な中立を表明し、他国とは常に一定の距離を保っているサンサルバシオン王国である。

早い話が、サンサルバシオン王国は他国に干渉する事も干渉される事も憲法で禁じている。それ故、この国は軍事同盟としての側面を併せ持つFCUやUTOには加盟していない。ただし、ストーンヘンジの防衛については、例外的に“国連の委託を受けたUTO軍との共同警備体制”という名目で違憲になるのを辛うじて回避していた。

もつとも、ストーンヘンジの設置場所に選ばれた最大の理由は、ユーゴスラビア大陸中央に位置する国で大陸全土をカバーするのに都合が良かったからで、中立国に設置した事はオマケに過ぎなかった。

「どう考えても、あれの運用を特定の国家や組織、ましてや我々のような者達に委ねる酔狂な輩はいないだろう。なら、力づくで奪うまでだ」

私の強気な発言に、今度は場の空気が凍りついたように冷たくなる。だが、そんな雰囲気になるのも仕方の無い事だった。なにせ、私の発言は軍事力をもってサンサルバシオン王国に侵攻する事を意味していたからだ。そして、永世中立を掲げる国に対して軍事侵攻を行う事は、明らかに国際法に対する重大な違反行為となる。当然、そんな事をすれば世界の大半を敵に回すのは必至だった。

「流石に、それは……」

「そんな事をすれば、世界から孤立する危険性があります。それどころか、下手をすれば他の大陸の国々からの軍事介入までも招くかもしれません。そうなれば、いくら我が国が軍事大国を標榜していても、大陸外の勢力も含めた多国籍連合軍を相手にしては勝ち目の無い無謀な戦いどころか、完全な自殺行為になってしまいます」

当然のように、ここに集まっているメンバーからも次々に反対意見が発せられる。しかし、それでも私の決意が揺らぐ事は微塵も無

く、大きく息を吸い込んで深呼吸をすると、皆に向かって現実の厳しさを話し始めた。

「では逆に聞くが、それ以外の方法でストーンヘンジを我々の管理下に置く妙案があるなら、ぜひとも聞かせてくれ。私の提案より良い方法であれば、喜んで採用しようじゃないか」

そう言っただけで端から順に皆の顔を見ていくが、誰も口を開こうとしないばかりか、目すら合わそうとしない者もいた。つまり、ここにいる全員が正攻法でストーンヘンジを手に入れる事など不可能だと最初から認めているようなものだった。

「どうやら、我々に残された選択肢が極めて限られている……。いや、1つだけだという事は理解できたようだな」

最後に、どこか皮肉めいた口調で私が現実の厳しさを改めて指摘してやると、それ以上は反対意見どころか誰一人として言葉を発しようとはしなかった。そして、私は彼らの沈黙は了承を意味するものだと思えると、今度は堂々と我々に残された唯一の方法を皆に向かって宣言する。

「我々は軍事力をもってサンサルバシオン王国へと侵攻し、速やかにストーンヘンジを占拠する。そして、ストーンヘンジを究極の対空砲へと改造し、その圧倒的な力で大陸全土を統一するのだ」

おそらく、この時の私の瞳には不気味で狂気に満ちた光が宿っていた事だろう。しかし、その事に気付いた者は、ここには誰一人としていなかった。

2001年12月19日

リーベルマン首相の暗殺という衝撃的な事件から1年以上が経過し、数々の情勢の変化と共に人々の間で暗殺事件が話題に上る事も少なくなり始めた頃、事態は新たな段階へ進もうとしていた。この1年の間には議会の選挙も行われ、既に上院で与党となっていた保

守派政党が下院でも過半数を超える議席を獲得して与党となっていた。これにより政権はルシコフ首相に同調する保守派一色となり、彼の掲げる政策を一気に推し進める事を可能にした。

そして、政権の地盤を着実に固めていったルシコフ首相率いる対外強硬派政権は、自国経済の保護と国内の治安維持を名目にした新政策を次々と打ち出し、次第に他国への圧力を強めていった。さらに、軍の大幅な組織改変と軍備拡張にも積極的に取り組み、新生エルジア共和国として軍事大国復活への道を突き進んでいく。

「これが、現在までの計画の進捗状況です」

そう言って首席補佐官が辞書のような分厚い束になった報告書をルシコフ首相に手渡す。首相は無言で頷いて報告書を受け取ると、1枚目から順に目を通していく。そして、十分な時間を掛けて報告書を順繰りに読んでゆき、必要に応じてメモを取ったり質問したりして、その内容の把握に努めていた。そうやって報告書に最後まで目を通し終わった頃には、優に1時間以上の時間が経過していた。

「ふむ。どうやら一部を除き、概ね予定通りに進んでいるようだな」
そう言って首相は執務机の隅に置いてあるコーヒーの入ったカップに手を伸ばし、まだ中身が残っている事を確かめてから一気に飲み干した。そして、椅子から立ち上がり、再びカップを熱いコーヒーで満たしてから椅子へと戻り、もう1人の人物に向かって話を切り出す。

「報告書を見た限りでは、懸案事項の1つだった軍の再編は思ったよりも順調に進んでいるようじゃないか。しかし、実際のところ、彼らが実戦で使えるようになるには時間が必要なんだろう？」

「ええ。やはり、最低でも後2年は必要です」

首相からの質問に、国防大臣と統合参謀総長を兼任するアレクサンドル・ボンダレンコ陸軍大將が即答した。

「それは、どんなに急いでも2年なのかね？ それとも、君が考える万全の態勢が整うまで2年なのかね？」

「万全を期すなら、という意味です」

ここら辺は、生粋の軍人であるボンダレンコ大将らしい考え方だった。あらゆる事態を想定して準備をしておくのが軍隊という組織であり、そういった考え方をした結果、これだけの時間が必要だと判断したのだ。

「その準備期間を短縮する方法は無いのか？」

案の定、その回答を聞いた途端に首相は、誰もが最初に口にするであろう型通りの質問をする。

「その場合、予備兵力の確保が難しくなるでしょう。さらに、兵士の練度にも若干の問題が残る可能性も否定できません。故に、今後の長期的な展開を考慮するのであれば、出来る限りリスクは減らした方が賢明です」

あまりに予想通りな質問だった事もあり、国防大臣兼参謀総長は事前に用意していた回答を口にする。勿論、これも様々な情報を綿密に分析した末に得られたものであり、その事は首相も充分に承知していたので、この時は無理に自分の意見を押し通すような発言は控えた。

「分かった。なら、こちらも可能な限りの支援をするので、1日でも早く目標を達成できるよう努力したまえ。以上だ」

首相が簡潔に結論を述べると国防大臣兼参謀総長は頷き、とりあえず、この問題についての議論は終了となった。しかし、そうやって結論に達しても首相は彼の顔から視線を外さず、もう1つの問題について尋ねる。

「それで、次は例の計画、衛星軌道上に無数に浮かんでいる小惑星の破片を攻撃兵器に利用するという代物についてなんだが……。先程の報告書を見る限りでは、随分と難航してるようじゃないか？」

すると、この質問も予期していたらしく、国防大臣兼参謀総長は淀みなく答え始めた。

「なぜなら、まずは拠点となる施設そのものを建設する必要があるからです。この施設は兵器の特性上、どうしても大規模なものとなり、建設には十分な期間が必要です。それ以外に、落下軌道の計算

に必要な不可欠なソフトウェアの開発が遅れている事も遅延要因の1つとなっています」

「では、それらの問題について何か具体的な解決策はあるのかね？」

「残念ながら、ありません」

そう言つて国防大臣兼参謀総長は首を横に振る。そして、その姿を見た首相は僅かに肩を落とすと、大きく溜息をついて静かに呟いた。

「どうやら、計画そのものの再検討を考えた方が賢明なのかもしれないな……」

そうして首相が一応の結論を出した事で、この問題についての議論は終了となった。なぜなら、優先すべき課題が山積みとなつている現在の状況では、実現の目処が立たない計画に予算と労力を必要以上に割く事はできなかったからだ。

「それから、念の為に聞いておくが、年明け早々に行われる大規模軍事演習の方は予定通りに行われるんだな？」

「はい。そちらの方は当初の予定通り、サンサルバシオンとの国境に程近い演習場で実施します」

その回答に、ほんの少しだが首相の表情が明るくなる。当然、この演習には参加部隊に実戦に近い形での経験を積ませる軍事的な目標以外に、政治的な圧力を他国へ掛ける狙いもあった。そうでなければ、わざわざ演習の実施場所を国境近くの演習場になど設定しないだろう。

「これは、我々が苦難の果てに築き上げた新生エルジア共和国としては初となる大規模な軍事演習だ。そして、我々の決意と力を世界に示す絶好の機会でもある。だから、期待しているぞ」

「はつ。今回の軍事演習がもつ重要性については十分に理解していますので、安心して任せて下さい」

ボンダレンコ大將は姿勢を正すと、大きく胸を張ってルシコフ首相からの激励に答えた。

Mission 3C (後書き)

今回は戦闘シーンを少しだけ入れてみましたが、どうだったでしょうか？ もっとも、建物内でのCQBで航空機は登場しないので、エースコンバットらしくないかもしれませんが……。

それと、いつも以上に長くなってしまったので読むのが大変かもしれませんが、その辺はご容赦ください。

Mission 4A

開戦へのカウントダウン

'Final decision'

2003年8月29日

いつものように基地の正面ゲートで車を一時停止させると、私は窓を開けて警備を担当している顔馴染みの軍曹に身分証を手渡した。

「おはよう、軍曹」

「おはようございます、トラヴィス少佐。この後、直ちにメイン・ブリーフィングルームに集合するよう指示が出ています」

彼は慣れた手つきで身分確認を終えると、上層部より出頭命令が出されている事を告げてきた。そこで私は、乗って来た車を指定の駐車スペースに止めるとロッカールームへと足早に向かい、素早く着替えを済ませてから指示されたブリーフィングルームに移動した。そして、部屋へ入ると適当な場所を探して椅子に座る。

「なあ、またエルジア軍の連中が国境近くで演習をやるらしいぜ」

「まったく……。相変わらず、懲りない連中だな。それとも、よっぽど暇なのか？」

「さあな。だが、1つだけ言えるのは、その度に警戒態勢を取られる俺達の身にもなれってんだ」

「ははっ。確かに、その通りだな。いい加減、こうやって駆り出されるのにも、うんざりしてんだ」

同じ指令を受けて集合した他のパイロット達が交わす会話を聞きつつ、私は椅子の上で大きく伸びをする。その時、背後から聞き覚えのある声がした。

「隊長。随分と、お疲れのようですね」

その声に私が振り向くと、そこには同じようにフライトスーツに身を包んだ1人の男が立っていた。彼はウィリアム・メイソン中尉。私が飛行隊長を務めるハイランド共和国空軍第3航空団第201戦闘飛行隊に所属する戦闘機パイロットだ。

「別に、そうでもないさ。ただ、少し背筋を伸ばしたかっただけなんだ」

普段と変わらない口調で答えつつ私が微笑むと、彼は軽く肩をすくめるような仕草をしてから隣の席に腰を下した。

「ところで、話は変わりますが、また今回も待機だけで終わりなんですか？」

椅子に座るなり、彼が真面目な表情で聞いてくる。

「さあ、それは向こうさん次第だろ。それに、そういった判断を下すのは上層部の仕事で、俺達は与えられた任務をこなすだけさ。そして、それが軍隊という組織だよ」

「ええ、それは分かっているんですが……」

私の模範的な回答に、どこか納得のいかない表情をしつつも彼が呟く。その時、また別の声が背後から聞こえてきた。

「その坊やは、早く結果を出したくて仕方が無いのさ。そうすれば、大好きな隊長さんに褒めて貰えるからな」

「ち、違います！ ただ、俺は少しでも早く隊長のような立派な戦闘機パイロットになりたいくて……」

「おいおい、マイケル。こいつだって、もう立派な戦闘機パイロットなんだ。からかうのも、その辺にしておけよ」

そう言っただけで私が嗜めるようにマイケルと呼んだ男に視線を向けるが、彼は全く気にする様子もなく、ウィリアムの隣の席に腰を下した。そして、相変わらずウィリアムの事を子供扱いして彼の頭をポンポンと叩いている。この、どこか軽い調子の男はマイケル・カーター大尉と言ひ、彼も私の部下にあたる戦闘機パイロットだ。

「流石に、もう子供扱いするような年齢じゃないだろ。お前さんの方こそ、少しはウィリアムを見習って成長したらどうなんだ？」

そう言いながら、また別の男がマイケルの隣の席に腰を下す。彼はトニー・ミツチエル中尉で、私の横に並んで座っている二人と同じで、私が指揮を執る飛行隊の一員である。本来ならば、36人のパイロットと予備機を除いた12機の戦闘機で1個飛行隊を編成するのだが、小惑星『ユリシーズ』の落下に伴う影響で今は定数を大きく下回る4人と4機で飛行隊を編成していた。

もともと、このような特殊な編成になっているのには別の理由もあった。それは私の所属する飛行隊が、この国では初となるステルス戦闘機F-35Aを運用する飛行隊、その最初の飛行隊に指定されたからだ。ただし、このステルス戦闘機導入計画は様々な事情により無期限の延期となっている。

「よし。全員、揃っているな？」

それから暫くして、脇に数冊の分厚いファイルを抱えた3人が室内を軽く見回すようにして入って来た。その途端、それまでのざわついた雰囲気が消え去り、緊張感に満ちた状態へと変化する。その反応も当然で、彼らは航空団司令と作戦担当参謀、航空団司令付軍曹だったからだ。

「では、これよりブリーフィングを始める」

演壇の前に立った作戦担当参謀がブリーフィングの開始を宣言すると、軍曹が今日のブリーフィングに必要な資料を手早く全員に配る。それと同時に窓のブラインドが閉められ、ブリーフィングルーム正面に大きなスクリーンが現れた。そして、スクリーンに衛星から写した基地周辺の地図が表示され、最後に部屋の蛍光灯が消される。

「気象班からの報告では、本日は快晴。最低気温は摂氏22度、最高気温は摂氏36度で、湿度は13%。北北東の風、風速は0.3m/sとなっている」

まず最初に行われる事は、この基地に所属する飛行隊が担当する空域の気象状況の説明である。これは何処の航空基地でも同じで、1日の始まりは気象状況に関する報告からだ。そして、こうして気

象班からの報告を聞く限り、今日も例年と変わらない暑く乾燥した1日になりそうだった。

「次に、これが諸君らに与えられた本日の飛行任務計画だ」

そう言うて作戦担当参謀が手元の機械を操作すると、スクリーンに表示されていた画像も切り替わる。そこには、各飛行隊ごとに割り振られた本日の飛行経路が色分けされた状態で表示されている。

私は、その中から自分の飛行隊の飛行経路を探すと、さきほど配られた資料と比較して重要な項目に印を付けたり、重要だと感じた事柄をメモしたりしていく。

この後、口頭による任務の説明や質問などを全員が納得するまで行い、最終的に1時間近くが経過した頃、ようやくブリーフィングは終了した。そして、それぞれにブリーフィングルームを後にすると、フライトに向けた準備に取り掛かるのだった。

この日もエルジア共和国首都ファーバンティに住む多くの人々にとっては、いつもと変わらない平凡な日常であった。しかし、そんな穏やかな雰囲気とは裏腹に、緊張した面持ちで今日という日を迎えた者達もいた。

「いよいよ、計画を実行に移す時が来たな。ようやく、我々の待ち望んできた日がきたのだ。これで、今日までの苦勞も報われる、というものだ。そうだろう？」

そう言うところシコフ首相は僅かに口の端を歪め、どこか不気味で狂気に囚われているかのような笑みを浮かべる。しかし、彼と想いを同じくする者達にとっては、そうは見えなかったらしい。なぜなら、この場に居る誰もが首相の表情や態度に疑問を抱いているような素振りは見せず、普段と同じように接していたからだ。それどころか、先程の首相の言葉に満足そうに頷く者さえも数多くいた。

「それで、サンサルバシオン王国への通達はいつ頃になるんだ？」

首相が外務大臣の方へ顔を向けて尋ねる。ちなみに、外務大臣を

務めるフレデリック・アッブダイクは、前政権時代から外務大臣として政権に関わっている数少ない閣僚の1人だった。

「首相は“宣戦布告と同時に国境を越える”と仰っていました、民間人の巻き添えを避ける為の時間を設けた事をアピールする必要があったので、作戦開始時刻の3時間前となるユーリア西部時間で明日の午前5時頃に設定しました。あの国であれば、それだけの時間でも多くの民間人を避難させられるでしょう。ですが、国際世論を考慮するのであれば、今すぐにでも通達を行うべきです」

「最初に言わせて貰うと、君の考えは十分に理解しているつもりだし、その配慮にも感謝はしている。だが、私としては部隊が国境を越える直前に宣戦布告を行いたいのだ。だから、なんとかして通達を遅らせる事は出来ないのかね？」

相手に開戦に備える時間を少しでも与えたく無いルシコフ首相としては、ぎりぎりまで宣戦布告の通達を侵攻部隊の国境突破時刻に近づけておきたかったらしく、そのような言葉を口にしたのだ。しかし、こうして首相が宣戦布告を遅らせるよう求めても外務大臣は首を横に振り、断固として反対の姿勢を崩そうとはしなかった。

「あまり遅らせすぎれば、何らかの手違いが生じた際に宣戦布告が攻撃開始後になる恐れが出てきます。今回の場合、永世中立を掲げる国家に対する戦争行為になるので、どのような方法であっても外交面においては我々が圧倒的に不利です。なので、ここは手順を守る事を優先すべきです」

「君はそう言うが、それなら逆に少しぐらいルールを破ったところで、大きな影響は出ないんじゃないのかね？」

あくまでも首相としては、完全な奇襲攻撃によるサンサルバシオン侵攻こそが重要なんだと言いたいらしい。そして、その考えを容易に変えるつもりが無い事も、長年の経験からアッブダイク外務大臣には分かっていた。

「分かりました。可能な限り、時間は調整してみます」

そう言う外務大臣は手元の紙にペンを走らせてメモを取ると、

それを外務省との連絡係も兼ねる彼自身の次席補佐官に手渡して担当部署に伝えるよう命じた。もっとも、実際には彼の言葉に『首相の意見を必ず反映させる』という意味は含まれていないので、どうなるかは誰にも分からなかった。

むしろ、ここまでの彼の態度を考えれば、ただ単に議論を終わらせる為だけに言ったのかも知れない。だが、そんな事は全員が承知しており、たとえ何かを言ったところで時間の無駄になるだけなので、宣戦布告を通達する時刻については外務大臣に一任して議論は終了とした。

「それで、肝心の各部隊の展開状況はどうなっている？ 予定通りの時刻に国境を越える手筈は整っているんだろうな？」

外務大臣から指示を受けた彼の次席補佐官が会議室から出て行くのに合わせ、首相がボンダレンコ国防大臣兼参謀総長に尋ねる。

「この会議が始まる20分前に受けた最新の報告によりますと、サンサルバシオン侵攻に参加する部隊の約80%が既に所定の地域への展開を完了しています。残りの部隊も、あと数時間の内には展開を終えるそうなので、問題なく作戦を開始できます」

「そうか。それなら、何も心配はいらないな」

国防大臣兼参謀総長の回答に首相は満足気に頷き、今度はSIB（戦略情報局）長官の方へ視線を向けて対外諜報機関が入手した周辺各国の最新情報について尋ねる。

「今回の我が国の行動について、周辺諸国が何か反応を示している様子はあるか？ それと、FCUの最新の動向も今の内に聞いておきたい」

そうやって尋ねられたSIB長官は少しだけ間を置き、ルシコフ首相を始めとする会議室にいる全員が自分に注目している事を確かめてから口を開いた。

「これまでに得た情報を分析した結果、サンサルバシオン王国やアンバー共和国を含め、国境を直に接する国々に目立った動きは確認されていません。これまでと同様に、“今回も恒例の大規模軍事演

習に過ぎない”というのが彼らの見解のようです。また、FCUにしても“このタイミングで我々が軍事行動を起こす”というのは想定外でしょう。それと、これは現段階では確証を得られていないのですが、FCUは我々が何らかの行動を起こすとすれば、早くても秋になってからだと予想しているようです」

そう言っただけで彼は分析結果を纏めた報告書を机の上に置き、ルシコフ首相を見据えた。すると首相は、その報告書を手に取って内容を自分の目で確認し、おもむろに口を開いた。

「ふむ。実に満足のいく内容だが、どの程度、この情報は信頼できる？」

「情報源と分析結果については、私が保証します。各組織のかなり深いところまで協力者を浸透させていますので」

このSIB長官は諜報活動に精通している事でも知られており、彼が長官に就任してからは諜報活動の成果が飛躍的に向上している。それ故、この短いやり取りだけでも他の者達を納得させるに十分な説得力があった。なので、これ以上は誰からも情報の信憑性に関する質問は発せられなかった。

「では、国民の間に憂慮すべき変化はあったか？」

「いえ。今のところ、いつもと変わらない様子で落ち着いています。ただ、一部の専門家やジャーナリストを中心に今回の行動に疑問を抱いている者達も僅かながらいるようですが、現状のままでも充分に対応可能な範囲です」

首相の次の質問には首相付の首席補佐官が回答した。その回答を聞いた首相は、ほんの少しの間、考え込むような表情をしてから追加の指示を出す。

「こちらが公式発表をするまでは、余計な詮索や憶測などに振り回されたくはない。記者会見での質問順を餌に報道管制を敷くのはどうだ？　ただし、それで無理なら拘束しても構わん」

「分かりました。その方向で検討させていただきます」

そう答えると、首相付の首席補佐官は首相からの指示を書いたメ

モを連絡役の人間に手渡し、担当部署へ早急に伝えるよう指示を出した。そして、この後も早急に確認しなければならない議題が尽きる事は無く、この会議が終わったのは深夜になってからだった。

この日、私はエルジア空軍の戦闘機が数多く集結している空軍基地に来ていた。ここには今、私が所属する飛行隊を始め、他にも3個飛行隊分の戦闘機が所狭しと並んで翼を休めている。

「それにしても今回はまた、随分と多くの飛行隊が1つの基地に集結しましたね。実際、ここまで多くの機体が集まっているのを見るのは初めてですよ」

目の前に整然と並ぶ多数の機体を眺めながら、私は横に立つ人物に話し掛ける。すると彼は、こちらを向いて軽く笑みを浮かべながら答えた。

「言われてみれば、この数は確かに妙だな。なにせ、私が聞いたところによると、ここ数年で最大規模の動員になると言え戦闘機ばかりだからな。もっとも、これだけ集まってるんだから中には君よりも腕の良いパイロットがいるかもしれんぞ？」

「だったら、ぜひ“エース”の称号は、その名も無き誰かさんに譲りたいですね」

私の言葉に彼は肩をすくめ、首を左右に振りながら大きく溜息をつく。そして、半ば呆れたような表情で言葉を返してくる。

「君が言うのと、単なる嫌味にしか聞こえんな。無敗のエース、クリンスマン少佐」

「別に私自身が、そう名乗っている訳では無いんですが……。どちらかと言えば、そう呼ばれる事に迷惑してるぐらいです。それに、無敗と言っても“エルジア空軍における公式記録上”の話でしょう？」

無駄を承知で愚痴を零してみるものの、私の気持ちとは裏腹に彼の表情や態度が変わる事は無かった。それどころか、そこには必死で笑いを堪えている彼の顔があっただぐらいだ。そして、そんな彼の

態度に私は、もう一度だけ大きく溜息をつくしか無かった。

「くくつ、成程。“公式記録上”は、か。だが、実に君らしい答えだな。ま、冗談はさておき、君に期待しているのは確かだよ。他ならぬ、この私も含めてね」

そう言って彼は笑みを浮かべ、肩をポンポンと叩いてくる。

「実を言くと、君を副隊長にする事が、この飛行隊の隊長を引き受ける条件だったんだ。そんな私が何の期待もしてないと、ずっと本気で思ってたのか？」

「では、あの噂は本当だったんですか？」

私は思わず、彼に聞き返していた。実は、エルジア軍の大規模再編の一環で私も配置転換の命令を受けたのだが、その時に『あらゆるコネを使い、私の第156戦術戦闘航空団行きを強硬に主張した人物がいた』との噂が流れた。

先程は嬉しくないような言い方をしたが、私が空軍内でもトップクラスの腕前を持つパイロットとして周囲から高く評価されていたのも事実なので、私の動向が常に話題の中心にある事ぐらいは知っていた。そして、どの飛行隊も私を編入したがっていた事も。そんな中、コネを使ってまで私を引き入れた人物として常に噂されていたのが、いま目の前にいるアレクセイ・ケレンスキー中佐である。

「噂……？ ああ、あれの事か」

彼は暫くの間、何かを思い出そうとするかのような仕草をした後、その内容に行き当たったらしく、どこか自嘲気味に真実を語り始めた。

「かなり尾ひれが付いているが、“全く根も葉もない噂”という訳でもないんだ。実は、新たに編成される事となった精鋭飛行隊の隊長を務めるよう上層部から要請を受けた際、部下の人選については私に一任させて欲しいと要求したんだ。でなきゃ、“隊長は引き受けない”と暗示させるような態度でね。勿論、命令拒否なんて出来ない事は最初から分かっていたから、私なりの冗談のつもりだったんだが……」

「それで、私を？」

私が話の内容から推測した結論を口にするが、彼はゆっくりと首を左右に振り、それを否定する。

「いや、そうじゃないんだ。その時、『もし、１人だけ希望通りのパイロットを編入できるとしたら、誰を選ぶ？』と冗談めいた口調で笑いながら聞かれたんだ。そんな調子で聞かれたものだから向こうも私の冗談を分かってくれたんだと思い、こっちも勢いで『叶うなら、ぜひ、クリンスマン少佐を』と言ったのさ」

「そしたら、実際に願いが叶ってしまった、と？」

「まあ大体、そんなところだ」

私が改めて推測した結論を口にとすると、今度は彼も頷いて私の推測を肯定した。結果から言えば、今の第１５６戦術戦闘航空団に配属された事に不満は無く、むしろ、エルジア空軍を代表する精鋭部隊の一員になれた事を誇りにさえ思っている。なにより、ただの遊覧飛行機のパイロットだった私を戦闘機パイロットへと導いてくれた恩師のケレンスキー中佐に、その実力を評価して貰えた事が素直に嬉しかった。

「そういう事なら、ここは中佐に感謝しないといけませんね。たとえ冗談でも中佐が私の名前を出してくれなければ、こうして同じ飛行隊で翼を並べて飛ぶ事は叶わなかったんですから」

「ま、折角だから、そういう事にしておこうか。もしかすると、この飛行隊への君の編入は、最初から決まっていたのかもしれないしな」

「ええ、そうかもしれないですね」

そう言って彼は笑い、それに釣られるようにして私も笑うのだった。

「おっと……。もう、こんな時間か」

その時、何気なく腕時計を見た彼が眩き、私も同じように自分の腕時計を覗き込んで時間を確認する。すると、ブリーフィングの時間が間近に迫っていた。

「どうやら、少し急がないと危ないかもしれませんよ。それに、隊長と副隊長が揃って遅刻なんてしたら、他の飛行隊の連中から何を言われるか分かりませんか」

「ああ、それについては私も君に賛成だ。なにせ、“重役出勤のイエロー・スコードロン”なんて不名誉な渾名を付けられた隊を率いるのは、流石に願い下げだから」

お互いに軽口を叩きつつ、私達は駆け足でブリーフィングルームに向かった。もっとも、この時は互いに、これから始まる驚愕の出来事など知る由も無く、ただ純粹に同じ飛行隊で飛べる事を喜んでいた。

ここ最近、FCU本部ビルにある会議室では、連日のように主要メンバーが集まっては長時間に渡って会議を開いていた。そして、昨日までと同様に今日も朝から会議が開かれている。

「私が聞いたところによると、ここ数日、エルジアの動きが以前にもまして活発になっているらしいが、奴らは何かを企んでいるのか？」

FCU評議会議長を務めるロバート・シンクレアが全員の顔を順繰りに見回しながら尋ねる。すると、メンバーの1人が手を挙げて発言許可を求め、それを見た議長が軽く頷いて発言を許可する。

「サットン研究所の分析班によりますと、“恒例の大規模軍事演習が近いから”との事です。他にも、複数の研究所が同様の報告をしています」

そう言っただけで彼は別のメンバーの方に顔を向けた。すると、その人物は頷き、彼の意見を肯定する。ルシコフ首相が政権の座についてからは、エルジア軍は国内の至る所で定期的に軍事演習を繰り返しており、こうして何らかの動きがあったとしても、それに違和感を憶える者は少なかった。

「ただ、今回の演習は規模が大きいようで、参加する部隊の数が過去最高に達しています。その中でも特に後方支援を担当する部隊の

増加が顕著です。そして、それに比例するかのように各部隊間や司令部との通信量も増加していますが、内容までは掴みきれいていません。私からは以上です」

報告を終えた彼は持参していた資料を目立つように机の上に置き、シンクレア議長の方へ視線を向けて読むかどうかを無言で尋ねる。しかし、議長の方は報告内容に対する関心が低いのか、特に気にする様子も無く、次の議題へ移ろうとした。

「少し、よろしいですか？」

その時、メンバーの1人が声を上げた。すると、この会議室にいる全員が一斉に声のした方を振り向き、彼の顔を一瞥した議長が頷いて発言を許可する。

「先程、報告にあった今回のエルジア軍の動きなんですが、サンサルバシオンとの国境に近い地域で目立っていますよね。もしかすると、彼らは何らかの軍事行動を起こす予定なのでは？ 確か、今のエルジアは軍事力の増強が顕著だと聞いていますが……」

彼は手短に自身が感じた疑問を述べると、サットン研究所の分析班が出した報告を伝えた人物の方を見る。しかし、彼の抱いた疑問は軽く否定される事となる。

「ええ、確かにエルジア軍の性急な増強は、こちらでも注目している事柄の1つです。ですが、かねてより自治権を巡って争いを続けているアンバー共和国との国境方面では、エルジア軍に目立った動きは確認されていません。仮に彼らは何らかの軍事行動を起こすとするば、間違いなく、この方面になるでしょう。おそらくは今回の演習の実施場所が偶然、サンサルバシオン方面だっただけですね。それに、同じ分析班からの報告によりますと、そういった事態が起きるのは早くても11月下旬になるそうです」

この最後の一言が決定打となり、エルジア軍の動きを警戒する雰囲気は完全に消え去ってしまった。もっとも、永世中立を掲げる国に対して軍事侵攻を企てているとは思っていないのだから、これでは最初から無警戒なのも同然である。それに、サンサルバシ

オン王国がFCU加盟国で無い事も彼らの関心の低さに拍車を掛けていた。

「なら、もう暫くは時間的にも余裕がある訳だ」

「そうなる、それまでに新しい防衛計画を作成せねばならんな。」

それに、エルジア軍に関する情報収集も強化する必要があるだろう。大体、奴らが行動を起こしてから慌てているようでは、こちらとしても示しがつかん」

「まったく、その通りです」

結局、ここにいる誰もが口々に希望的観測を述べては、事態を真剣に検討しようとはしなかった。エルジア軍によるサンサルバシオン侵攻まで既に24時間を切っているというのに、この緊張感の無さである。言い換えれば、今のFCUは貪欲に利益を追い求め、自分達の保身を図るだけの集団に成り下がっていたのだ。そして、その隙をエルジア共和国に狙われる事になるのだが、誰もが都合の悪い出来事からは目を背けて事態を放置した。

「どうやら、結論が出たようだな」

そう言ってシンクレア議長が集まった者達を見回すと、一様に頷いたり相槌を打ったりして彼の言葉に従う意志を言動で示した。そして、その様子を見て満足した議長は早速、次の議題に取り掛かるべく行動を開始する。

「なら次の議題は、未だ宙に浮いたままになっているFCU合同軍の指揮権と、合同軍司令部の設置に関する諸問題についてだ。エルジアの動きが活発になっているという報告もある以上、いつまでも先延ばしには出来んからな」

「ええ……、そうですね」

議長が隣に座っているメンバーに目配せすると、その視線に気付いた彼は一呼吸おき、それから小さく頷いて議長の発言を肯定する。勿論、この短い会話にも駆け引きが含まれていた。それは、今では単なる経済同盟としての枠を超え、強大な軍事力を有するエルジアに対抗する為に『FCU合同軍』と呼ばれる軍事組織を創設した事

で生じた問題に起因している。

その問題とは、合同軍の指揮権を巡って加盟国間での利害の不一致や政治的・民族的・宗教的問題などによって対立する事が頻繁にあり、結局は各国家が派遣した自国の部隊を指揮している状態が続いている事だ。当然、そのような状況下では柔軟な作戦展開や素早い作戦行動などは不可能であり、最も扱い難い部隊としての認識が彼らの間に定着していた。その上、この問題の解決策を未だに見出せずにいる。

「エルジアが着々と軍事力の増強を図っているのは事実だ。なら、この機会に合同軍司令部の設置に向けた準備委員会を組織するべきだと思うのだが、どうだろうか？」

まずは議長が提案を述べ、全員の反応を窺う。そして、少しの間、考えを纏める時間を取った後、多数決による採決を行った。

「では、この案に賛成の者は挙手を」

すると、手を挙げた者の人数は明らかに半分以下で、議案の可決に必要な2/3以上には遠く及ばなかった。つまり、議長の提案は1回目の採決では否決された事になる。しかし、最初の採決で否決された程度で終わる訳が無く、むしろ、ここからが本番だった。

「諸君。ここは、我々の方が先手を打って行動すべき時ではないのかね？ エルジアの連中が本格的に動き出すまでには時間があるとは言え、残された時間は決して無限では無いのだ。それに、奴らが行動を開始してからでは遅い事を諸君も充分に承知しているのだから？ なら、新たな防衛戦略の構築と共に、合同軍司令部の設立を検討する委員会ぐらいは用意しておくべきだろう。違うか？」

議長は右隣に座る者から順繰りに顔を見ていき、ここにいる全員を説き伏せる覚悟のようなものを持って議論を開始した。その表情には自分の提案こそが最善の策であるという自信が漲っており、反対派とも真っ向から戦うつもりなのが見て取れる。しかし、反対派の方も、この程度で自身の主張を変えるほど弱くは無かった。

「議長の仰りたい事は、よく分かりました。ですが、仮に合同軍司

令部が設置された場合、司令部機能の中立性は確実に保てるのかな？」

「私も、その点が気になります」

そう言つて真つ先に意見を述べたのは、反対派として知られている者達である。彼らは言葉こそ慎重に選んでいるが、ほとんど『反対』だと言っているようなものだった。そして、彼らが指摘した問題点は合同軍司令部設立の必要性が訴えられる度に囁かれ、最大の障害として双方の間に横たわっていた。

「心配しなくても中立性は保証する」

「なら、合同軍の初代司令官には誰を就任させるつもりですか？」

「それは……」

議長は一瞬、答えに窮する。なぜなら、合同軍司令官として彼が推薦する人物は、議長とも親しい彼の国の将軍だからである。そして、実際に合同軍司令部が設立された場合、その将軍が司令官に就任するのは明白だった。それはF C U合同軍が事実上、シンクレア議長の指揮下に入る事を意味している。そして、議長の出身国はF C U加盟国内でも政治・経済・軍事において大きな影響力を持っており、その権力を背景にした強引な政策と相まって加盟国内にも多数の敵を抱えていた。

「こちらとしましても、部隊の強引な運用で自国の将兵の命を危険に曝す訳にはいかないのですよ。なにせ、国内には合同軍への兵士の派遣に慎重な意見も多く、最近では反対派も増えてきましたからね。もし、そんな状況下で犠牲が増加すれば、どうなるかは説明するまでも無いでしょう？」

そう述べて反対派の1人が鋭い視線を議長へと向ける。そして、それに呼応するように他の反対派メンバーも議長へ鋭い視線を注ぐ。しかし、議長は直ぐに冷静さを取り戻すと、落ち着いた口調で反論を始めた。

「君達の言いたい事は分かった。だが、現状の合同軍とは名ばかりの存在で、このままでは到底、軍事力を増したエルジア軍に対抗で

きない事ぐらいは承知している筈だ。なにせ、指揮系統が確立されていないばかりに各国が独自に命令を下しているんだからな。こんな有様では現場に混乱をもたらすだけだし、連携した動きなど望みようが無い。そして、どの国も単独ではエルジアの軍事力に対抗できないのは明らかだ。違うか？」

「くっ……」

今度は反対派のメンバーが答えに窮する番だった。議長の指摘した事は、ここに居る全員が認めざるを得ない明白な事実だったからだ。しかし反対派の方も、それで簡単に納得するような者達では無かった。なおも食い下がり、なんとしても議案の可決を阻止しようとする。

「そこまで仰るのであれば当然、実際に合同軍司令部が設置された場合にも備えているのでしょうか？　なら、その組織の中立性を保つ具体的な方策を聞かせて貰いたい。はつきり言つて、それが明示されるまでは我々が首を縦に振る事はありませんから」

「エルジアとの戦端が開かれた時にのみ、合同軍司令部に全ての部隊の指揮権を与える。そして、平時は今まで通り、所属国の指揮権が優先される。但し、各国の連携を強化する為、定期的に合同指揮演習を実施するのが条件だ」

少し間を置いた後、議長は妥協案とも呼べる提案を行った。勿論、この提案も会議が始まる前から準備されていたもので、反対派の動きを予測して作られたものだ。そして、このように切り返して来る事を反対派も予測していた。

「では、どのような状況になった時に“エルジアとの戦端が開かれた”と判断するのですか？　そして、その判断は一体、誰が下すのですか？」

やはり、一筋縄ではいかないようで、反対派も同じように切り返す。

「判断は各国の情報機関が集めてきた情報を基に行う。そして、その判断を行う為の部署も司令部内に設置する。勿論、その部署には

君達の国の人間も専門家やオブザーバーとして参加してもらおう予定だ」

「確かに、なかなか魅力的な案ですが、その方法では結局、決定権を持つ司令部要員として我々の国の人間が介入する余地が無いのでは？」

「その点についても対策を考えてある。司令官は数年ごとの任期制とし、同じ国の人間が続けてなる事はできない。そして、次の司令官は加盟各国の代表による投票で決定される。流石に、戦争状態での司令官交代は緊急の場合にのみ認められる事になるが、決して悪くはない話だろう？」

そう言つて議長は反対派の面々を順繰りに見ていく。その内の数名は、視線を逸らしたり俯いたりして新たな意見を述べるのを躊躇うような素振りも見せたが、まだ納得していない者の方が圧倒的に多かった。しかし議長は、このタイミングで再度、多数決による採決を行う事を決断した。

「では、諸君に改めて問いたい。私の案に賛成の者は挙手を」

すると、最初に行つた時よりは僅かに増えたものの、依然として賛成の者は少なく、2回目の採決でも否決された。そして、この後も会議は数時間に渡つて続けられる事となり、幾度と無く駆け引きを繰り返した末に、ようやく議長の提案は様々な条件付で可決されるのだつた。

Mission 4 A (後書き)

ようやく、ここまで来る事ができました。なので、戦闘シーンを期待している方々には、もう少しだけ待ってもらえると助かります。こちらにも出来るだけ頑張りますので、よろしく願います。

Mission 4B

この日もサンサルバシオン国内に設置された隕石迎撃砲ストーンヘンジに隣接する航空基地では、いつもと変わらない退屈な日常が繰り返されていた。かつてはテロ攻撃を警戒し、その後も国境近くでエルジア軍の軍事演習が行われる度に高い警戒態勢を採っていたのだが、そんな状況にも慣れてしまい、今では必要以上に警戒する者は完全に少数派となっていた。

「どうやらエルジアの連中は、また演習をやるらしいぜ」

「ああ、そうらしいな。ま、俺達には関係ない話さ」

「気のせいかもしれんが、ここ最近は演習の回数が増えてないか？」

「そうだとすると、それが俺達に何の関係があるんだ？ どうせ、いつものように国境の向こう側で派手な“戦争ごっこ”をやって終わりだよ」

ストーンヘンジ防衛の任に就いている筈のUTO軍将兵でさえ最早、この有様である。ほとんどの者がエルジア軍による軍事侵攻など有り得ないと思い込んでいたのだ。

『好き勝手、言いやがって……。実際に何か起きれば、俺達の国が戦火に曝されるんだぞ。それなのに、あいつらときたら、すっかり腑抜けてやがる』

そんな中、緊張感の無いUTO軍兵士達にあからさまな軽蔑の視線を向け、そつと心の中で悪態をつく1人の兵士がいた。その兵士とは、サンサルバシオン空軍に所属する戦闘機パイロット、オットー・イエリネク中尉である。彼の飛行隊はUTO軍と連携し、名目上は最重要施設となっているストーンヘンジ防衛に当たるよう司令部から命令を受けていたのだが、実際には外国軍の国内駐留を快く思わない政府の思惑もあり、監視役も兼ねて駐留しているのが現状だった。

「おいおい、オットー。彼らだって一応は友軍なんだぞ。少しぐら

い愛想を振りまいても、バチは当たらんדר？」

すると、その様子を見ていた同じサンサルバシオン空軍所属の顔馴染みの整備兵が肩に手を置き、彼の態度を宥めようとする。しかし、彼はUTO軍兵士達に対する態度を改めようとはせず、そのまま早足で自分の搭乗する機体、JAS-39Cが駐機してある方へ無言で歩き出した。そして、その後を整備兵も同じように早足で追いかける。

「大体、お前さんは2日後には別の部隊と交代して家へ帰れるんだろ？ だったら、いいじゃねえか。それに比べて、こっちは来月一杯は居なきゃならないんだぞ」

その整備兵は歩きながら大きな溜息をつき、羨ましそうな表情でイエリネク中尉の横顔を覗き込む。だが、それでも彼の表情は硬いままだった。そして、その姿を見た整備兵は何を言っても無駄だと思っただのか、もう一度大きく溜息をつくと同じように無言で彼と並んで歩き続ける事にした。

「離陸準備を始めろ」

2人がフライトラインに駐機してある機体の傍まで来ると、その事に気付いたクルーチーフが離陸に向けた準備に入るよう部下達に命令する。すると、整備兵達が慌ただしく動き回り、パイロットが機体に入り込む為のタラップや、プリフライトチェックに欠かせない電源車などが準備される。そして、その間にイエリネク中尉は機体の周囲を歩き、アクセスパネルや動翼などを中心に機体各部の状態を自分の目と手で確認していく。それらが終わると、ようやく彼はタラップを上ってコクピットへと潜り込んだ。

「何も問題は無い。いつも通り、完璧だ」

「いえ、それが我々の仕事ですから」

イエリネク中尉がハーネスを締めながら報告と礼をクルーチーフに告げると、彼は謙遜して“仕事”だと答える。そして、最後にクルーチーフ自身がハーネスの状態を再確認し、何も問題が無い事を告げる代わりに中尉にヘルメットを手渡してタラップを降り、駆け

足で機体から離れた。こうして準備が整うと別の整備兵の手でタラップが機体から外され、中尉はチェックリストと照らし合わせながら各種計器類のチェックを電源車から供給される電力を使って行っていく。

「エンジン始動」

中尉がハンドシグナルで機体正面に立つクルーチーフにエンジン始動の作業に入る事を報せると、彼は無線で機体の周囲にいる他の整備兵達に注意を促す。そうして全員が安全な位置にいる事がクルーチーフ自身の目によって確認されると、中尉にエンジン始動の手順を始めるよう合図を送った。それを受け、彼はマニュアル通りに何一つ省略する事なくエンジン始動の操作を進めていく。

最初に電源を立ち上げて電力を確保し、次に計器に異常を示す警告が何も出ていない事を確かめてからエンジンを始動させ、それらが無事に完了すると外部電源や圧搾空気などを供給するホースを外すようクルーチーフにハンドシグナルを送る。そして、再び機体周囲の安全が確認された事を示す合図をクルーチーフから受け、今度は各動翼を実際に動かして機体の状態を確かめ、さらに通信システムの確立や機載コンピューターへのデータ入力などを行い、ようやくキャノピーを閉じた。

「チーフ、安全確認を頼む」

「了解」

無線のチェックも兼ねてインターコム越しにクルーチーフに声を掛けると彼は直ぐに返答し、外部から機体の状態を確認しつつ最後のチェックを行い、全てに異常が無い事を確かめると機体各部の安全ピンを抜き、それを中尉から見えるように頭上で掲げて返答の代わりとする。

「キャットーより編隊各機。準備はいいか？」

自機の離陸準備が完了したところで、中尉が同じように離陸準備を行っている筈のウィングマン達に呼び掛けた。すると、ほとんど間を置かず、それぞれのウィングマンから準備完了を示す極めて短

い返答が聞こえてきて編隊全機の離陸準備が完了した事を知る。

「キャット1よりコントロール。タキシングの許可を貰いたい」

「コントロールよりキャット・スコードロン。タキシングを許可する。ランウェイ34へ向かえ」

「了解」

腕時計で離陸予定時刻が近付いている事を確認した中尉が衝突警戒灯のスイッチを入れてタキシングの準備が完了した事を周囲に示し、それと同時に管制塔にタキシングの許可を求めると直ぐに許可が下りた。そして、その事を無線でクルーチーフにも伝えると車輪止めが外され、彼の誘導に従ってゆつくりとタキシングを開始する。このタキシング中にも機体の状態を確かめる動作を幾つか行い、計器の再チェックも行つて何も問題が無い事を確認し、ようやく離陸態勢が完全に整った。

「キャット1よりコントロール。キャット・スコードロン全機、ランウェイ・エンドに到達。指示を乞う」

「コントロール、了解。離陸に備え、現状で待機せよ」

「キャット1、了解。待機する」

ランウェイ・エンドへ編隊全機が到達したのを確認するとイエリネク中尉が管制塔へ現在の状況を伝え、離陸許可が下りるまでの間に機体の最終チェックを改めて行い、いつでも離陸できるよう万全の態勢を整えた。すると、最終チェックが完了するのとはほとんど同時に管制塔から離陸許可が下りる。

「コントロールよりキャット・スコードロン。離陸を許可する」

「キャット1より編隊各機。今の通信は聞いたな？ 離陸の許可が出た。全機、後に続け」

「了解」

中尉が編隊各機に自分に続いて離陸するよう命令すると、ウィングマン達からは直ぐに応答があり、既に離陸できる態勢にある事が伝えられる。

「キャット1、テイク・オフ」

離陸開始を告げると同時に中尉の搭乗するJAS-39Cはアフターバーナーを作動させ、轟音と共に一気に加速していく。そしてその機体を追い駆けるようにしてウイングマン達の操る機体もアフターバーナー全開で次々に大空へ駆け上がっていくのだった。

サンサルバシオンとの国境に近いエルジア空軍基地のブリーフィングルームには、私が所属するイエロー・スコードロンを始め、この基地へと集結した各飛行隊の隊長と副隊長が1人残らず顔を揃えていた。もっとも、これまでも大規模な軍事演習は何度も経験しているので、私を含め、ここに居る者達に緊張している様子は無い。「よし。全員、揃っているな？」

すると、室内を見回しながら航空団司令がブリーフィングルームに入ってくる。さらに、航空団副司令と作戦担当参謀や彼らの補佐を務める下士官といった面々も居た。だが、今回に限り、見慣れない人物も居る事に気付く。

「では、これよりブリーフィングを始める。まずは全員、これを見てください」

「各自、一部ずつ取って次へ回せ」

全員が揃っている事を確認した航空団司令が副司令に目配せをすると、副司令は脇に抱えていた資料の束を一番近くに居た者に手渡した。そして、私も自分の分を取ってから残りを次の者へと回すと、その資料の表紙に視線を落す。すると、そこには“極秘”のスタンプが押されているだけで他には何も書かれておらず、さらに、誰も中身を見ていない事を示すように赤と黒の縞模様のテープで閉じられていた。

「資料は行き渡ったな？ では、中を確認しろ」

航空団司令による閲覧の許可を受け、私は爪でテープに切れ込みを入れて資料を開き、そこに書かれている文章を読み進める。しかし、そこに書かれていた内容は私の想像を遥かに凌ぐ衝撃的なものだった。そして、その内容の意味している事を自分の頭で理解した

瞬間、私は思わずケレンスキー中佐の方を振り向いていた。すると、同じように私の方を振り向いた中佐と目が合う。

「中佐。これは……」

「どうやら、これは冗談でも何でも無さそうだ。さっき、司令達と一緒に入って来た妙な男がいただろう？ これは私の想像だが、おそらく彼は参謀本部が送り込んだ連絡係兼監視役だ」

そう言っ中佐は、見慣れない男の方に僅かに視線を向けて顎をしゃくる。そして、その動きに釣られるようにして私も目だけを彼の方へ向けた。その人物は、所属部隊を示すような代物は何一つ身に付けていなかったが、明らかに他の者達とは違う雰囲気纏っていた。その証拠に、司令達でさえ彼とは距離を置いて座っていたぐらいだ。

「傾注」

その時、航空団副司令の号令が聞こえ、私達は反射的に彼の方を注目する。そして、全員が話を聞く態勢になったのを航空団司令が確認し、私達に与えられた任務についての説明を開始した。

「各自、状況は理解したな？ そこに書いてある通り、明日、我が国はサンサルバシオン王国に対して宣戦を布告する。そして、諸君に与えられた任務はサンサルバシオン全土の制空権を速やかに掌握し、今後の航空作戦が円滑に実施できるようにする事だ」

次の瞬間、ブリーフィングルーム内の空気が様変わりして一気に緊張感を漲らせたものになる。それまでは、どこか信じられないところもあったのだが、こうして司令から直々に断言された事で確信に変わったからなのかもしれない。とにかく、この時、私達は本物の戦争が始まる事を初めて実感したのだ。

「まずは、各飛行隊が担当する空域の割り当てだ。全員、これを見る」

航空団司令が手元の機械を操作すると、正面の大型モニターにサンサルバシオン王国の領空を幾つもの空域に区切った図が表示される。そして更に、この空軍基地に集結している各飛行隊の担当する

空域だけを色分けしてピックアップし、他基地から出撃する飛行隊の担当空域と区別する。それに合わせ、私達も各自に配られた資料の中にある担当空域を記したページを開き、自分の飛行隊が受け持つ事になった空域に印を付けた。

「諸君らには、ここに記した通りの飛行ルートでCAPを実施してもらおう。当然、サンサルバシオン空軍の戦闘機が迎撃に上がってくるので、あらゆる手段を用いて撃墜しろ。敵機の方位や距離、予想される飛行ルート等は全てAWACSが教えてくれる筈だ。なので、基本的には彼らの誘導に従っていれば良いだろう。なお、各飛行隊の担当空域については……」

私は航空団司令の説明を聞きながら必要だと感じた事柄については素早くメモを取り、任務遂行に向けて準備を整えていく。一応、今回の任務は事前に決められたルートに沿って飛行しつつ状況に応じて敵機を迎撃するCAP（戦闘空中哨戒）となっているが、両陣営の戦闘機が入り乱れた乱戦となる可能性も充分にあると考えていた。

なぜなら、サンサルバシオン王国そのものが小さな国で、戦闘機の飛行速度であれば短時間で領空内の好きな所へ行く事が可能だからだ。そういった特徴を踏まえれば、AWACSによる支援を受けられるのは非常に心強い。このAWACSが自機的位置や敵機との位置関係、友軍機の動き等を客観的に把握して的確な指示を出してくれるおかげで、こちらは効率的に戦闘を行う事が可能となる。

「任務についての説明は以上だ。何か質問はあるか？」

一通り説明を終えたところで航空団司令が全体を見渡し、質問の有無を確かめる。すると、数人が手を挙げて質問が幾つか飛び出す。航空団司令は1人ずつ順番に指名し、尋ねられた事柄には丁寧に答えて質問をした者を納得させ、最後に改めて全体を見渡し、質問が完全に無くなったのを確かめてから次の話へと移った。

「次に諸君らがするのは、自身が指揮する飛行隊の部下達に現状を的確に把握させる事だ。その為に通常のブリーフィングでは無く、

このように隊長と副隊長だけを集め、事前に状況の説明を行ったのだ。ちなみに、この作戦の開始時刻に変更は無いので、それまでに部隊を確実に掌握しておく事が作戦参加の絶対条件となる。今さら言うまでも無いが、今回の作戦は非常に重要なものだ。故に、作戦に参加する部隊の指揮統制に不備があつてはならない。それだけは憶えておくんだ」

航空団司令の決意に満ちた言葉に、私を含めた全員が一斉に頷く。最早、私達には何の迷いも逡巡も無く、ただ純粹に1人の軍人として与えられた任務を全うする事しか頭には無かった。そして、この後もブリーフィングは1時間近くも続き、作戦に関する様々な事柄が詳細に伝えられた。

「最後に、これから作戦開始時刻になるまでの間は外部との接触は完全に遮断される。だから、基地の外へ出るのは勿論、誰かと連絡を取る事さえも認めない。たとえ、それが家族や恋人であろうと例外は無い。やむを得ず、何処かと連絡を取る必要がある場合は必ず彼に許可を貰い、指示された場所にある通信装置を使うんだ」

そう言つて航空団司令が未だに所属不明のままになっている人物を指差し、ついでに簡単な自己紹介も行ふよう促す。すると、彼は立ち上がった必要最低限の事柄だけを話すと、直ぐに座つて黙り込んでしまった。やはり、ケレンスキー中佐の想像した通り、彼は参謀本部から直に派遣されてきた人間で、今回の作戦が開始されるまでの間の情報管理に関する権限を与えられていた。

「また、それに伴い、ブリーフィングが終わり次第、外部との通信が可能な全ての私物を一時的に預かる。なので、ブリーフィング終了後も我々の指示に従え」

そう言つて航空団司令は私達の顔を端から順番に1人ずつ見ていき、全員の表情を確かめてから次の言葉を發した。

「よし、ブリーフィングは以上だ。副司令、後は頼む」
「分かりました」

航空団司令は後の事を副司令に託すと、作戦担当参謀達を引き連

れて早々に部屋から出て行った。そして、私達パイロット以外で残されたのは副司令と彼の補佐を務める下士官、それに参謀本部から派遣されてきた男だけとなった。すると、彼らは何か相談のようなものを始めたので、その間に私は隣に座っている中佐に声を掛ける。「とんでもない事になりましたね」

「ああ、そうだな。だが、これが正式な命令である以上、我々は黙って従うだけだ。だから、今の内に部下達を納得させる手段を考えておいた方が良いでしょう」

「それなら、特に心配はいらないでしょう。なにせ、私達の飛行隊に居る連中は全員が優秀です。だから、この状況も直ぐに理解して何が最善かを自分で判断しますよ」

「それもそうか」

最後に、そう言つて中佐が微笑んだ。どうやら、こんな話を聞かされたにも関わらず、私達は思った以上に落ち着いているらしい。

「お前達。このまま付いて来い」

その時、副司令から声を掛けられた。おそらく、先程の話にあった私物の回収に向かうのだろう。その指示を聞いた私は椅子から立ち上がると荷物を素早く纏め、中佐と肩を並べてブリーフィングルームを後にする。そして、別室で待機していたイエロー・スコードロンの他の戦闘機パイロット達と合流し、副司令達の監視の下で私物の回収を実施する。

その後は司令からの命令通り、彼らに開戦が近い事や実戦になる事を告げ、全員が納得できるよう現在の状況を包み隠さずに私達の知る範囲で伝えた。すると、彼らは想像以上の速さで今の状況と自分達のやるべき事を理解した。その上で私達は飛行隊としての綿密なブリーフィングも実施し、いつでも戦えるよう万全の態勢を整え、作戦が開始されるのを静かに待つのだった。

エルジア軍が着々と侵攻作戦の準備を進めてはいたが、未だ宣戦布告は行われていない事もあり、標的となつているサンサルバシオ

ン国内に目立つた動きは見受けられなかった。一応、国防軍が警戒態勢を敷いて監視を強化しているものの、それ以外は特に変わった様子も無く、多くの人々は普段通りの穏やかな生活を送っている。そして、それはサンサルバシオンに住む、ある一般的な家庭でも同様だった。

「ちよつと、あなた。いつまでもテレビばかり観てないで、少しはこつちを手伝ってよ」

「ゴメン！ もうちよつとで終わるから、それまで待っていてくれ。今、いいところなんだから」

「大丈夫だよ、ママ。僕がパパの分まで手伝うから」

それは、どこにでもある家庭の光景だった。夕食の準備で忙しそうに動き回っている母親が手伝ってくれるよう、キッチンからリビングの方に向かって声を掛ける。しかし、父親はテレビに夢中で動こうとせず、半ば諦めたような表情で母親が溜息をつき、息子が満面の笑顔で父親の代わりに手伝う事を告げる。そこでは、この家庭でもある、ありふれた日常の1コマが繰り広げられていた。

「ゴメン、ゴメン。どうしても続きが気になって……」

最初に手伝って欲しいと頼んでから15分ほど経った頃、バツの悪そうな顔をしながら、ようやく父親がキッチンに姿を現した。しかし、夕食の準備はほぼ完了しており、彼に手伝えるような事は何も無かった。

「ちよつと、出来上がったところよ」

彼女は明らかに不満げな表情を浮かべ、溜息と共に嫌味を言う。

「じゃあ、後片付けは僕が全部やるよ。それで良いかい？」

「あら、そう？ なら、任せるわ」

とりあえず、夕食の準備を手伝えなかった件は帳消しになったと思っただので、彼は足取りも軽く冷蔵庫へ向かうと、よく冷えたビールを2本取り出した。そして、立て続けに2本とも栓を開けると、妻の方を向いてビール瓶の1本を軽く掲げて見せ、飲むかどうかを仕草で尋ねる。彼女が首を横に振って“いない”という仕草

をすると、彼は早速、その場で1本を一気に飲み干した。

「くうっ……！ やっぱり、夏はコイツに限るなあ！」

「なにが、『夏は……』よ。あなたは真冬でも同じ事を言ってるでしょ」

「あれ、そうだったか？ 君の聞き間違いじゃないの？」

彼は肩をすくめ、わざとらしくトボけてみせる。すると彼女は、そんな彼の仕草を呆れ顔で聞き流すと、もう1度大きな溜息をついてから席に着くよう勧める。

「はいはい。そういう事にしておいてあげるわ。だから、早く席に着いて」

その言葉に満足したのか、彼は勧められるままに自分の席へと着く。そして、既に出来上がってテーブルの上に並んでいる料理をツマミに冷たいビールを楽しみ始める。そうやって瞬く間に2本目のビール瓶も空にすると、今度は家族3人での談笑交じりの夕食へと変わり、楽しいひと時を過ごす事が出来た。

「ねえ、今日も弾いてくれる？」

夕食が終わって後片付けをしている父親の背中に向かって息子が尋ねる。

「ギターか？ 勿論、いいぞ。ただし、これが終わってからな」

「ホント！？ ありがとう、パパ。じゃあ、今の内に僕が準備してあげるよ」

父親の言葉を聞いた少年は直ぐにリビングを飛び出して自分の部屋へ行き、机の上に置いてあるハモニカをポケットへ入れた。そして、その足で父親の書斎へ行くと1本のアコースティックギターを抱えてリビングへと戻り、持ってきたギターをソファの上へ置いて少年自身も別のソファに座る。そうやって10分ほど大人しく待っていると、後片付けを終えた父親がリビングに姿を現した。

「ほら、もう準備は出来てるよ。だから、早く早く」

「おいおい。そんなに急かさなくても……」

父親がリビングに入って来るなり少年は、彼の手を引っ張ってギ

ターの置いてある場所へと急かす。そして、息子に急かされるままに連れて来られた父親はソファーに深く腰を下し、ギターを手にして弦を弾きながら簡単な調律だけして演奏に備える。

「さて、今夜のリクエストは？」

「うん……」

彼が演奏して欲しい曲を尋ねると、少年は暫くの間、腕組みをして考え込むような仕草をしてみせる。そして数分後、聞きたい曲が決まると笑顔を浮かべ、元気一杯にリクエストする。

「やっぱり、いつもの曲がいい！」

「なんだ、結局、いつものか？」

「ダメ？」

「そんな事はないぞ。ただ、“本当に好きなんだな”と思っただけさ」

一瞬、少し寂しそうな表情をした息子に優しい笑顔を向けると、彼は素直に思った事を口にする。そして彼は息子のリクエスト通り、彼自身も大好きで、今までも1日の終わりによく弾いていた曲を演奏する事に決めた。

「じゃあ、次は僕も参加する」

今では、すっかり体の方が覚えてしまった曲を弾き終えたところで息子が手を挙げ、今度は少年自身も演奏に参加したいと言い出した。勿論、彼には断る理由が無いので、あっさりと快諾する。

「よし。じゃあ、今夜も2人でビシッと決めてやろうじゃないか。

勿論、曲は今さっきので良いんだよね？」

「うん！」

少年が元気一杯の返事をする、彼は再び同じ曲をギターで弾き始め、そのリズムに合わせるようにして少年もハモニカを吹く。すると、少年の傍らで蹲っていた犬が微かに耳を動かし、まるでリズムでも刻んでいるかのように尻尾を大きく左右に揺り動かす。こうして父子2人と1匹による演奏会は暫くのあいだ続けられ、深く思い出に残る最高の時間を彼らに提供した。

「ほらほら、もう寝る時間よ。明日は早いんでしょ？」

父子2人による演奏会が終了して優に1時間以上が経過した頃、そう言つて母親がリビングに姿を現し、いつまでも起きている息子に寝るよう告げる。その言葉に少年が時計の方に視線を向けると、時計の針は既に午後10時30分を回っていた。

「ホントだ！ 明日は友達との約束があつたんだ」

そう言つて少年は勢いよく立ち上がると洗面台の方へ行つて歯を磨き、それが終わると寝室へ向かつてベッドに潜り込む。少年には、明日は友達と遊ぶという大事な約束があり、その為に朝早く起きて自転車に乗つて出掛けなければならなかつたのだ。

『明日は、何をして遊ぼうかな……』

そうやって仲の良い友達と過ごす楽しい時間を思い浮かべながら、少年は深い眠りへと落ちていくのだつた。しかし、この時には既に事態は大きく動き出していた。そして、少年の人生を一変させる出来事は着実に迫っていたのだが、それを知る術など彼には無く、これまでと変わらない穏やかで楽しい日々が永遠に続いていくものだと信じていた。

もう直ぐ日付が変わろうとしている深夜、サンサルバシオン領内へと向かう幹線道路に近い各所に設けられた待機地点には、エルジア陸軍の主力部隊が続々と集結していた。表向きは今回の大規模軍事演習に参加する部隊となつているので、現時点ではエルジア軍が管理する敷地内に止まつているが、作戦発動と同時に行動を開始するべく大急ぎで出撃準備が進められていた。

「ほら、急げ急げ。あまり時間に余裕は無いんだからな」

「そこ！ さつさと道を空ける」

「物資の積み込みは、後40分程で完了するそうです」

「おい！ ここに置いてあつた弾薬は何処へ持つていったんだ！？」

そこには、また別の意味で戦場とも呼べる光景が広がっていた。

具体的には、MBT（主力戦車）やIFV（歩兵戦闘車）といった

大型で重量のある装軌装甲車両は整備と補給を終えた車両から次々に大型トレーラーに載せられ、装輪装甲車や大型トラックなどの各種車両が進撃に備えて隊列を形成していた。

そして、兵士達は個人装備の点検や部隊ごとのブリーフィングに余念が無く、その合間を縫って簡単な食事を済ませていた。さらに、各部隊の指揮官や幹部将校達は、作戦の最終確認や部隊間の連携についての会議に忙殺されている。

「おい。軍団司令部から作戦に関する連絡はあったか？」

「いえ、何も連絡はありません」

この場所に集結した全部隊を指揮する立場となっている陸軍少将が傍らに立つ副官に尋ねると、副官は事務的な口調で回答する。

「つまり、“全て予定通り”という訳か」

副官の言葉を聞いた少将は、そう静かに呟くと、サンサルバシオン王国のある方角へと視線を向けた。勿論、この距離ではサンサルバシオン国内の街の灯りが見える筈は無いのだが、これから戦場になる場所を彼は自分の目で見ておきたかったのかもしれない。

「それで、こちらの出撃準備が完了するのは？」

少将は再び指揮官としての表情に戻ると、手にした書類の束に忙しそうに視線を走らせて確認作業を続けていた副官に尋ねる。

「今のペースでは、最低でも1時間半は掛かるでしょう。急がせますか？」

「いや、いい。下手に急がせて問題が起きては本末転倒だ。時間通りに出撃開始地点へ到達できるのなら、無理に急がせる必要もないだろう」

「分かりました」

簡潔に答えた副官が確認作業に戻ると、少将は作戦概要の再確認に入る。まずは、この作戦で自分が指揮する事になる戦力の把握だった。一応、戦力規模としては1個師団相当になるのだが、主目標と作戦地域に合わせた複数の大隊で構成される諸兵科連合となっている。もっとも、彼の指揮する師団は、より大きな組織である軍団

に所属しており、他の4個師団と共に地上侵攻部隊の主力を形成する事になっていた。なので、最終目標や進撃ルートは既に決定済みである。

『やはり、先鋒を務める事になるのは3個戦車大隊と1個機械化歩兵大隊で決定だな。そうすると、この4つの大隊に担当させる戦区は……』

少将は手元の地図を眺めながら頭の中で指揮下の各大隊に戦区を様々なパターンで割り振る事を試し、最善だと考えられる戦区 of 分担を探る。ちなみに、彼の師団に与えられた任務は国境を越えてルート6と呼ばれる幹線道路沿いに進撃し、途中で遭遇すると予測されるサンサルバシオン陸軍の主力部隊を撃破しつつ首都のサンサルバシオン・シティ郊外にある陸軍基地を制圧する事にあつた。

そして、最終目標となっている陸軍基地までのルートには作戦を実施する上で大きな障害となるような地形は無く、荒涼とした大地が見渡す限り広がっており、大規模な機甲部隊を展開させるのに最適な条件が揃っていた。

『ま、強いて挙げるなら、この2箇所ぐらいか』

そう心の中で呟くと、最初のブリーフィングの時に彼自身が地図上に印を付けた2箇所を見つめ、その2箇所を撮影した衛星写真と見比べながら予想される敵の布陣や反撃について思考を巡らせる。

なお、その障害となり得る可能性のある2箇所の内の片方は河に架かる橋だった。もつとも、そこは涸れた浅い河なので装軌車両なら橋を使わずに強引に突破する事も可能だったが、それでも防衛線を構築するには適した地形だと言えるだろう。

そして、もう一方は進撃ルートの西側（左側）に緩やかな丘陵地帯があり、幹線道路を移動する部隊を上方から狙い撃ちにする事が出来た。但し、どちらも遮蔽物となるような地形や構造物が周囲に少なく、制空権さえ確保できれば、空からの攻撃で容易に敵を叩く事が可能だった。

『念の為、砲兵部隊による事前の制圧射撃と航空支援の準備だけは

しておくか。幸い、手元には師団砲兵大隊が保有する多数の榴弾砲とロケット砲、それに攻撃ヘリ大隊もあるからな」

少将は支援攻撃の態勢が万全に整っている事を確認すると、敵の待ち伏せが予想される2箇所の座標を改めて頭に叩き込み、必要な時には素早く支援命令を出せるようにした。そして再度、進撃ルートを端から端まで一通り確認しながら頭の中で作戦全体の流れをシミュレートしていく。

さらに彼は、敵の動きや配置を色々と変えてはシミュレートを繰り返し、あらゆる状況に対処できるようにしてから作戦に臨むつもりだった。ちなみに、彼が作戦実施前に入念なシミュレートを行うのは昔からの習慣で、士官学校時代に教官から指揮官の心得として叩き込まれた事柄の1つでもある。

『他に問題があるとするれば、補給線の確保か』

戦闘を想定したシミュレートが一段落したところで、少将は別の問題についても思考を巡らせる。これだけの規模の部隊が一斉に行動するとなれば、消費される燃料・弾薬・水といった補給物資の量も膨大なものとなる。それらの補給が滞れば進撃速度が落ちるばかりか、最悪の場合は敵を目の前にして戦闘不能に陥る危険性さえあった。それに、一定の進撃速度を維持しつつ敵との戦闘にも備え、尚且つ、滞りなく補給作業も実施しなくてはならない。むしろ、こちらの方が戦闘よりも遥かに厄介な問題だった。

『こちら辺が大部隊の泣き所だな』

思わず、そんな感想が脳裏に浮かぶと共に溜息が零れた。しかし、彼は直ぐに気を取り直すと、煩雑な補給計画に関するシミュレートを開始する。特に、敵と交戦する可能性の高い場所を突破する際には事前に前線部隊の補給と整備を終えておく必要があり、円滑な補給活動の為に入念なシミュレートは欠かせなかった。

『それから、他には……』

こうして少将は作戦のシミュレートに時間を忘れて没頭していく。もつとも、こういった彼の姿勢は現場で効果を発揮する事も多く、

今回の作戦で侵攻の主力を形成する1個師団規模の戦力を任されたのも彼の實力を上層部が評価しての事だった。

「少将。出撃準備、完了しました」

副官からの報告で我に返った少将が腕時計で時間を確認すると、当初の出撃予定時刻を5分ばかり過ぎていた。しかし、この程度であれば、まだ許容範囲内である。

「よし。では、指定された作戦開始時刻に留意しつつ国境近くの集結地点へ向かうよう通達しろ。集結地点到達後は別命あるまで待機以上だ」

「了解しました。直ちに全部隊へ通達します」

命令を受けた副官は姿勢を正して敬礼し、少将も彼に応えて返礼をすると、それを見た副官が駆け足で指揮車両の方へ駆けて行く。そして、彼は慣れた様子で指揮車両へ乗り込むと、師団内無線を通じて短い命令を指揮下の全部隊へ発した。

「全部隊に達する。行動開始。繰り返し。行動開始」

その途端、急に周囲が騒がしくなる。なにせ、1個機械化師団に相当する規模の部隊が保有する各種車両が一斉に行動を開始したのだから、その騒々しさは半端では無い。そして、多数の車両が発するエンジン音や振動は車両内にまで響き、暫くの間は隣に座る者との会話さえ困難な状況になった。

「まずまず、戦争が現実味を帯びてきたな」

副官とは別の指揮車両に乗り込んだ少将は、指揮官用の椅子に深く腰掛けると静かに呟いた。しかし、そんな彼の呟きも周囲の騒音や振動に掻き消され、誰にも聞こえる事は無かった。そして程なく彼の乗る指揮車両も低く響くエンジンの咆哮と共にゆっくりと動き出し、先発した車列を追い駆けるようにして国境近くの集結地点へと向かった。

Mission 4 B (後書き)

ようやく、戦争モノらしくなってきました。多分……。

まだまだ執筆ペースも物語の進行スピードも遅いですが、やっとエースコンバットらしくなってきたと自分では思っています。なので、これからも宜しく願います。

ちなみに、原作のゲームにも登場している方達を自分なりの解釈で描いてみましたが、いかがだったでしょうか？

Mission 5A (前書き)

この作品における戦闘機やヘリの高度・速度・重量・距離などの単位について。

エルジア軍ではメートル(m)・キログラム(kg)表記

ISAFを含む、それ以外の勢力ではフィート(ft)・ノット(kt)・ポンド(lb)・海里(nm)表記

搭載兵器の名称との兼ね合いもあり、このように分ける事にしました。なので若干、混乱を招くかもしれませんが、ご了承ください。

なお、方位については全ての陣営で共通です。真北を0度とする360度表記と、対象の機首方位を12時方向としたクロックコードを状況によって使い分けています。

Mission 5A

Mission 5

サンサルバシオン強襲

The Erusea War

2003年8月30日

これまでとは明らかに違うエルジア軍の妙な動きについての情報が続々と集まるにつれ、サンサルバシオン王国首脳部と国防軍上層部では混乱が急速に広がりつつあった。なぜなら、両者とも一定レベルの警戒態勢は敷いていたものの、エルジア共和国の真意を量りかねているのが現状だったからだ。

「まったく……。あいつらは一体、何を考えているんだ？」

「一応、発表では恒例の大規模軍事演習となっていますが……」

「なら何故、奴らの部隊は我が国との国境へ向けて移動してるんだ？ その方角には、あいつらの演習場なんて何処にも無いんだぞ！」

「とにかく、いま分かっている限りの情報だけでも首相官邸に送れ！ どのみち、我々には決定権など無いのだからな」

エルジア軍の動きを逐一監視しているサンサルバシオン国防本部に詰める将兵や情報分析官達でさえ状況を完全には把握できず、この有様である。そして、この混乱は国防本部からの報告を受け取った王国首脳部へも伝染し、国家指導者達も正常な判断が出来なくなっていた。

「こうなった以上、ここは警戒レベルを更に1つ上げるのが宜しいのでは？」

「いや、今は下手に刺激して向こうに余計な口実を与える方が不味い。それよりも、大使館を通じて非難声明を送るか会見を開き、直

ちに無用な挑発行為を止めさせるよう働き掛けるべきです」

結局、どの閣僚や補佐官も判断を決めかね、未だに具体的な対応を何一つ採れずにいた。しかし、そんな彼らの混乱を他所に、事態は否応無く進行していく。

コンコンー

「失礼します」

突然、首相の執務室の扉をノックする音がして1人の男が入って来た。彼が足早に首相の下へと歩み寄って耳元で何かを囁くと、首相は何度か頷いて立ち上がった。

「すまないが、少し席を外す」

それだけを告げると、首相は執務室へ入って来たばかりの男と連れ立って出て行ってしまった。その為、後に残された閣僚達は互いに顔を見合わせ、怪訝そうな表情を浮かべるしか無かった。

「こちらです」

そう言って首相を案内してきた男が小さな応接室の扉を指し示す。どうやら彼は部屋の中に入るつもりは無いらしく、扉の前で立ったままだった。そこで首相が勧められるままに部屋の中へ入ると、そこには1人の中年男性が座っていた。その人物は首相が入って来たのに気付くと立ち上がり、右手を差し出して握手を求める。しかし、首相が彼の握手に応じる事は無かった。なぜなら、この部屋で待っていた人物は、今もサンサルバシオン王国に混乱を与え続けているエルジア共和国の駐在大使だったからだ。

「それで、大使。納得のいく説明をしてもらえるんでしょうな？」

握手を拒んだ首相は大使に仕草で椅子に座るよう勧めると早速、今回の事態に対する釈明を求めた。しかも、首相の口調には明らかに非難の色が滲んでいる。

「どうぞ、これを」

だが、何故か大使は椅子には座らず、脇に置いていたブリーフケースからフォルダーに収められた1通の書類を取り出し、それをサンサルバシオン王国首相へと手渡す。その為、首相は微かな疑問を

抱きつつも渡された書類に視線を落した。すると、その書類はエルジア共和国からサンサルバシオン王国宛に書かれた正規の外交文書で、それを示すようにルシコフ首相直筆のサインも入っていた。

「なっ……！」

外交文書に記された内容に目を通した瞬間、首相は目を見開いて絶句する。なぜなら、そこにはエルジア共和国からサンサルバシオン王国に対する宣戦布告についての記述があつたからだ。多少の事では動じず、常に冷静沈着な態度を取る事で知られている首相ではあつたが、流石に、この内容は彼の想像を絶するものだったらしい。それ故、暫くの間は何の言葉も発する事ができず、その上、目の前にある書類に記されたシンプルな内容を理解するのにさえ時間が掛かつてしまった。

「それでは、私はこれで失礼します」

外交文書を渡し、自分の役目を終えたと判断したエルジア大使は平然とした口調で退室する事を告げると、そのまま首相の脇を通り過ぎて扉へ向かおうとした。しかし、なんとか冷静さを取り戻した首相が彼を呼び止める。

「待ちたまえ。こんな事をして許されると思っているのか？」

「許されるものにも、“戦争をする前には宣戦布告をする”という国際上のルールについては守っていますよ」

「だとしても、これで君達の国は世界を敵に回すんだぞ！ それを承知で……」

ここで大使は首相の言葉を遮るように片手を挙げると、感情論の応酬になりそうだった空気を变えるかのような一言を告げる。

「失礼。私も忙しい身でして、あまり長居は出来ないのですよ。それに、貴方も時間が無いのでは？」

その言葉を聞いた途端、首相は大使を怒りの籠った鋭い視線で睨みつけるが、直ぐに他の閣僚達の集まっている執務室へ向かつて足早に歩き去った。そして、彼に続くように部屋を後にしたエルジア大使は首相とは逆方向に廊下を歩いて官邸の外に出ると、待機して

いた車へと乗り込んで自国の大使館へと戻っていった。

ちなみに、彼を乗せた車は5分程で大使館へ到着し、そこで待機していた職員退去用のヘリの最終便に乗り換えて本国へと帰国している。一方、執務室へと急いで戻ったサンサルバシオン王国首相は、事態の急変を閣僚達へ包み隠さずに伝えるしかなかった。

「諸君。これから私が話す事を心して聞いて欲しい」

彼は執務室に入って奥にある執務机の近くへ向かうと、そこにある椅子には座らずに皆の方を向いて言葉を掛け、部屋に居る全員が話を聞く態勢になったのを見てから単刀直入に結論を述べた。

「たった今、エルジア共和国が我が国に対して正式に宣戦を布告した。これが、それを示す外交文書だ。ルシコフ首相直筆のサインがある事も確認した。残念だが、間違いなく本物だ」

その瞬間、執務室内の空気が凍りついたような沈黙と静寂に包まれる。しかし、それは直ぐに新たな混乱と焦燥を生み出した。

「どういう事だ！？ 大体、我が国は永世中立国なんだぞ！」

「それよりも、今すぐエルジア側と話し合って戦争を回避する方法を模索すると共に、国連を通じて国際社会に彼らの暴挙を止めるよう訴えかけるべきでは？」

「まずは、政府内部の意思統一が先決だろう。このままでは、纏まる話もまとまらない！」

あまりにも突然の宣告だった為か、それぞれが勝手な事を次々に口にする。そして、状況は一向に収束する気配を見せず、それどころか混乱が拡大するばかりだった。しかし、そんな中、最初に宣戦布告の事実を告げられた首相が皆を一喝する。

「落ち着きたまえ！ ここで我々が言い争っていても、事態は何も解決せんぞ！」

滅多に声を荒げる事のない首相の一喝に、この場に居た全員が思わず騒ぐのを止めて彼の方を振り向いた。そして、驚きと困惑が入り混じったような表情をした皆の視線を浴びる中、彼は自らの冷静さを保つ為なのか軽く深呼吸をすると、いつもと同じ口調に戻して

次々と指示を出し始めた。

「とにかく、今は時間が無い。だから余計な詮索や質問、それに議論も一切無しだ。直ちに行動するんだ。いいな？」

そう言つて首相は端から順に視線を巡らせて素早く全員の様子を窺い、迅速に行動できる態勢に変わった事を確認する。しかし、この時点で既にエルジアの宣言した開戦時刻まで残り2時間30分程になっていた。つまり、どれだけ迅速な対応が出来たとしても、サンサルバシオン側が後手に回った事は疑いようの無い事実であった。そして、そんな中で出来る事は非常に限られている。

「まずは、DEFCON1を発令する。この際、細かい手続きや手順は全て省略して構わん。なによりも今は、エルジア軍からの攻撃に備えて態勢を少しでも整えておく事が先決だ」

「分かりました。直ちにDEFCON1を発令して警戒レベルを最大まで上げ、エルジア軍との戦闘に備えるよう全軍に通達します」

そう言つて国防大臣は立ち上がると、DEFCON1（国家間同士の全面戦争への対処を目的とした体制）の発令を全軍に通達するべく執務室を後にした。そして、その間にも首相からは矢継ぎ早に指示が出される。

「外務大臣。今回のエルジアの暴挙を国連に報告してくれ。国防軍が時間を稼いでる間に、なんとしても国際社会からの支援を取り付けるんだ」

「やってみます」

首相から指示を受けた外務大臣は直ぐに国連代表に連絡を入れると、本格的な協議の為に執務室を出て行く。ただし、エルジア共和国が拒否権を持つ国連安全保障理事会の常任理事国である以上、国連軍の派遣は絶望的だった。なぜなら、国連軍を編成して派遣するには、安全保障理事会を構成する14カ国の内の2/3以上の賛成と5カ国ある常任理事国が拒否権を行使しない事が条件だからだ。

「それから、国民への通達についてだが……」

「失礼します」

首相が次の指示を出しかけた時、数人の黒服を着た見るからに屈強そうな警護官が入って来た。そして、彼らは首相の下へ直ちに歩み寄ると、官邸地下に設置されたシェルターで以後の指揮を執る事を強く進言する。

「DEFCON1の発令に伴い、政府首脳の方々には速やかに地下のシェルターへ移動して貰います。どうぞ、こちらへ」
「分かった」

地理的な要因から常に外敵による脅威に曝されてきた歴史のあるこの国では、非常事態が発生した際の行動についての講習や訓練が国民に対して行われており、それに併せて政府首脳を対象にした非常事態訓練も定期的に行われていた。その為、彼らも躊躇う事なく地下シェルターへの移動を開始する。

「諸君。聞いた通りだ。以後の指揮はシェルターから行つ」

まだ執務室内に残っていた閣僚達に向かって現在の状況を伝えると、首相を含めた主要閣僚と補佐官達は警護官の先導で地下シェルターへと続く専用エレベーターに乗り込んで地下深くへと下りていった。そして、地下シェルターに辿り着いた彼らは早速、必要な機関や組織に次々と指示を出していくのだった。しかし、残された僅かな時間で出来る事は決して多くは無く、あつという間にエルジア共和国の宣言した開戦時刻を迎えてしまった。

この日はエルジア共和国がサンサルバシオン王国に宣戦布告し、それと同時に国境を越えて侵攻を開始するにも関わらず、その当事者であるエルジア軍人としての私には何の緊張感も無かった。ブリーフィングで通達されていた出撃時刻に合わせて起床すると、最初に目を覚ます為に熱いシャワーを浴び、それからフライトスーツに着替えて軽い朝食を取り、談話室で同じ飛行隊の仲間と一緒に出撃までの時間を過ごす。多少の違いもあるが、そこには開戦を告げられる前と変わらない時間が流れていた。

「待機中の全戦闘機パイロットに達する。出撃準備を開始せよ。繰

り返す。待機中の戦闘機パイロットは全員、直ちに攻撃準備に取り掛かれ」

その時、頭上のスピーカーから普段と変わらない様子の航空団司令の声が聞こえ、直ちに攻撃準備に取り掛かるよう命令が下る。

「よし。全員、今の放送は聞こえたな？ 攻撃だ！」

「了解！」

ケレンスキー中佐の掛け声に、私を含めたイエロー・スコードロンの全員の声が見事に重なった。そして私達は、それぞれに自分のヘルメットを掴むと、全速力で自分の愛機の下へと駆け出していく。すると、他の飛行隊のパイロット達も攻撃準備の為に自分達の愛機の下へと駆け寄っていくのが視界に入った。しかし、私は直ぐに自分の愛機の方へと視線を向け、周囲の安全を確かめながらエプロンに駐機してある機体の傍へと急いだ。

「曹長。機体の状態は？」

機体をグレイの濃淡で塗り分けるロー・ビジ（低視認性）塗装が主流となっている中、飛行隊の通称に合わせて主翼端と垂直尾翼上端、それに機体下面を黄色で塗装したSu-37の下へと駆け寄った私は、機体の傍らで待機していたクルーチーフに自分が搭乗する事になっている機体の状態を尋ねる。この些細な質問に意味があるのかどうかは分からないが、昔から機体に搭乗する際には必ず行っている一種の癖みたいなものだ。

「勿論。いつだって最高の状態に整備してありますよ」

そう言っただけで私より年上の曹長は、親指を立てるサムズアップと共に子供のような笑顔を見せる。そして、そんな彼の表情に釣られるように私も笑みを浮かべると、直ちにプリフライトチェックに取り掛かる事を告げた。

「いつも、ありがとう。早速だが、プリフライトチェックを始める。ついに、我々にも出撃命令が下ったんだ」

「了解。直ちに取り掛かります」

すると、曹長は直ぐにプロとしての真剣な表情に戻り、他の整備

兵達にも合図を送ってから彼自身もクルーチーフとしての任務に取り掛かった。その間に私は機体の周囲を歩いて回り、アクセスパネルや動翼を中心に自分の目で見たり、手で触ったりして何処にも不具合が無い事を確かめていく。この搭乗前のチェックは、軍民を問わずに全てのパイロットが行う事になっている義務だ。

さらに今回は真正正銘の実戦なので、私が搭乗する機体には各種AAM（空対空ミサイル）と機関砲弾が満載されており、不気味なまでの威圧感を醸し出していた。そして、機体の状態を確認して曹長の言うように完璧に仕上がっている事を知った私は、軽快な足取りでタラップを上ってコクピットへ滑り込むようにして乗り込んだ。「次は計器類のチェックだな」

コクピット内のシートへと収まった私は小声で囁くと同時にフライトスーツの脚ポケットからチェックリストを取り出し、ハンドシグナルで外部電源が供給されている事を近くの整備兵に確認した後、そのチェックリストに記されている無数の項目を1つ1つ丁寧に確かめながら計器類のプリフライトチェックを開始する。

そうやって全てのチェックが完了し、何も異常が無い事を確信すると、いよいよ本格的な離陸準備に入る。最初は、現代戦闘機を制御する要と言っても過言ではないコンピューターの電源を確保する事からだ。私はマニュアルに従い、電源確保に必要な操作と計器類のチェックを交互に繰り返して確実に電源を確保する。

「続いて、エンジン始動」

僅かに高揚している今の気持ちを表すかのように私は再び小声で囁くと、ハンドシグナルでエンジン始動の為の手順を開始する事をクルーチーフに告げる。すると、少し間があり、ハンドシグナルでエンジン始動を許可する合図が出る。その合図を確認した私は、念の為に計器類に何も警告が出ていない事を確かめてからマニュアル通りにエンジン始動の操作をしていく。

やがて、微かな振動と共にエンジン内のタービンが徐々に加速しながら回転を始め、その数値が一定のラインに達したところで右エ

ンジンを制御するスロットルをアイドル位置へと入れる。その瞬間、今までよりも大きく機体が振動し、同時にエンジン音も一段と大きくなって右エンジンが始動した事をはっきりと伝えてきた。

そして私は、現在のエンジンや油圧の状態を表示している計器に素早く視線を走らせると、そこに警告灯の類が一切点灯していない事を確かめてから先程と同様の手順で左エンジンも始動させる。

『我ながら奇妙だとは思うが、こうしてコクピットに収まっていると何故か落ち着く。そして、こいつと一緒になら、どこまでだって飛んでいけそうな気がするよ』

2基の低バイパス比のターボファン・エンジンが発する強烈な轟音と振動を体で直に感じた私は、声にこそ出さなかったが、そんな感情を抱いていた。もっとも、この感情は戦闘機に乗っている時には常に抱くもので、今日が特別という訳ではない。

なので、私は直ぐに戦闘機パイロットとしての思考に切り替え、2基のエンジンに何の異常も無い事を改めて確認してからハンドシグナルで外部電源やタラップを取り外すよう整備兵に指示を出し、続いてハーネスを締めて体をシートにしっかりと固定し、通信用コードや酸素供給用のホース等が一体になっている酸素マスクをヘルメットに接続する。

そして、機載コンピュータに自機のいる場所の位置情報や任務遂行に必要な各種データを一通り入力してゆき、全てが完了したところで周囲への合図も兼ねてキャノピーを閉じた。

「曹長。機体各部の動きは？」

「大丈夫。全て正常に動作してます。それに、無線の感度も良好です」

キャノピーを閉じた後は真っ先にインターコムの通信状態を確認し、それを使ってクルーチーフと連絡を取り合いながら操縦桿やフットペダルを操作してゆき、機体各部の状態を実際に動かす事によって順繰りにチェックして離陸に向けた各種の作業を着実に進めていく。

そうやって一連の準備が整うと、クルーチーフが機体各部に差し込まれていた安全ピンを一本残らず抜いて回収してから機体正面へと戻り、それらが私にも見えるように彼自身の頭上に高く掲げる。これで後は、管制塔からのタキシングと離陸の許可を待つだけとなった。

「コントロールより待機中の全戦闘機に告げる。これより、こちらの指示する順番で各飛行隊ごとに離陸してもらう。最初はレッド、次にイエロー、最後はシルバーだ。レッド・スコードロン各機はタキシングを開始しろ」

「レッド・リーダー、了解。タキシングを開始する」

管制塔からの許可を待つ暫くの間、私は管制官と他の飛行隊の隊長との無線交信を聞きながら静かに自分達の飛行隊にも許可が下りるのを待った。そして数分後、ようやくイエロー・スコードロンにもタキシングの許可が下りる。

「コントロールよりイエロー・スコードロン各機。タキシングを許可する。ランウェイ06へ向かえ」

「イエロー1、了解」

「イエロー13、了解」

「イエロー5、了解」

ケレンスキー中佐に続いて私も管制官に短い返答を送って指示を了解した事を伝えると、同じようにイエロー・スコードロンの面々もタキシングを開始する準備が整っている事を告げていった。そんな中、無線周波数を切り替えてクルーチーフとは出撃前では最後となる交信をする。

「曹長。タキシールウェイまでの誘導を頼む」

「了解、少佐。それと、無傷で機体を返して下さいよ」

この曹長の言葉には『生きて帰って来て欲しい』という意味が込められているのを知っていたので、私は穏やかに返事を返した。

「分かった。約束する」

こうして交信を終えた私はタキシングに備えてギアブレーキを掛

け、タキシードウェイまで誘導してくれるのを静かに待っていると、彼は素早く機体の下へと駆けて行って車輪止めを外した。そして、誘導用のワンドを手に再びコクピットにいる私から見える位置まで戻ると、いつでも誘導を開始できるよう待機する。程なく、右隣で待機していたケレンスキー中佐の機体が彼の機を担当するクルーチーフの誘導に従って動き出し、ゆっくりとタキシードウェイへ向かっていくのが見えた。

『いよいよ、だな』

そう心の中で呟いた途端、目の前に立っていたクルーチーフが誘導を開始するのを視界に捉え、私はギアブレーキを緩めると共にスロットルを僅かに動かして機体をゆっくりと前進させる。そして、彼の誘導に従って機体をタキシードウェイまで丁寧に移動させると、7～8 m前方をランウェイに向けて移動する中佐の機体があった。さらに、キャノピーの内側フレームに設置された後方確認用の小さなミラーに視線を移すと、3番機に当たる機体が私の機に続くようにして動き始めているのも見える。

その時、不意に轟音と共に地面が微かに震えるのを感じた。私が僅かに首を音のした方向へ向けると、先に離陸態勢へと入っていたレッド・スコードロンの機体が2機ずつ編隊を組んで離陸するところだった。しかし、その事を直ぐに意識から追い出すと、ランウェイ・エンドに着くまでに済ませておく必要がある機体各部のチェックを開始した。

「イエロー1よりコントロール。こちらは全機、ランウェイ・エンドに到達した。指示を乞う」

「コントロールよりイエロー・スコードロン。離陸を許可する。高度3500 mまで上昇後、方位350に向けて飛行しろ。以後の指示はAWACS、コールサイン・オーロラが行う」

「イエロー1、了解」

ランウェイ・エンドで機体の最終チェックが完了したところで中佐が管制官に指示を仰ぐと、直ぐに編隊全機に離陸の許可が下りた。

その交信を聞きながら私は再度、ハーネスや酸素マスク、Gスーツやインターコムなど身の回りのチェックを行って離陸に備える。上空に上がってからには非常に忙しくなるので、そうした中で余計な事をするのはバーティゴー（空間識失調）などのトラブルの要因となる。従って、こうした身の回りのチェックは地上に居る間に済ませしておくのが戦闘機パイロットとしての常識だった。

「イエロー1よりイエロー・スコードロン全機に達する。離陸の許可が出た。2機ずつ高度3500mまで上昇し、方位350°へ向かえ」

「イエロー13、了解。離陸位置に着きます」

「イエロー5、了解」

私を含めた各パイロット達が次々に短い返信を送り、いつでも離陸できる状態にある事を報せる。

「イエロー1、テイク・オフ。イエロー13は後に続け」

「イエロー13、了解」

ケレンスキー中佐の命令と共に離陸滑走が開始される。私は中佐の機体の左斜め後方の位置を維持しつつ中佐の機の動きを目で追いつ、アフターバーナーに点火するのを確認してから自分も同じようにスロットルを最大まで押し込んでアフターバーナーを作動させた。その瞬間、轟音と共に機体が振動して加速し始め、強烈なGで体がシートに押さえつけられる。そして、私は隊長機の動きと自機のHUDを交互に見ながら機首上げのタイミングを計る。

『そろそろだな』

燃料と弾薬を満載している為に多少は時間が掛かったが、HUDに表示された機体速度の値が260km/hを超え、私は自機が離陸速度に達したのを知る。すると、視界の端に捉えていた隊長機の各動翼が動き、それに釣られて機首も空を向くのが見えた。念の為にもう一度だけHUDの表示を見て離陸速度に達している事を再確認した私は、ゆっくりと操縦桿を手前に引いて機首を10度まで持ち上げて離陸姿勢を取る。

その途端、軽い浮遊感によって機体が地面から離れるのを感じたが、直ぐに2基のエンジンから生み出される大推力によって引き起こされた強烈なGが私の意識を現実へと引き戻した。それと同時に、私自身も戦闘機パイロットとしての職務を全うする事に務める。

『ギア、アップ。上昇角は10度を維持』

こうして空に上がってしまえば空気抵抗にしなければならないランディング・ギアを格納するスイッチを操作すると、軽い振動が起きてランディング・ギアが格納されたのを体で感じる。それと共に機体の振動が僅かだけ収まり、空気抵抗が減少した事も分かる。勿論、HUDからはランディング・ギアが出ている事を示す表示は消え去り、その間にも機体は速度を増しつつ目標の高度を目指して駆け上っていた。

そして、私から見て右前方には、同じようにアフターバーナーの薄い炎の帯を引きながら上昇している中佐の機体があった。やがて、目標の高度が近づいてきたところで私はスロットルを少し戻してアフターバーナーを切り、操縦桿を静かに奥へと倒して機体を水平にさせる。

『まずは、高度3500mで水平飛行へ移行。まだ少ししか飛んでいないが、この一連の動きからは操縦桿を操作した時の反応も悪くないように思える。どうやら曹長が言っていた通り、この機体の仕上がり具合は完璧なようだな』

HUDの表示から今の機体の状態を素早く把握した私は、地上での話を思い出しつつ、そんな事を考えていた。すると、同じように水平飛行への移行を完了していた中佐が管制塔へ報告を入れるのが無線越しに耳に入る。

「イエロー1、および13よりコントロール。所定の高度に達した。これより、方位350へ向けて飛行する」

「コントロール、了解。以後はAWACSの指示に従え」

「イエロー1、了解」

「イエロー13、了解」

私達は管制塔に指示を了解した事を伝え、操縦桿を右へ倒して機体をロールさせて90度近い角度にまで傾けると操縦桿を一旦は中央に戻してから手前に引き、そのまま緩やかな右旋回で機首を方位350へ向け終わると再び操縦桿を中央に戻し、それから今度は操縦桿を左に倒して機体を先程とは逆方向へロールさせて旋回を終了させる。

そして、燃料消費を抑えるようにエンジン推力を細かく調整しつつ、仲間の機が同じように離陸して隊形を組むのを静かに待った。すると、編隊全機が揃う瞬間を狙ったかのような絶妙のタイミングでAWACSからの通信が入る。

「イエロー・スコードロンの各機、聞こえるか？ こちらのコールサインはオーロラ21。当空域の管制を担当するAWACSだ。早速だが、イエロー・スコードロン全機は編隊を維持したまま事前の飛行ルートに沿ってWPFまで進出しろ。到達次第、次の指示を出す。以上だ」

「イエロー、了解。指定のルートでWPFへ向かう。イエロー・スコードロン全機、今の指示は聞いたな？」

ケレンスキー中佐の問い掛けに、私達は通信装置のON/OFFで生じるノイズで返答する。勿論、全員が指示を了解したのは言うまでも無い。

「グッド・ラック」

私達が指示通りの行動に移ったのをレーダースクリーンで確認したAWACSのオペレーターは、最後にお決まりの言葉を残して通信を終えた。それと同時に、私は自分の目で編隊の様子を見渡し、自分の機体が隊形を乱すような位置にいない事を確認する。それから今度はフルカラーMFD（多機能ディスプレイ）へと視線を移し、AWACSから指示された飛行ルートを再度確認した。

『次のポイントまでは、このままの針路で問題ないな。それに、今のペースで飛行すれば作戦計画通りの時刻に各ポイントを通過できそうだ』

MFDに表示された数値から素早く状況を読み取った私は、その心の中で呟くと、HUDとキャノピーの外側に広がる空へと視線を戻し、編隊内の今の位置を維持する事と飛行ルートから外れないよう操縦する事に全神経を集中させた。ちなみに、当初の作戦計画に変更が無ければ、今から約20分後には国境を越えてサンサルバシオン領空に侵入している事になっていた。

この日、私がスクランブル発進に備えてハンガー脇の待機室でウィングマンとサッカーの話で盛り上がっていると、突然、普段は足を運ぶ事の無い航空団司令が入ってきて衝撃的な事実を伝えた。

「先程、国防省よりDEFCON1が発令された」

その言葉を聞かされた途端に私は思わず息を呑み、半ば呆然とした表情で航空団司令の顔を見つめたまま固まってしまった。その原因は勿論、この“DEFCON1”が“国家間規模の全面戦争に対処するもの”だという事に他ならない。ただ、60年近く昔に2度目の世界大戦が終結し、それを教訓として今の体制が確立されてからは1度も発令される事が無かったので、その分だけ受けた衝撃も大きくて軍人らしからぬ反応になってしまった側面もある。

それでも数秒後には思考の硬直から抜け出し、どういう事が司令に説明を求めようと思ったのだが、どのように切り出して良いか分からず、結局は何も喋る事が出来なかった。そこで私はウィングマン達の方を振り向いたが、彼らも私と同じように混乱しているらしく、ただ困惑の表情を浮かべて互いに顔を見合わせるばかりだった。しかし、そんな私達を無視するように司令は更に驚愕の事実を告げる。

「理由は、我が国がエルジア共和国から宣戦布告を受けたからだ」

「まさか……。そんな事が実際に起こるなんて……」

「何かの間違いでは……？」

あまりに突拍子も無い一言に、そんな反応しか出来なかった。しかし、航空団司令は首を横に振って私達の言葉を即座に否定する。

「残念だが、これは事実だ。なお、この宣戦布告はユーゴスラビア中央西部時間で本日0900時をもって有効となる」

「まったく、悪い冗談だぜ。後、2時間半も無いなんて……」

その言葉を聞き、ウイングマンの1人が自嘲気味に呟く。そして彼の呟いた事は、そのまま私の言いたかった事の1つでもあった。

「なので、スクランブル待機の君達には真っ先に出撃してもらう事になる。そういう訳だから、今の内に覚悟を決めておくように。以上だ」

航空団司令は最後に一言だけ付け加えると、足早に部屋から出て行ってしまった。DEFCON1が発令されたとなれば彼は色々と忙しくなるので、いつまでも我々だけに構ってられないのだろうが、私には異論を挟ませない為に立ち去ったようにも見えた。

「しかし、いきなり『覚悟を決める』と言われても……」

再び室内が4人だけになったところで、ウイングマンの1人が微かに怯えたような表情で呟く。

「命令なんだから、従うしかないだろう!」

「ですが……」

「おい、2人共。いろいろと言いたい事はあるだろうが、まずは落ち着け」

それを聞いていた別のウイングマンがイラついたような口調で大きめの声を出した為、必然的に室内の空気がピリピリとしたものに変わった。それを見ていた私は咄嗟に2人の間に割って入り、これ以上、この場の雰囲気が悪くなるのを避ける事にした。

「確かに、とんでもない事態になったとは思いつ、いきなりの話で混乱するのも分かる。だが、俺達は命を懸けて国を守る国防軍の戦闘機パイロットで軍人だ。なら今は、自分に与えられた任務の遂行に集中すべきじゃないのか？」

私は2人の目を鋭い視線で正面から見据え、やや強めの口調で話した。すると、彼らも少しは落ち着きを取り戻したのか、今の状況に対応しようとし始める。

「そう、だな……」

「軍に入ると決めた時に覚悟はしてたつもりだったんですが、どうやら“覚悟の意味”を分かって無かったみたいですね。でも、もう大丈夫です」

そんな2人の言葉に私は大きく頷き、いつもの穏やかな表情に戻した。もつとも、先程の対応は彼らを率いる編隊長としての立場上、半ば義務のような感覚で冷静な態度を取ったに過ぎず、実際は私も彼らと同じように動揺していたのだ。そういった意味では、彼らが先に動揺した様子を見せてくれたおかげで、逆に冷静に事態を受け入れて行動する事が出来たのかもしれない。

「そうと決まれば、今の内にエルジア軍の情報や交戦時のフォーメーション等を確認しておく必要があるな」

そうして覚悟が決まった事もあり、この私の言葉にも反対する事は無く、残された時間を最大限有効に使って様々な事態を想定した即席のブリーフィングを実施した。当然、祖国を守る為の戦いとなる今回は、いつも以上に真剣な表情で取り組んでいる。

そして、開戦時刻が近付いた頃、部屋に耳障りな警報音が鳴り響いた。勿論、それはスクランブル発進を命じる合図だ。その瞬間、私とウイングマン達は飛び跳ねるようにして椅子から立ち上がり、手元に置いてあったヘルメットを掴むと機体のあるハンガーへ直結する扉へ向かって駆け出した。

「エマージェンシー！ エマージェンシー！ 待機中の全戦闘機は直ちに離陸せよ。これは演習では無い。繰り返す。全戦闘機は直ちに離陸せよ。これは演習では無い」

けたたましい警報と共に、頭上のスピーカーからは現況を伝えるオペレーターの切迫した声が聞こえてきた。しかし、これから本当に戦争が始まるのだと考えれば、それも当然の反応と言えるだろう。『ついに来たか』

扉を抜けてハンガーの中へと入った私は、そう心の中で呟き、これから自分の命を預ける事になる機体を睨みつけるようにして見た。

すると、別の待機室にいた整備兵達が同じように全力で機体に駆け寄るのに気付く。それを見た途端、今は1秒も無駄に出来ない状況にあるのだと再認識し、余計な事を考えるのは止めた。

「プリフライトチェック、始めるぞ！」

スクランブル発進に備えている機体ゆえにミサイル・機関砲弾・燃料を満載して既に戦闘の準備が整っているJAS-39Cの下へ達すると、ほぼ同時に機体の所へ到達したクルーチーフに向かってスクランブル用のプリフライトチェックを始める事を伝える。その後、私は機体の周囲を回って機体各部の状態を素早く点検して異常が無い事を確かめると、大急ぎでタラップを駆け上がり、滑り込むようにしてコクピットへと収まる。

シートに体を預けた私はヘルメットを被り、時間が無いからといって実施が義務づけられている手順を省略するような事はせず、チェックリストに従って機体の状態を確認してから電源を確保し、この後のエンジン始動に備えた。

『よし。何も問題は無い』

準備が整っている事をハンドシグナルでクルーチーフに伝えたと直ぐにエンジン始動の許可が下りた。その合図を見た私はスタータースイッチを押し、エンジンの回転数が基準値を超えたのを計器で確認してからスロットルをアイドリング位置に入れる。すると、振動と共に甲高いエンジン音がハンガー内に響き渡った。

エンジンの始動を受け、素早く計器パネルに視線を走らせて警告灯の類が一切点灯していない事を確かめた後、ハンドシグナルで機体外部に接続してあったホースやコード類、タラップといった代物の取り外しを指示した。そして、休む事なくハーネス・酸素マスク・インターコムといった身の回りの各種装備を順繰りに整えてゆき、それらが全て完了したところで機載コンピューターに必要なミッシヨンデータを入力する。

「引き続き、機体各部のチェックに移る」

「了解」

インターコムの子エックも兼ねてクルーチーフに音声で指示を出す、彼は直ぐに反応してハンドシグナルと音声で返事を寄越した。そして、彼と連絡を取り合いながら機体各部の動作具合を素早くチェックし、何も異常が無い事を確かめてからキャノピーを閉じた。最後に、機体各部に付けられていた安全ピンがクルーチーフによって抜かれ、それを自分の目で確かめると離陸の準備が完了した事になる。

「ジャツジ1よりコントロール。離陸準備、完了」

「こちら、ジャツジ8。同じく離陸準備、完了しました」

「ジャツジ2、同じく準備完了」

「ジャツジ5よりコントロール。離陸準備を完了し、待機中」

私が管制塔に報告を入れた直後、ウイングマン達も次々に準備完了の報告を入れ、いつでも離陸できる態勢が整った。4分以内の準備完了がスクランブル待機中のクルー達に課されている目標だったのだが、その最短記録を今回は樹立したような気がする。もともと実際のスクランブル発進で時間を計る事は無いので、これは個人的な感想に過ぎない。

「コントロールより待機中のジャツジメン・スコードロン各機に告げる。直ちに離陸し、高度14000ftで方位184°へ向かえ。

なお、以後の指示はチャンネル4を使用せよ。以上だ。グッド・ラック」

「ジャツジ1、了解」

「ジャツジ2、了解」

「ジャツジ5、了解」

「ジャツジ8、了解」

私を筆頭に編隊各機が管制官からの指示を了解した事を伝える。

「チーフ、誘導を頼む」

私がギアブレーキを掛けつつインターコムでクルーチーフに指示を出すと、直ぐに車輪止め等が外され、クルーチーフが機体正面で誘導の態勢に入る。そして、その間に私は手早く機体の最終チェック

クや身に付けている装備品の再確認を行って離陸に備えた。こうして僅かな時間で全ての準備は整い、それに合わせてクルーチーフが誘導を開始する。

その動きを見た私はブレーキを緩め、スロットルを僅かに押し込んで機体をゆつくりと前進させ、既に開け放たれているハンガーの扉から外へと出す。そうしてハンガーから外へ出ると、そこはランウェイ・エンドに直結しており、方向転換などを行う必要も無く直にランウェイに進入して離陸滑走に入る事ができるようになっていた。

『何も異常は無いな』

一応、機体がハンガーから完全に出た所で周囲の状況を確認しておく。その直後、誘導を担当していたクルーチーフがハンドシグナルを送って機体の針路から駆け足で離れ、私の視界の正面には真っ直ぐに伸びるランウェイしかなかった。そこには見慣れた基地周辺の光景が広がっているが、今は景色を楽しんでいる余裕は無い。

私はランウェイの中心線に対して右よりの位置に機体がある事を確かめるとランウェイ・エンドでは止まらず、キャノピー・フレーム内側に設置してあるミラーで素早く後方の安全とウイングマンの位置を確認し、スロットルをアフターバーナー位置にまで一気に押し込んだ。すると、轟音と共に機体が振動し、強烈なGが私の体をシートへと押さえつける。そして、それに比例するかのように機体も一気に加速していく。

『120……、130……、140……。ピッチ・アップ』

HUDに表示される速度と方位を意識しつつ、機首上げのタイミングを計る。そして、速度が140ktを超えて離陸速度に達したところで、私は操縦桿を真っ直ぐ手前に引いて機首を僅かに引き起こす。すると、軽い浮遊感と共に振動が小さくなり、ランディング・ギアが地面から離れた事を体で感じる。それでも私は念の為、HUDに表示されている高度を確かめてから手元のスイッチを操作してランディング・ギアを格納した。勿論、ランディング・ギアが格納

された事を確かめるのも忘れない。

『ピッチ角は15度を維持』

離陸後は速度と高度に注意しつつピッチ角を15度に保ち、指示された高度14000ftまで一定のペースで駆け上がる。そして所定の高度に近付いたところでスロットルを戻してアフターバーナーを切り、さらに、操縦桿を奥に倒して水平飛行へと移行した。

「ジャッジ1より編隊各機。方位184へ転進するぞ」

残りの3機も水平飛行に移り、標準的なエシロン隊形を組んだところで次の命令を出す。

「レフト・ターン……、ナウ」

私は最初にウイングマン達的位置関係を把握しておき、それから左旋回を行うタイミングを指示する命令を出すと共に操縦桿を左へと倒し、機体を大きくロールさせて垂直になるまで傾けてから中央に戻した操縦桿を今度は手前に引き、方位184を目標して機体を旋回させる。そして、目標の方位が近付いたところで再び操縦桿を中央に戻し、今度は右へ倒して機体を先程とは逆方向にロールさせて旋回前と同じ水平飛行に戻した。

「ジャッジ1より編隊各機。無線通信をチャンネル4に切り替える」

方位184へ機首を向けて水平飛行に移ったところで無線通信を切り替えるようウイングマン達に指示し、それと同時に私も通信周波数を複数ある設定の中のチャンネル4に切り替えた。すると、直ぐに指揮管制を担当するオペレーターからの通信が入ってきた。

「こちらは諸君らの指揮管制を担当する事になったセイラー・ホテル・ケベックだ。ジャッジメン・スコードロン各機、こちらの声が聞こえているか？」

「ジャッジ1よりセイラー・ホテル・ケベック。感度良好。よく聞こえる」

セイラーHQからの通信には微かにノイズが混じっていたが、それは通信に支障が出る程のものでは無かったので、私は『感度良好』だと答えた。そして、それはウイングマン達の機体でも同様だった

らしく、チャンネル4での通信に何の問題もない事が彼らの口からも次々に伝えられた。

「では、これより簡単に状況を説明するから全員、落ち着いて聞いてくれ」

そう言つと通信相手は間を取り、5秒程の極めて短い時間だったが、私達に気持ち落ち着ける為と思われる猶予を与えた。既に命を懸けて戦う覚悟を決めた私達にとって、それは無用の気遣いだったのだが、敢えて何かを言う必要も無いと思ったので黙っている事にした。そして、それはウイングマン達も同じである。

「既に聞いていると思うが、国防省から全軍に対してDEFCON1が発令された。それを受け、我が国はエルジア共和国との戦争へ突入する」

やはり、セイラーHQからの最初の通信は現在の状況を再確認する為のものだった。

「なお、このDEFCON1の発令は、本日未明に通達されたエルジア共和国からの宣戦布告に伴う政府対応だ」

ここでオペレーターは言葉を切り、無線越しに私達の反応を窺つてから次の指令を出す。

「諸君らは国境まで現在の方位と速度、高度を維持して飛行してくれ。そうすれば、開戦時刻の5分前には所定の空域に到達できる筈だ。そして、担当空域到達後は敵の襲来に備えて待機し、必要に応じて敵機の迎撃に当たれ」

「ジャッジメン・スコードロン、了解。現状を維持しつつ、所定の空域に向かう」

セイラーHQからの指令には編隊長である私が代表して答えた。

当然、この通信は編隊の全員が聞いているので、こうして返答する事には何の問題も無い。

「ちなみに、開戦後の武器の使用については自由だ。全て諸君ら現場の判断に任せる。ただし、こちらから国境を越えてエルジア領空に入つてまで敵を追撃する事は許可されていない。必ず、我が国の

領空に止まって敵を迎撃しろ」

「それは万が一、『敵が国境線の遙か向こうから長射程ミサイルを撃ってきたとしても、我々には回避行動しか認めない』という訳ですか？」

交戦規定に関する指示を聞いた私が当然の懸念を口にする。

「いや、そうではない。あくまでも、こちらの戦闘機が国境を越えなければ構わない。それさえ守れば反撃は諸君の自由だ。その辺りは状況を見ながら臨機応変に対応しろ」

「つまり、我が国の領空内に自機を止めてさえいれば、こちらも長射程ミサイルでエルジア領空にいる敵機を攻撃しても構わないのですね？」

「ああ、その通りだ。それに、敵からの攻撃を確認した場合は開戦前であっても反撃は許可されているし、当然、その際には警告なども不要だ。勿論、開戦後であれば、こちらからの先制攻撃も含め、あらゆる手段を使って敵を迎撃しろ」

その言葉を聞き、気休め程度だが、私は気が楽になったように感じた。多少の制約はあるものの、完全に受け身に回る事だけは避けられたからだ。

「状況説明は大体、こんなところだ。他に何か質問はあるか？」

「では、1つだけ。増援の到着は何時ですか？ まさか、『我々4機だけで敵と戦え』なんて無茶な事は言いませんよね？」

今回は私を含めた4機がスクランブル待機となっており、警報が発せられてから5分以内に離陸する事が義務付けられていた。故に私達は4分を切るぐらいの速さで準備を整えると他の機体に先行して空へと上がったのだが、たった4機の戦闘機で敵の侵攻を阻止するのは現実的に考えて不可能だ。

なにより、今回はDEFCON1の発令に伴い、国防軍の全軍に総力を挙げて迎撃するよう命令が下っている筈である。ならば、スクランブル待機に就いていない機体も準備が完了次第、空へと上がって戦闘空域へ向かわせるだろう。そういった一連の流れになると

予測し、私は説明に無かった増援の到着予定時刻を尋ねたのだ。

「いま、全ての基地に準備の出来た機体から直ちに空へ上げるよう命令が出されている。なので、空に上がり次第、順次、必要な地域へと投入するから心配するな。とにかく、諸君の任務は全力で敵の侵攻を食い止め、制空権を維持する事。それだけだ」

早い話が、『我々の下へ増援が到着するのは何時になるか分からない』という事だ。確かにパイロットや整備員の招集、機体の整備や補給といった作業には時間が掛かるので、多くの機体を短時間で空へ上げるのが難しい事は承知している。それに、滑走路の関係から1度に離陸できる機体の数も限られてくるだろう。

さらに付け加えるなら、敵の展開次第では他地域への増援が優先される為、必ずしも我々の担当空域に増援が送られてくるという保証も無い。勿論、そんな事は最初から分かっているので異論を唱えるつもりなどは無いが、それでも僅かな希望ぐらいは欲しかった。

『今更、そんな事を考えても仕方ないな……』

しかし、直ぐに思考を切り替えた私は黙って命令に従う事を決める。それに、戦闘機パイロットになると決めた時から祖国の空を命懸けで守り、どんな状況下でも任務を遂行すると誓ったのも事実だ。だから私は、何の躊躇いも無く次の言葉を口にした。

「ジャッジ1、了解。全力で敵を迎撃します」

「ジャッジ2、および5。同じく、我々も全力で敵の侵攻を阻止します」

「ジャッジ8も隊長に従います。我々の力で祖国の空を守りましょう！」

すると、無線を通してウイングマン達も似たような事を口にする。どうやら、今の彼らも私と同じ気持ちを胸に抱いているようだ。

「よし、その意気だ。ジャッジメン・スコードロン！」

そう叫んだオペレーターの声にも熱が籠る。

「なにより、諸君は祖国防衛の先鋒で戦いの趨勢は君達の双肩に懸かっている。だから、エルジアの連中を1機残らず我々の空から叩

き落してやれ！」

「了解！」

セイラーHQからの情熱的な激励を受け、私達4人の声が重なる。そして、こうしている間にも機体は目的の空域へと着実に近付き、開戦時刻も刻一刻と迫っていた。

『ここは我々の空だ！ だから、誰にも侵させはしない！』

私はヘルメットのバイザーとキャノピー越しに国境の方を見つめると、操縦桿とスロットルを握る手に力を込め、改めて自身の決意を心の中で力強く叫ぶのだった。

Mission 5A (後書き)

ようやくサンサルバシオン侵攻となり、エルジア大戦が勃発します。これで、戦争モノらしくなったと言いたいんですが、またしても戦闘シーンはありません。なので、相変わらずの展開が続いてます…。

しかも、更新が遅くなった上に話も長くなってしまい、本当に申し訳ない気持ちで一杯です。

それから最後に、PV5000・ユニーク2000を突破した事を感謝と共に報告させていただきます。

M i s s i o n 5 B (前書き)

航空機やヘリの機動・戦術といった部分は現実に近づけてあります。その代わり、燃料・弾薬の搭載量はゲーム寄りになっており、かなり大雑把です。

Mission 5B

我が国の政府がサンサルバシオン王国政府へ通告した開戦時刻まで20分を切った頃、私は燃料補給と機体の再チェックを終えたKa-50Nのコクピットへと収まり、出撃許可が下りるのを静かに待っていた。

ちなみに、今いるFARP（前線補給展開地点）からサンサルバシオンとの国境までの距離はヘリの巡航速度で考えれば決して遠くはないのだが、作戦の都合上、ここから先は地形追従飛行を強いられるので10分以上は掛かり、国境を越えてからも目標となる早期警戒レーダー施設をミサイルの射程に収めるまでに7〜8分は飛行しなければならぬ。

もつとも、今回の作戦では攻撃のタイミングが最も重要なので、早すぎても遅すぎても意味が無い。なので今は、このFARPで時間を調節している訳だが、ここから先は常に時間を気にしなければならない、極めて慎重な操縦が要求されるのは必至だ。

『そろそろか……』

ブリーフィングで示された出撃時刻が迫っている事を腕時計で確認した私は、心の中で呟くと同時に何時でも離陸できるよう神経を研ぎ澄まし、操縦装置に添えた両手に僅かに力を込める。なお、既に乗機のエンジンは始動しており、後は推力を上げるだけで離陸できる状態にある。すると、1台のピックアップ・トラックが右方向から走って来るのが見えた。そして、その車両の荷台部分には、緑の旗を掲げた兵士の姿がある。それは、無線封鎖の中で離陸を許可する合図だった。

『エンジン推力、油圧ともに正常。機体各部、異常なし。燃料・弾薬も充分にある。なら、後は目標まで飛ぶだけだな』

離陸許可を伝える合図を受けた私は、機体の状態を素早く再確認してからハンドシグナルだけで離陸態勢に入る事を機体の正面に立

っている整備兵に伝える。すると、彼は直ぐにコクピットからは死角になっていく周囲の状況を他の整備兵と共に確かめ、安全が確保されている事を同じようにハンドシグナルだけで伝えてきた。それを見た私は右手でサムズアップをして感謝の意を表し、直ちに離陸を開始する。

『ここからは低空飛行を強いられる訳か。一応、訓練は万全にしてきたが……』

そんな感情を抱きながら慎重にコレクティブ・レバーを操作し、少しずつエンジン推力を上昇させて離陸する。そして、15mを僅かに下回る高度で機体を一旦ホバリングさせた。さらに、この高度を維持するよう神経を集中させながらサイクリック・スティックを操作し、ゆっくりと機体を前進させる。すると、次第に速度が上昇し、巡航速度が近付くにつれて徐々に安定した飛行となるが、相変わらず15mを僅かに下回るような高度のままなので片時も気を抜けなかった。

『やはり、実戦でのフライトは想像以上に神経を使う』

それが今の正直な感想だった。一応、今回のような地形追隨飛行の訓練は充分にしてきたものの、この状態を維持したまま実際に国境を越えて目標を攻撃する実戦とでは緊張感が違う。なにせ、今回は訓練と違って敵が本気で殺すつもりで撃ってくるのだから、緊張するなと言う方が無理な話だ。

それに、他にも不安要素は幾つかある。その不安要素とは、地形追隨飛行でレーダーは誤魔化せたとしても人間の目までは誤魔化せないし、大音量を周囲に撒き散らす派手なローター音も奇襲攻撃を行う上では大きな弱点となるからだ。もっとも、昼間よりは敵に発見され難い夜間に地を這うような超低空飛行を行って地面に突っ込むリスクと比較すれば、どちらも大差は無いのかもしれない。

『ようやく、国境が……』

離陸から10分近くもの間、高度15m前後の地面を這うような地形追隨飛行を強いられた後、ついに国境線を肉眼でも捉えられる

距離にまで進出する事に成功した。越境に当たっては極力、監視の目が届かず、同時に攻撃目標までの距離が短い地点を越境ポイントとして選定したが、誰にも発見される事なく侵入できる保証は皆無である。

『とりあえず、ここから見える範囲には誰もいないようだな』

素早く周辺の状況を肉眼で確認した私は誰もいないと判断したが、国境を越えた時に何が起きるのかを正確に知る術は無い。その上、たとえ現地で監視している者が何処にもいなくても監視カメラや赤外線センサーぐらいは設置してあつて当然だ。もし、そういった監視網に捕捉されれば、我々が国境を越えて1分と経たない内に国境警備隊司令部へと情報が伝わり、我々の存在が明らかになるだろう。そうなると、後は時間との戦いになる。つまり、相手が何らかの対応をしてくる前に、こちらが先制攻撃で機先を制するしか作戦を成功させる方法は無いという訳だ。だが、宣戦布告が既に行われている以上、サンサルバシオン側の反応が早いのは明白だった。なので、現実には我々の存在が察知された時点で作戦は失敗になる。

『その為に、今回は我々の奇襲を支援する者が居ると聞かされたが

……』

その時、私の脳裏にブリーフィングで聞かされた1つの事案が浮かんだ。なんでも、サンサルバシオン側の監視網を沈黙させる計画があり、それは開戦に間に合うよう事前に準備されていて、後はいつでも実行に移せる段階にあるらしい。だが、情報統制の観点から我々にも詳細は一切伝えられていない。

なので、私が知っている事といえば、『別働隊が越境を支援するので、君達は飛行に集中しろ』という作戦担当士官の言葉だけだった。その為、私達は全てが計画通りに進んでいると信じて国境を越えるしか無かった。

この時、私達はエルジア共和国とサンサルバシオン王国の国境近く、そのサンサルバシオン側に居た。勿論、私達はサンサルバシオ

ンの国民でもなければ、この国に来ている旅行者やビジネスマンの類でもない。それどころか、この国には親族や友人さえいなかった。もともと、サンサルバシオン国民であつたとしても何らかの特別な理由でもない限り、こんな国境近くの辺鄙な荒野に足を運ぶ事はない筈だ。

一応、視界にはボールのように丸い乾燥した植物の塊や不法投棄されたゴミの山ぐらゐは幾つも見えるが、どう考えても観光スポットと呼ぶには殺風景すぎる。そんな中、私達はギリースーツに身をくるんで偽装し、まるでゴミの塊が岩場に転がっているかのような格好をしていた。つまり、こんな場所で偽装してまで待機していなければならぬ立場の人間という訳だ。

「もう直ぐ、指定した時刻だ。気を抜くなよ」

「分かりました」

腕時計で時刻を確認した私は、念の為に周囲に人がいない事を確かめてから隣にいる男に小声で指示を出す。すると、彼も同じように小声で短く答え、手にした双眼鏡で国境を挟んだエルジア側の地平線を見つめた。その間に私は小型のSATCOM（衛星通信装置）を取り出し、いつでも暗号化された信号を送れるよう準備を整えておく。

「ヘリが接近中。機種はKa-50、我が軍のヘリです」

その時、双眼鏡で監視していた男が報告を入れてきた。ちょうどSATCOMの準備が終わつたところだつた私は彼が監視している方に視線を向け、左手を彼の方へ差し出す仕草と共に双眼鏡を寄越すように言う。

「私が確認するから、お前は周囲を警戒しろ」

「了解」

そう言つて短く答えた彼は言われた通りに双眼鏡を手渡してきた。そして、双眼鏡を受け取つた私は地平線の上に浮かぶ小さな黒い影に焦点を合わせ、本当に友軍のKa-50かどうかを確認する。すると、そこには特徴的な2重反転ローターを持つ背の高いヘリの編

隊があつた。それは間違いなくKa-50のシルエツトで、このユーリア大陸ではエルジア軍でしか運用されていない機体だった。それでも私は念の為、ヘリ編隊が姿を現した方位に間違いが無いかを確かめる。

『定刻通りに指定された方角から接近。機種はKa-50で機数も揃っている。なら、今度は我々が働く番だな』

そう心の中で呟いた私は双眼鏡から目を離し、先ほど準備しておいたSATCOMを使って暗号化された信号を送信する。ちなみに、その内容は“ヘリ編隊を視認”という短いものであつた。そして、信号を送つて10秒も経たない内に“了承”を意味する信号をSATCOMが受信し、これで私達の任務は終わったも同然となつた。一応、ヘリ編隊が国境を越えるまでは監視活動が続ける事になつていたが、今更なにかが起きたとしても我々に出来る事は無いからだ。『よし。撤収するぞ』

「了解」

数分後には何事も無くヘリ編隊は国境を越え、周囲に轟音と砂埃だけを残して視界から姿を消した。そして、ここから先の事はヘリ編隊に任せるしかないので、彼らの越境を見届けた私達も直ちに現場を後にした。

エルジア共和国とサンサルバシオン王国との戦争が目前に迫つた頃、サンサルバシオン国内にある小都市の郊外で秘かに活動する者達がいた。当然、こんなタイミングで一般人が秘密裏に活動するというのは考え難く、軍や情報機関といった政府組織の関係者だと考える方が自然だろう。そして、実際、彼らはエルジア共和国の対外諜報機関であるSIB所属の工作員とエルジア軍特殊部隊の合同チームだった。

「諸君。行動開始だ」

すると、現場指揮官らしき男がSATCOMから耳を離し、直ちに与えられた任務を実行に移すよう周りの者達に指示を出した。ち

なみに、彼らが居るのは雑居ビルの地下である。彼らは、ある特殊な任務を遂行する為に開戦の数時間前から待機していたのだ。

「システムチェック、完了。これより、データを送信します」

そう言つて1人がラップトップのキーを素早く叩き、何らかのプログラムを実行する。すると、そのラップトップのディスプレイには2つのウィンドウに全く同じ何処かの景色が映し出され、同時に先ほど実行したプログラムが正常に機能している事を示すシンプルな表示のサブウィンドウも出現した。

そして、プログラムが起動して10秒程で2つある景色を映した映像の一方にだけ変化が表れた。その変化とは、この映像を撮影しているカメラに対し、ほぼ真正面から低空で接近してくるヘリ編隊が捉えられている事である。

「プログラムは問題なく機能しているな？」

「はい。予定通り、偽のデータを送信し続けています」

ラップトップの操作を担当している人物は、現場指揮官からの質問にディスプレイに表示されている映像を見つめたまま淡々と答えた。それを聞いた現場指揮官は腰のポーチからPDAを取り出し、地上にいる監視チームに現在の状況を報告するよう日常会話を装った短いメッセージを送信する。すると、直ぐに偽装した文面で『異常なし』を意味するメッセージが返信されてきた。

「よし。現状のまま作戦を続行する。ただし、何か異常が起きたら直ちに報告しろ」

指揮官はPDAを手に持ったまま地下で作業に当たるチームに指示を出すと、腕時計で時刻を確認してからラップトップに表示されている映像を鋭い視線で睨みつけた。そして、ゆっくりと息を吐いて気持ちを落ち着かせようとする。ちなみに、彼らの任務はサンサルバシオン国境警備隊の監視システムに侵入し、宣戦布告前に国境を越える予定になっている友軍ヘリ編隊が探知されるのを確実に遅らせる事にあつた。

『それにしても、よく出来たプログラムだな。見事にヘリの姿だけ

を消している』

ラップトップに表示されている2種類の映像を見比べながら指揮官が心の中で感心する。彼の目にはリアルタイムで同じ場所、同じ角度で撮影されている筈の国境の様子が映っているのだが、一方にはヘリ編隊の姿が全く映っていない。当然、ヘリ編隊をはつきりと捉えている映像の方が本物である。

しかし、彼らの用意したプログラムは見事なまでに映像を加工する事ができ、その上、加工に伴うタイムラグや不審な痕跡も一切残さない優れた代物だった。それ故、疑われる事なくサンサルバシオン国境警備隊の監視センターにヘリ編隊の姿だけを消去した偽の映像を送信できるのだ。

もっとも、どんなに優れたシステムを使っていたとしても、それが絶対に見破られないという保証など何処にも無い。だから、彼らは地上に監視チームを配置して直に国境警備隊の施設を見張ると共に、通信傍受を駆使して不穏な動きが無いか常にチェックしていた。『幸い、まだ気付かれてはいないようだ……』

異常を報せる連絡が無いという事は作戦が計画通りに進行している証なのだが、それでも一抹の不安があるらしく、指揮官は険しい表情をしたまま無言でラップトップのディスプレイを睨みつけていた。余談ではあるが、今回の作戦で監視システムをごまかす為に使用されたプログラムにも大きな制約がある。それは、プログラムの入ったパソコンを対象の回線に直に接続しなければならない事だ。

その為、彼らは膨大な時間とコストを掛け、この場所を確保したのである。その方法とは、地下に埋設されている監視システムの回線の間所を探すのに街の再開発記録を調べ、工事を請け負った業者を特定し、地下設備の設計資料を盗んだり関係者を買収したりして情報を入手。

そして、その情報を基にパソコンを接続するのに最適な建物を割り出し、その建物の傍でわざと有毒な化学物質を満載したトレーラーを横転させて周辺の人間を全員避難させ、無人になった隙に汚染

物質除去の為に来た作業員の振りをして目的の建物内に侵入し、地上での騒ぎの間に作戦の下準備を行うというものであった。

ちなみに、わざと横転させるトレーラーの運転手もギャンブルで作った借金の返済に困っていた人間を買収して使ったのだが、欲を出して『黙っていて欲しければ、もっと金を寄越せ』と言ったので、直後に頭を銃で撃ち抜かれて今は湖の底で魚の餌になっている。もつとも、最終的には口封じの為に殺す予定だったので、それは大した問題にはならなかった。

「ヘリ編隊の国境通過を確認」

「ああ、私も確認した」

ラップトップのディスプレイに表示されている映像を監視していた男が報告を入れると、同じようにディスプレイ上の映像を見ていた指揮官も直ぐに返答した。その言葉通り、実際の国境付近の様子を映した方の映像には後方から撮影されたと一目で分かるKa-50Nの姿が確認でき、その機影は次第に国境から遠ざかりつつある。そして、ヘリ編隊が国境を越えてから更に数分が経過し、編隊は完全にカメラから見えなくなった。

しかも、この間、監視システムに侵入したプログラムは正常に機能し続け、地上の監視チームからサンサルバシオン側に動きがあったという報告も入ってこなかった。ただし、それは彼らが把握できている範囲内では異常が無かったというだけで、本当にサンサルバシオン側に気付かれずに侵入できたのかまでは分からない。もつとも、どちらの場合であっても彼らに出来る事は1つだけなので、指揮官は直ぐに命令を下す。

「作戦は終了した。直ちに撤収するぞ」
「了解」

すると、ラップトップを操作していた男は指揮官の方を見ずに返事をし、直ちにプログラムを終了させて電源も落とす。その間に指揮官はPDAを使って地上の監視チームに自分達が撤収する事と、それを援護しながら地上チームも撤収するよう命令を出した。

「長居は無用だ。急げ」

そう言って指揮官は急かすが、ラップトップを操作する男の動きに変化は無く、淡々とした様子で作業を続けている。そして、彼はラップトップの電源が落ちるのを確認してから監視システムの回線との接続に使っていたコードを抜き、それらを纏めて黒いバッグの中に押しこんだ。その後、立ち上がってバッグを左手で持つと、車を停めてある方へ向けて足早に移動していく。すると、彼の後ろから指揮官と銃を持った2人の男が続ぎ、辺りを軽く見回してから車の所へ向かった。

「我々が最後だ」

指揮官は“関係者以外立ち入り禁止”と記されたプレートの付いた鉄製の扉を抜けた先にある地下駐車場まで来ると、その扉の前で警戒に当たっていた男に歩きながら自分達が最後で、他に誰もいない事を告げる。そして、直ぐ傍にエンジンを掛けた状態で前後に並んで停まっている2台のヴァンの内、前方の1台へと乗り込んだ。

ちなみに、彼らの乗り込んだ車両は偽装の為に害虫駆除業者の大きなロゴが車体側面に貼っており、彼ら自身も白い防護服に身を包んでいた。しかも、人が少なくなる深夜から朝に掛け、このビルで薬剤を使った害虫駆除を行う事を事前に通告していたので、銃さえ隠していれば誰かに見られても怪しまれるような危険は無かった。

「よし。出せ」

1台目のヴァンの助手席に収まった指揮官がドライバーに命じると、直ぐに車が走り出す。さらに、もう1台のヴァンも先に走り出した車を追いかけるようにして動き出した。こうして2台は目立たないような速度で地上へ通じる出入り口へと向かい、そこでサイドウィンドウ越しに詰め所に居る駐車場の係員兼警備員に1台目のヴァンのドライバーが合図を送り、精算機のゲートを開放してもらって通過する。

そして、地上に出た所で指揮官は周囲の様子を素早く観察するが、特に目立った動きは見受けられなかった。ただ、開戦時刻が目前に

迫っている所為か、交通量や人通りは明らかに少ない。なお、サンサルバシオン国境警備隊の監視センターは、この建物から6ブロック程の距離の場所にある。

「予定通り、ポイント・リマへ向かえ」

「了解」

指揮官からの命令に短く答えたドライバーがウインカーを出し、西へ向かう事を後続の車両にも伝える。それと同時に指揮官はPDAを取り出し、地上の監視チームにも任務完了後はポイント・リマへ向かうよう指示を出す。こうして作戦を終えた彼らは、ほとんど誰にも怪しまれる事なく街を離れる事に成功した。

私は計画通りに支援部隊がサンサルバシオン国境警備隊の監視網を黙らせている事を信じ、低空飛行のまま国境を越えた。

「よし。とりあえず、今のところは問題なく進行しているようだ。」

後は、このまま予定通りに攻撃開始地点まで前進できれば良いんだが……」

そうやって色々と考えている間にも我々の部隊は国境を越え、ついにサンサルバシオン領内へと侵入した。すると、編隊内の4機が私達とは別の方向へ機首を向けるのが視界の隅に入ってきた。当然、この行動も作戦通りで、その4機のヘリは我々とは別の早期警戒リーダー施設の攻撃に向かったのである。

しかし、私は直ぐに別行動に移った4機の事を意識から切り離すと、MFDに表示されている自機の位置情報と目標までの針路を確認する。そして、自機の針路と位置に問題の無い事が分かると、再び地を這うような低空飛行を続けるのに専念する。なにせ、ここは既に他国の領土であり、いつ攻撃を受けても不思議では無かったからだ。

「もう、そろそろか……」

国境を越えてから数分後、我々の攻撃ヘリ編隊は文字通り地面を這うようなNOE（超低空匍匐飛行）に入っていた。このNOEを

行えば、燃費や速度の犠牲と引き換えに被発見率を極限まで減らせるのだが、それと同時に我々パイロットの精神的負担までも大幅に増大させるのが難点だった。しかし、それでも目標の6〜7km圏内にまで接近するような状況下や、SAMが息を潜めて隠れている可能性の高い場合などでは非常に有効な戦術なのは確かだ。

「アルファ・ストライク、セクション20、ズールー」

目標へ向けてNOEを続けていると、突然、無線から司令部の命令が聞こえてきた。その意味は『現時刻より20秒後、一斉攻撃を行え』である。私は機体の前進を止めると、素早くコンソールに指を走らせてスタブウイングに搭載されたKh-25MPの射撃準備を整えると共に目標と自機の位置関係を再度確認し、既に攻撃目標をミサイルの射程内に収めている事を確かめる。

こうして手際よく攻撃態勢を整えたところで、今度はMFDに表示されているデジタル時計の数値を心の中で読みながらカウントダウンを始める。

『6・5・4・3・2・1、今だ！』

指示された攻撃開始時刻になった瞬間、左手でコレクティブ・レバーを引き上げてエンジン推力を上昇させる。すると、小刻みな振動と共にエンジン音とローター音が一気に大きくなり、機体は上空へ向かって垂直に上昇を開始する。

そして、高度が45mを超えた辺りでエンジン推力を緩めて機体をホバリングさせて安定させる。すると、キャノピー越しに見える視界も先程よりは遥かに開けたものとなり、ようやくNOEに伴う緊張感からは解放されたものの、直後に今度は索敵レーダーの走査を受けている事を警告する警報音がコクピットに鳴り響いた。

「くそっ、ターゲットは何処だ？」

実際は大して時間が経過した訳では無いのだが、このような状況下では1秒が異常なまでに長く感じられ、思わず、そんな言葉が零れた。そして、一向に鳴り止む気配の無い警報音が私を更に焦らせる。その時、ついにミサイルのシーカーが目標を捉えた事を示す表

示がHUD上に表れ、同時に特徴的な電子音でもターゲットの捕捉を報せてくれる。

「よし、捉えた！」

私は再度、目標を確実に捕捉している事を確かめるとサイクリック・スティックに付いている兵装発射ボタンを押し、立て続けに2発のミサイルを発射した。その直後、機体にもミサイル発射に伴う衝撃が伝わり、僅かに振動する。そして、私がミサイルを発射したのとはほぼ同じタイミングで編隊を構成する他の3機からも同様に2発ずつミサイルが発射され、高速でターゲットに向かうのが視界に入る。

しかし、私は発射したミサイルの事は直ぐに意識から追い出し、サイクリック・スティックを前方へ倒すと共にコレクティブ・レバーを少しだけ押し下げて機体を地表近くへ向けて降下させた。

「これで、後戻りは出来なくなったな」

再び30m以下の高度へと機体を戻した私は、そう呟くと地形追随飛行のまま早期警戒レーダー施設への接近を開始した。勿論、それは先程のミサイル攻撃によって何らかの損害を被っている筈のレーダー施設に追撃を加える事で完膚なきまでに破壊し、この地域一帯の早期警戒レーダー網に大穴を開けて友軍の航空機部隊が安全に通過できる空の回廊を作ってやる為だ。

『そろそろの筈だが……』

そう思っ て視線をMFDに移すと、自機を示すシンボルと地図上のマーカーが既に重なっていた。それを見た私は機体を軽く左右に揺すってウイングマン達へと合図を送る。すると、編隊内の2機が私の機体とは違う方向へ機首を向けて少し離れ、新たな編隊を形成する。そして、経過時間から彼らが所定の位置に到達したタイミングを見計らい、コレクティブ・レバーを操作してエンジン推力を上げて機体を上昇させると、兵装選択スイッチを押して今度はS-8ロケット弾を選択した。

『どうやら、あれがレーダー施設らしいな』

高度を上げた事で再び視界が広がり、目標と思しき施設が遠くに見えた。ただ、今いる場所からでは距離があるので、先程の攻撃による成果を肉眼で正確に確認するのは難しい。それに、何処に敵が潜んでいるか分からない以上、のんびりと一箇所に止まって戦果確認をしている余裕など無い。もともと、黒煙と炎ぐらいいは遠くからでも確認できるので、何らかの損害を与えたのは確実だった。

『とにかく今は命令通り、接近しつつ攻撃を行うだけだ』

私は与えられた任務を改めて脳裏に思い浮かべると、サイクリック・スティックとコレクティブ・レバーを握る手に力を込め、機体の速度を上げつつレーダー施設へと接近していった。そして、一定の速度で接近を続ける間にもターゲットのレーダー施設一帯を観察し、被害を受けていないように思える施設的位置と数を素早く確認していく。

「アダー83よりアダー88、聞こえるか？」

私は無線でウイングマンに呼び掛けた。先程の攻撃で我々の存在がサンサルバシオン側に知られた可能性は極めて高いので、このまま無線封鎖を続けていても意味は無いと判断しての行動だった。

「こちら、アダー88。感度良好です」

すると、直ぐにウイングマンからの返答が届く。それを聞いた私は彼に攻撃目標を割り振ると共に、直ちに実行に移すよう指示を出す。

「正面、11時方向の建物を攻撃しろ。私は右隣、2時方向の建物を攻撃する」

「了解」

短い返答と共に、ウイングマンの操縦するKa-50Nの機首が11時方向にある大きめの建物の方を向く。そして、その間に私も自分が攻撃する建物の方へ機首を向けた。

「攻撃開始」

攻撃目標を示すシンボルとロケット弾の照準がHUD上で重なっている事を確認し、私はウイングマンに命令を下すと同時にサイク

リック・スティックに付いた兵装発射ボタンを押す。すると、機体の両側面にあるスタブウイングのパイロンに搭載されたS-8ロケット弾ポッドから次々に80mmロケット弾が高速で飛び出していた。

そして、私からの命令を受けたウイングマンも同じように目標に対してロケット弾の雨を降らせる。もっとも、ロケット弾は無誘導兵器なのでミサイルのような命中精度は期待できないが、動かない固定目標に対しての攻撃であれば十分な効果を得る事ができる筈だ。カンツカカンツ―

その時、突然、機体に何か硬い物が当たって弾ける音がした。私は咄嗟に首を左右に振って周囲の状況を確認める。すると、機体の右方向にある小さな藪に1台の軍用車両が停まっているのが見えた。そして、その車両の脇には、こちらに向かって発砲を続ける2人の兵士の姿も確認できた。一応、いま射撃に使われているような小火器での攻撃なら問題ないのだが、携帯SAMの普及した現代では、ただの歩兵によって撃墜される事も充分に考えられる。なので、私には悠長に構えている余裕など無かった。

「そこかつ！」

その為、私は半ば反射的に右のフットペダルを踏んで大まかに機首を車両の方へ向け、そこから細かい修正を素早く加えてロケット弾の照準を車両へと合わせていく。ただ、こういった咄嗟の遭遇戦で精密射撃を行うのは非現実的なので、実際はロケット弾の特徴である面で制圧する効果を利用して攻撃する事になる。そして、目標となった車両とHUD上の照準がほぼ重なったと判断した瞬間、サイクリック・スティックに備え付けられている兵装発射ボタンを押した。

すると、当然のようにロケット弾ポッドからはロケット弾が立て続けに発射されて派手な爆発と煙が着弾点を中心に広がって車両と兵士を包み込み、標的となった車両を傍らにいた2人の兵士ごと大きく吹き飛ばす。その結果、強烈な一撃を加えた後に残ったのは、

ロケット弾の炸薬と破壊された車両から飛び散った可燃物によって燃え上がる草木と、その中で無残な姿を曝す車両だった物の残骸だけであった。

「アダー83よりターゲット・エコーを攻撃中の編隊各機に告げる。最後の仕上げに取り掛かれ」

「了解」

地上からの銃撃が止んだ事を確認した私は、自分が破壊を担当する事になった早期警戒レーダー施設を同じように攻撃中の編隊各機に次なる命令を下し、それと同時に左のフットペダルを踏み込んで機首を再び施設のある方向へ向ける。そして、エンジン推力を上昇させて速力を上げると共にサイクリック・スティックを前方へ傾けて機体を前進させた。勿論、こうして施設へ接近を続ける間も周囲の警戒は怠らない。先程のように、何処に敵が潜んでいるか分からないからだ。

「アダー83よりアダー88。これより攻撃に移る。援護しろ」

「アダー88、了解。援護位置に就きます」

レーダー施設へ接近する途中でウイングマンに援護の指示を出す、彼の機体は直ちに援護位置へと移動してきた。そして、その動きを確認した私は手元の兵装選択スイッチを押して使用兵装を30mm機関砲に切り替え、未だ健在な目標を目視で探し始める。すると、ほぼ正面の位置に数両のトラックが固まって駐車してあるのを発見した。

「まずは、あれだな」

そう心の中で呟いた私は数両のトラックの内、自分から見て最も近くにあるトラックにTV照準装置で狙いを定め、目標を中央に捉えたところでサイクリック・スティックに付いた発射トリガーを引く。その途端、胴体右側面に搭載され、TV照準装置と連動して動く30mm機関砲が30mm弾を断続的に吐き出した。

そして、目標となったトラックへと吸い込まれるようにして命中し、その脆弱な装甲を軽々と貫通していく。一方、攻撃を受けたト

トラックの方は最初、多少の損傷はあったものの何事もなく佇んでいるように見えたが、一呼吸おいてから爆発して炎に包まれた。

『よし、次だ』

トラックが爆発して炎に包まれるのとはほぼ同時に私は次の目標へと照準を合わせると、再び発射トリガーを引いて30mm弾を叩き込んだ。すると、先程と同じように今度も一呼吸おいてから標的となったトラックが爆発して炎に包まれる。そして私は、その一連の動作を半ば機械的に繰り返し、さらに数両の車両を連続で破壊した。

「あれは何だ？」

その時、視界の隅に見慣れぬ影が映り、私は思わず声に出して呟いてしまった。確認を怠って反撃を受けるのは避けたかったので、私は改めて視界に入った見慣れない影に意識を集中し、その正体を確かめようとする。すると、それは多数のアンテナや通信装置を備えた装輪装甲車で、どうやら指揮車両のようだった。

ちなみに、その指揮車両には目立った損傷も無く、コクピットから見る限りでは無傷のように見えたので、今度は指揮車両に30mm機関砲の照準を合わせ、先程と同じ要領で30mm弾を連続して叩き込む。一応、先程のトラックに比べれば多少の装甲が施されているとは言え、車体上面の薄い装甲に無数の30mm弾を浴びせられて耐えられる筈も無く、穴だらけになった指揮車両は被弾し始めてから僅か数秒で破壊された。

ドンッー

今度は何の前触れも無く突然、後方から大きな爆発音が轟き、私は思わず音のした方を見ようと振り返った。しかし、ハーネスで体をシートに固定されている姿勢では見える範囲にも限界があり、爆発の起きたと思われる場所を直に見る事は出来なかった。

「アダー83よりアダー88。今の爆発は何だ？」

「こちら、アダー88。敵の歩兵を確認し、これを攻撃しました。その時、流れ弾が近くにあった何らかの可燃物に着弾し、爆発を引き起こした模様です」

「そうか。援護に感謝する」

私が爆発の正体を確かめるべくウィングマンに無線で尋ねると、彼は簡潔に状況を説明してくれた。そして、それを聞いた私は短く感謝の言葉を述べると、視線を機体の進行方向に戻して新たな目標の搜索を再開する。すると、11時の方角に倉庫らしき建物を発見した。その倉庫らしき建物の使用目的までは分らないが、我々に与えられた任務はレーザー施設の敷地内にあるもの全てを徹底的に破壊し尽くす事である。なので、この施設を見逃す理由は何処にも無い。

『確か、まだロケット弾が残っていた筈だ』

その事に思い当たった私は、兵装選択スイッチを押して使用する兵装を機関砲からロケット弾へと切り替え、同時に素早く残弾を確認する。すると、予想通り、僅かだが残弾があった。

それを確かめると、HUD上に表示された照準が倉庫らしき建物の屋根の中央付近にくるよう機体を操り、残っていたロケット弾を全て発射した。流石に、今度は目標までの距離が近い事もあり、ロケット弾は面白いように全弾が狙った通りの箇所命中し、建物の中央付近を派手に吹き飛ばして破壊した。しかし、私は更に追撃を加えるべく、兵装を再び機関砲に切り替える。

『よし、残弾は充分だな』

念の為、射撃を開始する前に機関砲の残弾を確認して充分に余裕がある事を確かめると、まだ多少なりとも原型を留めている箇所を中心に機銃掃射を浴びせていく。そして、機銃掃射が終わった頃には、攻撃を受けた建物は見るも無残な姿に変わり果てていた。だが、これで攻撃が終わった訳では無い。

「アダー83よりアダー88。我々の担当区域内の施設に対して再度、攻撃を仕掛ける。簡単には復旧できないよう、徹底的に破壊するんだ」

「了解」

ほとんどの弾薬を使い切った私に代わり、今度はウィングマンに

レーダー施設敷地内の掃討を行うよう命令を下す。同時に、私は機体を操ってウイングマンの機体の後方へと移動し、彼を援護する位置に就いた。すると、ウイングマンは初めに多少なりとも原型を留めていた通信用アンテナらしき構造物に狙いを定め、残っていたロケット弾を発射した。

その間、私は周辺の状況を細かく観察し、敵の反撃にも迅速に対応できるよう警戒を続ける。そして、その後も攻撃は徹底して行われ、少しでも原型が残っていると判断された物は全て攻撃した。

『ここまで破壊すれば、流石にレーダー施設としての機能は完全に失われただろう』

4機の攻撃ヘリによって徹底的に破壊され、見事に残骸と廃墟だけとなった早期警戒レーダー施設を一通り眺めた私は、そんな感想を抱いていた。勿論、この間も周辺警戒は決して怠らない。そして、ウイングマンによる攻撃が一段落した頃合を見計らい、新たな命令を攻撃中の全機に通達する。

「アダー83よりターゲット・エコーを攻撃中の編隊各機に達する。直ちに攻撃を中止して当該区域より離脱し、ポイント・ノヴェンバー5まで移動しろ」

「アダー88、了解」

「アダー84、ならびに87も了解です」

直ぐに指揮下にある3機のKa-50Nを操るパイロット達から返事が届いた。それを聞いた私は、大きく位置を変えずに機首方位を変更するホバリングターンを行う為にフットペダルを踏み込み、その場で機体を回頭させて機首をエルジア方面へ向けると、ここへ接近した時と同様に高度を30m以下にまで落とす。

そして、表示を切り替えたMFDに視線を移して自機的位置と帰投時の針路を確かめ、そこに表示されている帰投ルートに従って地形追従飛行を始める。程なく、同じレーダー施設の別区域を攻撃していた2機も合流し、再び4機で編隊を組んで国境線へと向かった。

『あれは……』

FARPを目指しての地形追従飛行を敢行している最中、ふと空を見上げると、幾筋もの飛行機雲が我々とは逆の方角へ向かうのが目に入った。おそらく、その飛行機雲は我々の開けた“空の回廊”からサンサルバシオン領内へと侵入してきた友軍の航空機部隊のものだろう。だが、彼らの任務や行動を私が気にしても意味は無い。だから後の事は彼らに任せ、我々は友軍の勢力圏へ退避する事に集中する。

「アダー83よりノヴェンバー・コントロール。着陸の許可を求めらる」

「こちら、ノヴェンバー・コントロール。着陸を許可する。方位184で進入しろ」

「アダー83、了解」

その後、何事もなく目的のFARPへと到達した私が離着陸時の管制を担当するオペレーターに着陸許可を求めると、直ぐに許可が下りた。それを受け、私は指示されたルートで着陸地点を目指すべく機体を操る。すると、前方の地上に人影が見え、その人物が私の操縦する機体を誘導してくれるらしい事も分かった。

なので、彼の誘導に従ってサイクリック・スティックとコレクティブ・レバーを慎重に操作して徐々に速度と高度を下げて近付いてゆき、着陸地点の手前でフレアと呼ばれるヘリ特有の着陸時の基本姿勢を取って前進する機体の速度を完全に殺し、そこで一旦ホバリングをする。

『どうやら、あちらも無事に帰投できたようだな』

周囲の状況を自分の目で確かめる為に視線を左右に走らせると、国境を越えた所で我々と別れ、もう1箇所早期警戒レーダー施設の攻撃に向かった4機のKa-50Nが既に着陸しており、次の作戦に備えて補給と整備を受けているのが見えた。しかし、私は直ぐに意識を切り替えると、自分が搭乗する機体の着陸操作に専念する。まず、計器類に目を走らせて機体各部に異常が無い事を確かめ、それから地上に居る隊員の誘導に従って機体をゆっくりと着陸地点

の真上にまで前進させる。そして、目標の位置へ機体が到達したところでホバリングに移行してからコレクティブ・レバーを慎重に押し下げ、今度は降下率にも注意を払いながら機体を徐々に降下させていく。

『タッチ・ダウン』

HUDに表示されている高度計の数字が0mを示し、軽い衝撃と共に機体が地面へと降り立った事を告げてくれる。それを確かめた私は、今は機体の正面に立っていて誘導を担当してくれた隊員にハンドシグナルで合図を送り、エンジン停止の動作に入る。そして、エンジンの停止と共にコクピット内に響いていた音や振動も徐々に小さくなり、それに釣られるようにしてローターの回転速度も遅くなっていくのが音と影で分かる。

こうやって一通りの作業を終えた私はハーネスを外してキャノピーを開け、久々に外の空気を味わおうとするが、周囲の喧騒とジェット燃料の放つ独特の臭いが飛び込んできて苦笑する。

「不思議なもので、こういった空気を感じている方が逆に落ち着くな」

「中佐。何か仰いましたか？」

すると、いつの間にか傍へと近付いていた隊員の1人が私の些細な呟きを耳にしたらしく、僅かに怪訝そうな表情を浮かべて尋ねてきた。

「いや、何でもない。ただの独り言だ」

「そうですか」

「で、補給と整備に掛かる時間は？」

私が尋ねると、彼は周囲を軽く見渡して他の機体の作業も含めたFARP全体の進捗状況を確認してから答える。

「遅くとも20分以内には完了します」

「そうか。なら、私は少し一服しているから後は頼む」

「はっ。了解しました」

そう言っただけで彼が了承したのを確認した私は彼にヘルメットを預け

てからコクピットの外へ出ると、離陸前と同じように機体の周囲を歩きながら自分の目と手で機体各部を順繰りにチェックしていく。そして、大きな損傷や問題点が見受けられない事を確かめ、その事をクルーチーフに報告してから短い休憩へと向かった。

Mission 5B (後書き)

ようやく、本格的な戦闘シーンとなりました。ただ、話の都合で活躍したのは攻撃ヘリだけですが……。とりあえず、ストーリーが進めば他の兵器にも活躍の機会は訪れるので、もう少し待っていたければ多少はエースコンバットらしくなると思います。

毎度のことながら、読みづらいとは思いますが、どうぞ宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4352m/>

ACE COMBAT 04 - Lost Victory -

2011年3月26日07時10分発行